

---

# 真白き雪の降る如く

天ヶ森雀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真白き雪の降る如く

### 【Nコード】

N50070

### 【作者名】

天ヶ森雀

### 【あらすじ】

嫁き遅れの美しい姫君に父王が無理やり決めた嫁ぎ先は、雪に閉ざされた北の辺境国だった。そしてその国の王には、前妃との間に小さな美しい姫がいた。彼女の名前はホワイトスノウ。やがて王妃に降りかかる謎の事故の数々。

幼い姫に隠された秘密とは？ 見知らぬ国の王妃となったシェリエルフィアに待ち受けるのは難解な試練か、はたまた幸福な結末か。

「白雪姫」の王妃ヒロインバージョンファンタジー。基本ラブコメ

の予定が、ミステリー調サスペンス風味強めになりました。

TIINAMI同時掲載。

## 彼女の受難

四頭立ての馬車が、一列になって走っている。

その数は両手に余るほど。

国境を越えたとたんに気温は下がり、森の中の道を雪が白く染めていた。

同じ轍を行儀よく進むその中ほどに、ひと際豪華な馬車があり、中では美しい姫君が思いつきりぶたれた顔を見せていた。

「ひーめー、そろそろ機嫌を直してくださいよう」

向かいに座る、ころころした体型の従者の少年が、情けなさそうな声を出す。

「だって、仕方ないじゃないですか。王族たるもの、国の為に嫁ぐなんて当たり前の話でしょう？ その為に今まで贅沢させて貰ってきたんだから…、いい加減諦めてくださいよう」

「ええい、そんなの分かっておるわ！」

くわつと牙を剥いて姫君は手にしていた絹のハンカチを引き裂いた。

「私<sup>わたくし</sup>とてそれくらいは重々承知だ！ しかし、父上がこの話を持ってきたのは一昨日だぞ！？ しかも城を出されたのは昨日の朝じゃ。いくらなんでも心の準備が出きぬではないか！ だというのに、この用意周到さは何だ？ 嫁入り道具一式、何ひとつ不足なく揃っておるのだぞ？ こんな騙し討ちもいいとこだ！」

「はあ、ごもつとも…」

連なる馬車は全て宝飾だのドレスだのはたまたそれをしまつ調度類だの、絢爛豪華な品がぎっしり詰まっている。売れば一財産は軽くできるだろう。

姫の迫力に押されて、従者は馬車の隅に縮こまる。とは言え、狭い馬車の中で、到底逃げる事も出来なかった。

「セティス。よもおぬし、知っておったのではなからうな？」

半眼になって睨み付ける姫君の低い声は、どんな魔女より空前絶後で恐ろしい。元々が美しい姫だから、尚更である。

「滅相もない。僕だって騙された口ですよ」

精一杯情けない顔をつくってみせるが、どうやら通じなかったらしい。

「どうだか」

フンツと鼻を鳴らして、姫君はそっぽを向いた。

「だって！仕方ないじゃないですか。姫は長女で御年二十歳を越えられて。下には妹姫様がまだ四人もいらっしゃるんですよ？ 姫が嫁いでくれなきゃ、下がどんどん嫁き遅れるって、そりゃあ陛下は胃を痛めてらしたんです。それなのに姫ときたら塔に籠って実験に明け暮れる毎日だったじゃないですか」

「それでも縁談を断った覚えはないぞ！」

「断らなくても不細工はイヤだとか、阿呆はイヤだとか散々文句をつけてらしたじゃないですかあ」

「それくらいは言わせる！ この私に顔も頭も紙より薄い奴に嫁げと言っのか！？」

「……………なまじ自分が顔も頭も良いもんだから」

涙目になりながら、従者セティスは恨めしげな目を向けた。

確かに姫は美しかった。淡い金髪は絹のように流れ、青い瞳は湖水のように深い理知を秘めている。紅さえひかぬのに唇は紅く、ほっそりとした身体は出るところが出て充分グラマラスだ。

が、何分性格に難がある。

とは言え自分が彼女の従者である以上、どちらにしろ彼女に従うしかない事は決まっているのだ。

セティスは彼女から見えぬよう、こっそりため息を吐いた。

まだ幼い頃から仕えているこのシェリエルフィア姫を、セティス

は決して嫌いではない。

姫君の中では群を抜いて美しかったし、その噂は近隣にも届くほどだった。但し、変人である噂も同じくらい届いていたが。

幼少の砌より神童と名高かった姫は、その頭脳もずばぬけて良かった。

家庭教師達の教える中身をあつという間に習得し終え、自ら錬金術の本を探して貪り読み、王女である地位と金を利用して、様々な実験に凝るようになった。初めは変わった趣味もあるものだと思われ、いして見ていた王や王妃、家臣達も、時が過ぎるにつれ頬が引きつるようになる。

何なんだ、あの姫は。塔にこもって怪しい実験とやらに夢中になるくらいなら、唇に紅でもひいて隣国の王子をたらし込めばいいのに。

直接諫言を申し立てる者もいれば、遠まわしに嫌味を仄めかす者もいた。

しかし、姫はそれらをピンヒールの踵で一蹴し、己のやりたいように振舞った。

元々知恵に長けたこの姫に、理論武装で勝てる者はいない。散々頭を痛めた王が、強硬手段として行ったのがこの縁談である。四つ隔てた北の国に、妃に先立たれたやもめの王がいると言う。これだけ離れていれば、ほぼ利害関係は成立しないし、王族同士の結婚として立場的にも問題ない。

後は如何に姫を騙くらかすか、だけである。

追い詰められていた王に、猶予はなかった。

「明日、そなたは嫁ぐ事が決まった」

一言の下、有無も言わず馬車に放り込む。

見送りの準備は秘密裏に、しかし当日は盛大に行われた。

姫の手を握った王の瞳に浮かぶのは、別れの悲しみの涙だったのか、はたまた作戦成功のうれし涙だったのか。その辺は定かではない。

（たぶん、両方だろうなー）

姫君片付け作戦の一端を担ったセティスは、心の中でひとりごちる。

人より抜きん出て頭の良い姫君は、城の中で異端だった。

はつきり言って浮いていた。

せめてその頭の良さを、政治が保身に使えれば問題はなかったのだろうが、姫の興味の対象は、もっぱら薬学や化学など科学的分野だったのだ。

膨れっ面も美しい姫の横顔を見ながら、セティスは諦念の笑みを浮かべる。

（まあ、いいや。僕はこの人と一緒にいられたら、どこでだって退屈はしないですむしな）

どうせ、国には身寄りがいるわけでもない。彼は天涯孤独の身の上だった。

「ちなみに」

唇を不機嫌に尖らせ、視線は窓の外に向けたまま、姫はぽつりと切り出した。

「その…相手の方はどんな方だ」

交通手段も通信手段もまだ少ないこの時代、付き合いがあるのは向こう三軒両隣の国がせいぜいである。四つ隔てて山なんか越えてしまえば、既に宇宙の果てに等しい。調べようとしない限り、情報は皆無である。

「えーと、ですね。お相手は北方主国カルダの国王リグナルド様で、御年32歳だそうです」

「私より一回り近くも上ではないか！ しかもカルダなんて辺境もいいとこだ！」

「…まあ、既婚ですしね。八十の爺イや八歳のお子様よりマシですよ。風光明媚な土地だそうですし、…あ、温泉も湧くみたいですよ？ いいなあ、露天とかあるかなあ」

「一体お前は何をしに行くつもりだ？」

シェリエルフィアは、半眼で従者を睨み付ける。

うつとり妄想に浸った事をセティスはコホンと咳払いでごまかし、渡された吊り書きの次の情報に進んだ。

「…あ、それですね…」

「何だ？ まだあるのか？ まさかその王は水虫ではあるまいな」

「いやいや、そこまでは存じませんが、北国ならそれはまず大丈夫でしょう。それより、…その、亡くなられた前の王妃様との間には、姫君がひとりおられるそうです」

趣味は盆栽ですとでも言う様な取って付けた様な言い方に、シェリエルフィアは黙り込む。セティスは気付かぬふりをして続けた。  
「漆黒の髪に雪のような肌、林檎のような頬の、それは美しい姫君だそうですね？」

「……………」

「シェリエルフィア様だつて、美しいものは好きでしょう？」  
複雑な状況を、とりあえずシェリエルフィアの耽美趣味を利用して誤魔化してみる。

「…ふん、田舎のやめこぶつきか。条件として悪くはないのであるが…父上も相当、私を厄介払いしたかったと見える」

無駄だった。

皮肉な笑いに、一抹の淋しさが混ざって聴こえるのは気のせいだろうか。

「まあ、良い。どんな髭もじゃら親父だろうと、私のこの美貌で、その国にも立派な実験室を作らせて見せるわ！」

強気にそう言い切った後、姫は黙して語らなくなった。

（結局実験は続けるんだ…）

まあ、宝石やドレスをねだるよりいいだろうか。何せ一年の半分が雪という寒い国らしい。都の様に夜毎に宴があるわけでもなし、やる事もあまりあるまい。もしかしたらまた変人の噂ぐらいは立つかもしれないが…。セティスの胸に一抹の不安が込み上げた。が、今は気にしても仕方あるまい。



馬車の中に静寂が満ちる。

彼女の立派な嫁入り道具を積んだ馬車は、彼女を乗せた馬車と共に、雪降る中をさくさくと進んでいったのであった。

## 興入れ

「ようこそいらつしやいました、姫」

堅牢な石造りの城の広間で、ぶんむくれた姫を迎えたのは、さわやかな笑顔の優美な青年王だった。

『おい、セティス！ 北国のやもめといえは髭もじやらもいいところではなかったのか！？』

『知りませんよ！ 姫が勝手にそう思ってたただけでしょ！？ 姿絵があつたわけじゃないんですから！！』

予想外の美形の参上に、姫の頬が赤く染まっている。

一回りも上なんて、腹の出たおっさんばかりを想像していたが、予想は大幅に外れた。

腹も出ていないし髭も蓄えていない。黒い豊かな髪を後ろに撫でつけ、少し切れ上がった瞳は涼しげで、頬骨の高さが気品を醸し出している。

背も高く流れるような物腰の王に、元々面食いの姫もまんざらではないらしい。

とは言え、姫とて一国の王女である。一通りの礼儀作法は身についている。

慌てて己の狼狽を押し隠し、仮面を被ったようにすつと表情を正すと、ドレスの裾をつまみ、腰を落として驚くほど優雅に挨拶の口上を述べた。

「初めて御目もじ仕る。アルゼハイム第一王女、シェリエルフィア・ラヴェニア・エル・アルゼハイムと申します」

絹のローブを翻し、結い上げた髪に挿した銀のティアラが輝きを放つ。白鳥のような細い首に、銀の鈴を散りばめた首飾りが、お辞儀する彼女の動きに合わせて、しゃんと音を立てた。

長い睫毛に縁取られたサファイアの瞳をまっすぐ向けると、天女のような笑みを浮かべる。

「慣れぬ土地で至らぬ事も多々ありましようが、どうぞ末永くお見知りおきを」

その場にいる家臣一同が、その美しさに深いため息を漏らした。

（うつわ、最上級の猫かぶり、久々に見たなー…）

後ろに控えたセテイスは、馬車の中での彼女との百八十度の豹変振りに、感嘆の息を漏らす。

彼女の変人振りが、たとえこの国に多少なりとも伝わっていたとしても、今の雰囲気では軽く払拭されただろう。当の王さえ彼女に釘付けになっている。

（まあ、美人は美人だもんな、本当に）

その美しさに、変人でも構わないと勇気を振り絞った求婚者もいないではなかったのだ。

後ろ盾のないこの国で、初めから敵を作るほど、彼女も愚かではなかった。

「こちらこそ、辺境ゆえ満足なおもてなしも出来ませんが、どうぞ思う事はなんなりと仰ってお寛ぎ下さい」

そう言って王は姫の手を取ると、膝を床について、その手の甲に口付けた。

婚姻成立である。

例え学者ほどの知識を持っていたても、さすがに嫁ぐのは初めてである。そのプライドの高さと、色事への興味のなさで、経験地は皆無に等しい。ほんのり頬を染めた風情が、彼女を更に可憐に見せていた。

（うわ！ あの姫が乙女モードに入ってる。これは本気か！？）

セテイスはがっくりとあごを落とすが、よく考えてみたらめでたい事には違いない。

美男美女のカップル誕生。

政略結婚万歳である。

（どうかこのままうまくいきますように。できれば姫の化けの皮が永遠に剥がれません様に）

胸の前で両手を組み合わせると、セティスは心の底からどこにいても知れぬ神とやらに、深く祈りを捧げたのであった。

が、しかし。

広間の空気が突然一変する。

玉座の正面にある大扉が薄く開いて、一人の少女が現れたのである。

「ホワイトスノウ！」

王は慌てた様に少女の名を呼んだ。家臣の者達も何故か慌てた顔をしている。

「リグナルド陛下、こちらは？」

「ああ、姫。紹介が遅れました。その…私の娘、ホワイトスノウです」

なぜか歯切れの悪い王の言葉に、いぶかしげな視線を向けながらも、シェリエルフィアは少女になつこりと微笑んだ。

「初めまして、ホワイトスノウ姫。私はシェリエルフィアと申します。どうぞ、よしなに頼みます」

確かに、馬車の中で聞いた通りの美少女だった。父親譲りなのか、黒く豊かに波打つ髪と、抜けるように白い肌。唇と頬だけがバラの蕾のような愛らしいピンク色だ。黒曜石の様に大きく濡れた瞳が小鹿のように可憐だった。

家臣達の手をすり抜け、少女はパタパタと広間を走り抜けると、父親である王の腰にひしとしがみついた。

「すみません、姫。娘はまだ幼くて…こら、ちゃんと御挨拶をしないか」

父親が頭に手を置いて諫めると、初めて少女はシェリエルフィアの方を向き、小さくちょこんとお辞儀する。

「構いませぬ。いきなり現れた女が母親と言われても、まだ混乱するだけでしょう。時間をかけていつか仲良くなれば嬉しゅうござ

いますわ」

「そう言っていたければ有難い。姫のようにお若い方に母親になれ等とは御不快でしょうが……どうぞ、仲良くしてやってください」

慈愛に満ちた目を娘に向けると、王はどこか苦しげに微笑んだ。

その表情に、不可思議な色が混ざっていた気がするのは気のせいだろうか。シェリエルフィアは微妙な空気の流れにひっかかりを覚えたが、それをそのまま口にするほど愚かではないので、浮かんた疑問符をそつと胸中にしまいこむ。

緊張感漂う広間がようやく和やかな空気に変わり、楽師たちが楽器を奏でだした。

王とシェリエルフィアは、玉座とその隣の後席に収まり、和やかに談笑を始める。

幼い姫は、乳母やらしき女が連れて行つた。

あたりは何事も無かつたかのように穏やかだ。

しかし。

広間の隅で自分の席に着き、供された御馳走に手をつけながら、セティスも内心呟く。

（あの姫、一言も口を利かなかつたな。それに）

炙った肉を、ワインで飲み干す。ワインは微かに酸味が混じり、甘い香気を称えていた。

（あの姫、うちのおひいさんを睨んでなかつたか？）

微かな疑惑が胸をよぎる。だが、セティスは頭を振ってその不安を打ち消した。

何せ、この国の城のそばには、露天風呂が七つもあるらしい。十日以上も馬車に揺られ通しなのだ。旅の疲れを癒すにはもってこいだろう。料理も旨いし姫も機嫌よさそうだ。

（まあ、シェリ姫も馬鹿じゃないしな。ある程度は自分でなんとかすんだろ）

まだ始まったばかりである。

結婚生活に多少の困難は付き物だ。

そうさつさと結論付けると、彼はおのが食欲を満たす事に没頭し始めた。

この先この小さい姫を巡ってどんな事件が待ち受けているか、彼はこの時全く知る由も無かった。

## 初めての夜

婚礼の宴は、たけなわの内にお開きとなった。

あまり外交らしき外交も少ない土地柄のせい、王の親類縁者も家臣一同も、飾り気のない素朴な言葉で新しい妃を歓迎してくれた。中には二、三、余所者であるシェリエルフィアにうるんな目を向ける者もいたが、そんな人間はどこにでもいるから許容範囲内である。何よりその美しさが功を奏して、大方の者は実に彼女に好意的だった。

そんなわけで、この夜は素晴らしくも祝福された一幕となる筈だった。

のだが。

宴会の翌日は朝が遅い。

下働きの者達はさすがにいつも通り立ち働いているが、主<sup>あるじ</sup>達が遅いと分かっている、その空気は比較的のんびりしている。

大きな欠伸をしながら、セティスものんびりした足取りで主シェリエルフィアの部屋へ向かった。

とは言え初夜の翌日である。王妃としての私室に彼女がいる訳はないから、部屋の様子見である。まだ手付かずの荷物もあるだろうし、誰かを手伝わせてそれを片付けなくてはならない。

しかし昨日の料理も今朝の朝食もなかなか美味しかったな。飯が美味しいのはいい国だ。国民が幸せになれる。

そんな事をつらつら考えながら部屋の扉を開いた。

「…あれ？」

「遅い」

「な、何で姫がここにいるんですか？ うわあ、しかも目に隈まで作っちゃって！ え？ え？ あまりに激しすぎて逃げてきたとか？」

「朝っぱらから下品な冗談を申すな！」

雷のごとき一喝が落ちる。

「え？ じゃあ、乙女の恥じらいから王様を殴り倒して逃げてきたとか！？」

「バカな事を言うでない！」

「だって姫、その昔、隣国の王子を蹴り上げて不能にしたじゃないですか」

「しとらんわ！ そもそもあれはあの酔っぱらいが無作法にもいきなり私の胸を触ろうとしたからだ！」

「じゃあ、なんでそんなに不機嫌なんですか」

「それは…」

部屋の中に沈黙が落ちる。

言い難そうにシェリエルフィアはあらぬ方向を向くと、ボソボソ口の中で語り始めた。

宴の後、侍女に案内されて、シェリエルフィアは王より一足早く広間から退室する。

何と言っても今夜は初夜である。寝室に入る前に色々用意をせねばならない。

酔いも回り、いささかふわふわした足取りでシェリエルフィアは湯浴みと着替えを済ませた。猫足の付いた浴槽には、薔薇の花が浮かべてあり、侍女達は丁寧に髪に香油をすりこんでくれる。

ほんのりと甘い香りに包まれ、薄絹を纏ったシェリエルフィアは、更に案内された国王夫妻の寝室に一人残された。



室内は少なめに蝋燭が灯され、暖炉の火だけが赤々と燃えている。薪が燃える芳しい香り<sup>かくわ</sup>を吸い込みながら、頭の中で房中術の講義を思い起こす。

即ち、初めての夜ははしたなくない程度に相手に全てを任せる事。決して恥じらいを忘れる事無く…、あれ？ 何だっけ？

必死で記憶を辿りながら、ベッドの天蓋から下げられた、薄い更紗の布を何気なく捲った。

途端、彼女は目を丸くする。ベッドの布団の中央が小さく盛り上がっているのである。

（リグナルド殿が先に来ていた？ いや、それにしてもこの盛り上がり方は小さくないか？）

そおつと掛け布を端から捲ると、白く細い腕と、波打つ黒髪が見える。よく見ると、猫の仔の様に丸くなって、幼い少女が眠っていた。

（ホワイトスノウ姫…？）

これはどう言う事だろう？

侍女が案内して来たのだから、部屋を間違えたと言うことはないだろう。しかし、これだけすやすや安眠している様子からすると、彼女がここに来たばかりとも思えない。父親に会いに来て眠くなったとか？ それにしたって、姫君付きの家臣はいなかったのだろうか？

はて。

この場合、自分はどんな対応をすれば良いのだ？

初夜の心得にそんな項目はあっただろうか。

…第二章第四項に、愛人が忍び込んでた時の対応はあったような…。

『決シテ動ジル事ナク、威厳ヲモツテ接スベシ』

…威厳ついても、相手は寝ちゃってるしな！。

ベッドの端に座り、どうしようか考えあぐねていると、扉が静かに開く音がした。

「シェリエルファイア姫…？」

正装を解いたリグナルド王が入ってくる。

「お待たせ致しました。その…」

「リグナルド殿」

ややぎこちなく打ち解けようとする王の、名を呼んで言葉を遮った。

「実は、先客がいる様です」

「は？」

「ホワイトスノウ姫が、ベッドで休んでおられます」

「な…！」

「姫君付きの家臣が心配して探しておられぬと良いのですが…」

「すみません！ たった今、誰かを呼んで迎えに来させます！」

「しっ！ せっかく気持ち良さそうに寝ていらっしやるのに、起こしては可哀想」

怒りもせず落ち着いた様子のシェリエルファイアに、リグナルドは僅かな安堵の表情を浮かべながらもがっくりと肩を落とすと、手近の椅子に座り込む。

「すみません、姫。何と言って良いか…」

そう言われても、何て言って良いのか分からないのはシェリエルファイアの方である。とりあえず「威厳、威厳」と心の中で呟いてみた。

そんな彼女の胸中を知ってか知らずか、王は面を伏せたまま、ぽつりぽつりと話し始める。

「貴女には…初めから知っておいて頂いた方が良いかもしれません。

その…、娘の事です」

「はあ」

致し方なく、姫は王のそばにある椅子に腰かけた。

「お気付きかも知れませんが、あの子は口がきけません。病と言う訳ではなく…母親を亡くした時の悲しみがあまりに深かったようで、それ以来一言も口を利かなくなりました」

「それはお気の毒に」

「私もついついあの子が不憫で甘やかしてしまい、あの子がそう望むならと添い寝するようにまして。貴女に来て頂く事が決まってから、もう、私の寝室に来てはいけないと話したのですが、理解させるには及ばなかったようです。本当に申し訳ない」

そう言つて、王は深々と頭を下げる。

「そんな…、幼い姫を胸中を思えば陛下のなさった事は当然の事、どうぞ顔を上げてください」

慌てて王の手を取ると、どこか傷ついた瞳が切なさうにほほ笑む。

「お優しいんですね、姫は」

「そんな事は」

思わず目をそらしてしまった。やばい、これは母性本能をくすぐるタイプだ。

「陛下さえは良ければこのまま、今日は姫とお休みください。私はその、自室に戻るゆえ…」

「しかし…」

「正直私も長旅で疲れております。それに…これから時間はいくらかでもあるのですし」

「姫…」

王はしばらく逡巡していたが、その申し出を受ける事にした。

シェリエルフィアの優しさを無下にしたくない。

「姫の部屋の炉は、あまり温まっていなくてもいいかもしれません。どうぞ、これを」

彼は自分が羽織っていた毛皮のローブを彼女の肩にかけると、部屋の外まで見送りに出る。シェリエルフィアは軽く頭を下げた挨拶をした。

「それでは、また明日…」

長身の彼を見上げる形のシェリエルフィアのおとがいをと持ち上げると、リグナルドはその唇に柔らかく口付けた。

突然の事に、姫は身動きもとれずその場に立ち尽くす。

（思ったより手が早い？ …でも一応もう夫婦なんだしおかしくはないのか…）

ぼんやりとそんな事を考えながら、支えられた背中に当たる手が暖かった。

「シェリエルフィア。はるばる嫁いで来てくれたのが、貴女で良かった」

彼女の耳元で、低い声がそつと囁く。

「おやすみなさい。また明日」

「おやすみなさい、陛下」

頬が熱いのは、酔いが残っているせいではないだろう。

彼の温もりが残る毛皮のローブを胸の合わせで握りしめ、シェリエルフィアは自室へ向かい廊下へと歩き出したのだった。

「うつわー、何ですか？ じゃあ、まだ姫ったら処…」

「るっさいわ！！」

さらに露骨な表現を重ねようとするセティスの頭を、ばーんと音高く殴りつける。

「いたたたた、…でも、それだったら何で目の下に隈なんか作ってるんですか？」

涙目で頭をおさえながら、素朴な疑問を口にだす。部屋が寒くて眠れなかったのだろうか。

しかし彼女の口からは意外な展開が吐き出された。

「それはだな」

ロマンティックな気分をピンク色に染めながら、姫は説明された自室である部屋に入った。王の寝室からはさほど遠くない。降りしきる雪に念のためと思ったのか、部屋の炉は燃えており、暖かい空気が流れていた。

ふふふ、今宵はなかなか良い夢が見れそうではないか。

鼻唄なぞ歌いながら、ローブを落として寝台に潜り込もうとしたその時、ひやりと足に当たるものがある。

「？」

ここにも他に子供が隠れていたりしまいな、そう思いながら布団を捲ると、何とネズミの死骸が転がっている。ご丁寧に血の泡まで吹いていた。

「~~~~~!!!」

酔いは冷め、ピンク色の空気は一遍で吹き飛んだ。悲鳴を上げなかったのがせめてものプライドである。

何だ、これは？

この国にはあるじ以外にベッドに何かが潜りこむ風習でもあるのか？

動揺するシェリエルフィアの頭の隅に、何かがよぎった。

何かがおかしい。

シェリエルフィアの第六感がそう呟く。

どうやら、シェリエルフィアの輿入れを喜ばぬものがあるらしい。能天気な浮かれている場合ではなさそうだ。

しかし、いったい誰が？

今日会ったばかりの者たちを順繰りに思い浮かべる。

誰が怪しいと思うほど、まださほど会話も交わしていない。

しかし、ただの悪戯にしてはタチが悪くないだろうか。

そんなこんなを考えているうちに、いつの間にか夜が明けてしまったのである。

「と言う訳だ」

「うわゝ、ネズミの死骸ですか。古典的だなあ」

「まったくだ。しかし、ただの悪戯で済めば良いが、そうとばかりも言いきれん」

「でも、たまたま毒餌を食べてしまった鼠が寒さを避けてベッドに

もぐりこんだと言う事はないんですか？」

ネズミは食糧庫の天敵である。自国でも毒餌を捲くなどの駆除は行っていた。

「仮にも王妃の部屋のと真ん中なか？ 部屋の暖炉はついていたのじゃ。寒かったら火のそばに寄るのが道理であろ。重い布団の中に潜り込むほどの体力があつたとは思えん。血の泡を引きずった様子もないしな。それに ネコイラズの匂いでもなかった」

自慢ではないが、薬物に関して姫の知識は生半可ではない。大抵の毒物には精通しているのである。

「…ああ、なるほど」

「どうやらこの国も私にとって平和とばかりは言い切れぬ様だな。私を害して何の得があるかは分らんが… と言って国にはもう帰れん。 - セティス」

「はい？」

「ただの悪戯で済むうちに、自衛手段を考えねばなるまいの？」

そう言つと、姫はにやりと世にも恐ろしい笑みを浮かべた。

「えー?! 僕は今日、かるーく荷物を片付けたら温泉に浸かりに行こうと思つていたのですが…」

「主の危機に温泉とはなんだ！ <sup>あるし</sup> そもそもこのころっころの体形では、湯に浸かるより前に浮いてしまつわ！」

「あわわわわ、やめてくらはい、ひゅえ~~~~」

ぷによぷによのほっぺたを左右にひっぱられ、セティスは泣き声をあげる。

「良いか？ そなたはその人に疑われにくいほにやほにやの顔とまるまるの体が秘密兵器だ。充分に生かして城中から情報を集めてこい」

やる気満々のシェリエルフィアの姿に、セティスは温泉を諦めて先を促す。

「わかりました。で、姫は何を？」

「決まっておるではないか」

ふてぶてしい笑みを浮かべ、シェリエルフィアはさも当然とばかりに言いきった。

「実験室をつくるのだ」

噂

窓の外に白い光の欠片が舞っている

寝台に横たわっているのはあれは母上だ

…ああ、これは母上が逝った日

姫、姫、幼くとも賢い私の娘

よく聞いて

母はもう長くない

だから、姫

お前が母の代わりに父上を守るのです

「いやあ。母上、死なないで」

わがママを言うでない。

そなたには為すべき事があるのだから

「ふっ、ふえ…？」

母様の代わりにしっかりと父上を守るのですよ

「…はい」

だから

母上と約束したから



私は何があっても父上を守ると決めたのに

優しかった母様

美しかった母様

あんなに父上と仲睦まじくいらしたのに

どうして父上は新しい方を迎えたりするの…？

「そもそも錬金術なんて趣味事体が怪しい事この上ないと思うんですよねー。せめてレース編みとかハンカチ刺繍くらいにしときゃあ可愛らしい感じで済むのに」

「…おぬしは情報を報告しにきたのか？ それともつまらぬ愚痴を聞かせに来たのか？」

「いででで、痛いです、姫」

茶色いふわふわの猫っ毛が覆う丸い頭を、ぐりぐりと両の拳でにじりながら、シエリエルフィアは額に青筋を立てる。

「言います！ 入手した情報を言いますよう」

「全く始めからおとなしくそうすれば良いものを…」

「…姫の初夜が延び延びになってるのは僕のせいじゃないのに」

「うるさい！ 黙れっ！！」

セティスの言葉は只でさえ不機嫌なシエリエルフィアの、火に油を樽ごと注ぐ形になった。

かなてこで口の端を擦られる。

「姫、やめて！ 姫！！ マジ死んじゃう！！」

「それ以上無駄口しか叩けぬのなら、そんな口ニカワで貼り付けて

くれるわ」

シェリエルフィアの瞳が妖しく光る。

「やーめーてー!!!」

防音を施した実験室に、絶叫が響き渡った。

姫にとっては晴天の霹靂である輿入れから、すでに一週間経っていた。

その後、何をしていたかと言うと実は何もしていない。

何故ならリグナルド王が流行りの風邪に罹ってしまったからだ。

不幸中の幸いとも言うべきか、冬と言う季節柄、急を要する政務はない様だが、新米王妃としてはやる事がない。

重臣の妻女達に茶会に呼ばれたりもしたが、王の病氣中とあつてはどうしても盛り上がり欠けてしまう。仕方なく猫を被りつつ適当にお茶を濁してお開きとなった。

その後、嫌がらせの様な事は起きていない。

シェリエルフィアにあてがわれた侍女や小間使いは、氣立てが良く、皆大変親切にしてくれる。元々愛嬌のあるセティスなどは、この国生まれの様に皆に馴染んでしまっていた。これもひとつの才能と言えるだろう。

とは言え、シェリエルフィアが手持無沙汰なのは致し方ない。家臣もさすがに王妃様にそう馴れ馴れしくするわけにはいくまい。彼女の持つ美しさも、近寄りがたい雰囲気を漂わせる一端となっていた。

せっかくだからと王に見舞いを申し出たが、「伝染<sup>うつ</sup>ってはたいへんだから」と強固に固辞される。

ならばホワイトスノウ姫と親交を深めようとしたが、こちらも体調が悪いと体よく断られた。

寢所を共にして両方がひいたのか、と勘ぐらぬでもなかったが、

今ひとつはしたない気がして聞くのは憚られる。

そんなわけで。

シェリエルフィアはそんな状況に落胆する事もなく、当初の目的通り実験室の制作に勤しんでいた。

と言つても、王妃の間の奥にある小部屋（恐らくは衣裳部屋かと思われる）に棚やテーブルを設置し、薬や機材、書物などを並べたくらいだが。

それでもビーカーやフラスコ、石綿と言った馴染みのある道具を手にとると、古巢に帰ったような気がして心が和む。シェリエルフィアは根っからの学究の徒であった。

触れられたくない薬壘類だけ、戸棚に入れて鍵をかける。

念のため、戸棚の前に目隠しとして大きな鏡を置いてみた。

これで簡単には目に付かないだろう。

この壘の中身に何かあつたら、はるばる運んできた苦労が水の泡だ。

その後、一端落ち着いた後、試しに最初の晩のネズミの死骸が口から吹いていた血泡を分析してみる。

トリカブトだった。

ネズミの毒餌にするには物騒な代物である。

しかし、森に群生する花だから、誰でも入手は容易だろう。

（ふむ…）

何にせよこのままでは情報が少なすぎる。

『己を知り、敵を知らずんば何とやら』と昔の人も言っている。

そんなわけで、この一週間、セティスには温泉に浸かりたいとこねるのを我慢させて情報収集に勤しませたのだが。

「皆、いい人たちなんですよねー」

「皆とは誰と誰の事じゃ。正確に申せ」

曖昧な物言いを好まないシェリエルフィアの眉間に皺が寄る。形状記憶のような顔面で、先ほどは何もなかった様な顔をしたセティ

スが、問われてすらすると答えだした。遊ぶのに飽きたらしい。

「まあ、僕が話を聞いたのは主に城内で働く者たちですね。従者、執事、近衛、侍女、掃除婦、賄い婦、馬丁、等等、あ、詳しくはこちらの紙にリストアップしているのでご覧下さい。で、この国は姫の予想通り外交も少なく、貴族は殆ど血縁関係にあります。前の王妃様も国王陛下の従姉弟君だったみたいですね。えーと、陛下の父君の妹君の娘さんになるのかな。この国自身はあまり取り立てて目立った産業もなく、取れるのは林檎や葡萄と言った果樹類。それから狩猟による毛皮類。自然環境が厳しい分どうしたって一族の協力体制は必要になるから、結束は固いようです。リグナルド陛下に関しては、総じて温厚で公正な人物であると専らの評判。しかも狩の腕はピカーで国民の人気も上々。まあ、あれだけルックスが良ければ当然という気もしますが…」

「相変わらず立て板に水とはこの事じゃの。たった一週間でよく調べたものじゃ…」

「ふっふっふ。特別臨時給金はずんてくださいね？」

「それはその情報の利用価値しだいじゃ」

「え〜〜〜!？」

唇を尖らせるセティスのぽっこりした腹の上に、銀貨を一枚置いてやった。

不満のうめきがぴたりと止む。

「とは言え姫、少し気になる事が…」

「何じゃ？ 遠慮なく申せ」

「それが…先ほど述べたような事に関しては、皆気持ちよく喋ってくれるのですが、…水を向けられると口ごもる事がありました」

「…ほう？」

「人気の高い国王陛下に比べ、前の王妃様と現王女、ホワイトスノウ様に関しては、皆一様に良い方だ、愛らしい姫だ、としか申しません」

「ふーん…、妙だな」

「特にホワイトスノウ様に関しては、もう殆どの人が石でも飲み込んだような無口さで」

「ふむ」

新しい王妃の心を慮って、前王妃の話をしないというのはまだ分かる。

しかし、現に存在している王女の事まで口ごもるのはやや妙である。

「辛うじて流れ者の馬丁から聞いた話しによりますと」

セティスの声が潜められる。

「勿体ぶるな、さつさと話せ」

「どうも、前王妃の死には不審な点があるやなしや…」

「そうなのか？」

「前の王妃様は、ホワイトスノウ姫を生んでから産後の肥立ちが悪く、殆どベッドから起き上がることはなかったそうです。それなのに、その日は何故か城の一番高い塔まで登り、足を滑らせて落ちたらしい…」

いぶかしむ様にシエリエルフィアは眉根を寄せた。

「しかもその場所には、その時…ホワイトスノウ姫しかおられなかったようです」

「……………」

「不審を察してリグナルド王が駆けつけた時には、姫はもう口が利けなくなっていたそうで」

「その話、…確かであるうな」

「ちょうどその馬丁が、塔から落ちるお妃様と、手すりから覗き込むホワイトスノウ姫を見たと言っていました。塔は普段人がおらず、王様が駆けつけた螺旋階段は一本道状態。馬丁に嘘を吐く必然性は今のところ見つかっていません」

「そうか…」

姫にリストを書き付けた紙片を渡しながら、ここまできて、セティスは次の言葉を口にするのを躊躇う様子を見せた。

「それから…この件には関係あるかどうか分からないのですが」  
「何じゃ？」

「…この国には『神隠し』の噂があるそうです」  
「神隠し、とな…？」

要は行方不明の事だろうか。にしても随分非科学的な噂もあったものだ、シエリエルフィアは一瞬目を丸くする。

「ええ。で、まあ、信憑性はあまりないのですが、若い女中に言わせると、ホワイトスノウ姫は神隠しにあったのではないかと」

「何じゃ、それは」

「つまりですねえ…」

セティスは厨房での会話を再現してみせる。

運ばれてきた食器を磨きながら、お喋り好きの若い娘はここぞとばかりに畳み掛けてきた。

『だって…変じゃない？ どうして普段ベッドから起き上がれなかったお姫様があんなところにいたんだと思う？ きつと、姫様が神隠しにあわれて、慌てて探しに出られたのに違いないわ！』

そばかすだらけの女中は芝居がかった様子で声を潜めると、セティスの耳元でそう呟いた。その直後に謹厳な女中頭が現れたので、慌てて無口な仕事に戻ってしまったが、今のところ邪気のない彼女が、唯一のホワイトスノウ姫に関しての情報源だった。

「雪深い国のせいかな、そう言った迷信ははびこってるみたいですね。雪の精が幼い子供を連れ去っちゃう、とか」

不慮の事故など、説明のつかぬ現象に迷信を被せるのはどこにでもよくある事だ。

大方、子を失くした親などが哀しみを紛らわせるために作った御伽噺のようなものだろう。

とは言え、何となく心の隅で引っかかるものがあつた。

もしかしたら、神隠しを思わせる何かがあつたのではないのか？ 少なくとも病身の母親が思わず床から抜け出してしまうような、あの少女の身に迫る危機があつたのではないか。

だとしたら、いつ、どんな風に？

そして一体誰が、何の目的で…？

シェリエルフィアが真剣に考え込む様子を見て、セティスの肉に埋もれた目が一層細められる。

「どうもあの姫君に関しては…一筋縄ではいかないかもしれませんよ？」

シェリエルフィアは答えない。

自分が言うのも何だが、とにかく美しい少女だった。

黒い豊かな髪と、やはり濡れた様な漆黒の瞳。透き通る様な肌と細い手足。年齢に不釣り合いな無表情さが、妖しい色気を醸し出している、と言えなくもない。

リグナルドが心から大事にしているのは傍目にもよく分かる。けれど、それ以上に親密な空気があの子にあるのも確かだ。探るとしたらその辺りだろうか。

しかし

（貴女が来てくれて良かった）

あれは彼の本心だろうか。

甘い口付けを思い出し、胸が微かに痛む。

自分は何か、危険な事を暴こうとしているのかもしれない。

シェリエルフィアの心が揺れた。

知らない振りをした方が良い事もある。

それくらいはシェリエルフィアだって知っている。

けれど、知らぬままでは落ち着かないし、胸の奥がもぞもぞするのだ。そう言う性格なのだから仕方ない。

（ともかく…あの姫が何らかのキーパーソンなのは間違いないさそうだの）

どこか虚ろにも見える、子鹿のような瞳。一切の不純物を含まないがゆえに、どこか激しく脆そう

「あ、姫ひどい！ 人に報告させながら僕のアップルパイ食べないで下さいよう」

不意に我に返ったセティスが大声を出す。

「いいではないか、少しくらい」

報告を聞きながら、自分の分はもうとくに食べてしまっていた。  
「ダメですよ。これは僕が今日のおやつにと楽しみにしてたものなんですから」

「お前はそんなだからどんどんころっところになるのじゃ！」

「寒い国に来たんだから、脂肪を蓄えないと死んじゃいますよう」

「この暖かい城の中にいて、死んだりするものか！」

「あゝゝゝ、このアップルパイだけは死んでも死守してやるゝゝゝ  
！！！」

セティスの決死の表情に、シェリエルフィアのシリアスな気分はどこかへ行ってしまった。

しかし、セティスが調理場から持たされたらしいアップルパイは本当に美味しかった。

調理の仕方もあるのだろうが、素材も良いのだろう。国の特産と  
言うだけはある。

病気で寝込んでいるらしい親子二人にも、すりおろして持って行きたい気がしたが、すぐに食べられなければ変色するだけなので諦めた。まだそこまで親しくはなっていない。

「まあ、良い。しばらく様子を見るかの」

ようやく自らのアップルパイを取り戻したセティスは、食われる前に食べとばかりに、一心不乱に食べている。

今日も今日とて雪が降り続く窓の外を眺めながら、シェリエルフィアは未だ見えぬ自分の未来にそっと想いを馳せたのであった。



## 樹氷の森で

「シェリエルフィア、良かったら遠乗りに行きませんか？」

積もる雪が朝日を受けて、窓の外はキラキラ輝いている。

十日ぶりにさわやかな笑顔を見せて、リグナルドはそう言った。

朝食の席でボリツジを掬っていたシェリエルフィアの手が止まる。

「…良いのですか？ まだ熱が下がってから三日しか経っていないのに」

「充分休みました。こんなに寝込むなんて本当に面目ない。一昨日から貯まっていた仕事も片付けましたし、その…」

口ごもりながら少し照れた様に目を伏せる。シェリエルフィアは可愛らしく小首を傾げて見せた。

「せっかく夫婦になったのに、あまり放ったらかしでも申し訳ない」「はあ…」

つい真抜けた返事になったのを、慌てて笑顔で覆い隠す。

王には悪いが、シェリエルフィアにとってこの十日間はまたとない好機だった。改めて他国に嫁いだ心構えもできたとし、どさくさに紛れて実験室も整った。近従達とも親しくなるとし、セティスのもたらず情報で、身の振り方も見えてきた気がする。

謝られては申し訳ないくらいだ。

しかし、リグナルドの申し出も悪くない。そろそろ直接色々聞きたかったところである。

「姫は乗馬のご経験は？」

「多少は…でも雪の中を走らせた事はありませんわ」

「それでしたら相乗り致しましょう。調度良い牝馬がおります」

ニコニコと王は嬉しそうに提案する。

狩りが得意と言っていたから、馬術にも腕に覚えがあるのだろう。「今日は晴れてますゆえかなり暖かいでしょうが、充分に重ね着してらして下さい」

あまりに人の好い笑顔に、高揚した気分がつい伝染した。

初デートか。悪くない。いや、まさに望むところだ。

何故か些か好戦的な気分でそう考える。ちょっぴり緊張したのか  
もしれない。

「楽しみにしておりますわ」

シェリエルフィアは極上の笑顔でそう答えた。

「どこまで行くんですの？」

セティスが聞いていたら砂を吐きそうなおしとやかな声で、尋ねる。

一応、目上の者に対する礼儀として、リグナルドには敬語を使っていたが、時々舌を噛みそうになるのを必死で堪えた。

「もう少しです。寒くはないですか？」

「ええ、全然」

馬上、リグナルドの腕の中で横座りになって、シェリエルフィアはにつこりと答える。実際、彼の細身に見えて遅い腕や胸、風を通さない様毛皮にビロードで裏打ちしたマントに守られて、全く寒くはなかった。もっとも被った大きな猫の効果もあったかもしれない。

馬はゆつたりと森の中を進んでいく。確かに大人二人が乗ってもまったく揺るがない、遅い馬だった。体型からすると農耕馬の血が混ざっているのだろう。

「すみません、馬車を立てれば良かったのですが、道と言うほど確かな場所じゃありませんでしたし……」

「構いませんわ」

確かに森の中に道らしい道はなく、時々木の間を野兎やテンと言った小動物の姿が走っていく。リグナルドは迷いなく慣れた様子で馬を進めていたが、慣れぬシェリエルフィアにはずっと同じ雪中の

風景が続くように見えた。もし置き去りにされたら迷子になるのは必至だろう。

しかし、あれこれ突っ込んだ事を聞くなり、供はいない方が好都合だ。

「それに：貴女と二人きりになりたかったものですから」

心の中で思った事を、背後から柔らかい声で言われて、シェリエルフィアの頬がうつすらピンクに染まる。

（え？ 彼も私に探りたい事が？ いやいや、探られて困る事など何もないぞ？ あ、でも戸棚の中身は聞かれたら困るかなー。いやいやいや、深い意味はないだろう。ないに決まってる。…ないよな？ 分かったから落ち着け、心臓！）

「あ、そこです。その大木を抜ければ…」

彼の言葉の途中で、広がった眼前の光景に言葉を失う。

彼らは小高い丘の上に立っていた。

眼下には見たこともない光景が広がっている。

これは、一体何なのだろう？ やや開けた雪原の上に、いくつも氷の像が立っている。

元々は樹氷、なのだろう。けれど、枝から滴る氷柱が風に舞う形で瞬時に凍ったのか、中心から円を描くように、いくつもいくつもその腕を伸ばしている。所々できた膨らみは花の形にも見えて可憐だった。

まるで。

氷の精が円舞を舞っている様だ。

真っ白な雪原と言うダンスホールで、優雅に、奔放に踊る精霊たちを一瞬の中に閉じ込めたような。

射す光の加減もあって、沢山の氷の精達はキラキラと光を放ち、一層幻想的な世界を作っていた。

「綺麗でしょう？」

初めて見る自然の不思議な造形物に言葉を無くし、ただ目を瞪るしかできない彼女に、王はそつと囁いた。

「ええ…」

「ここは風が吹き溜まるらしく、たまにこんな不思議なものが出るんです。貴女には是非、これを見せたかった。一年の三分の一は雪に閉ざされ、何の面白味もない国ですが…美しいものが全くないわけではありません」

王の声はどこか誇らしげで深い愛情に満ちている。

「陛下は…この国を愛してらっしゃるんですね」

シェリエルフィアは背後の彼の瞳を覗き込むように見つめ、思ったままを口にした。

「はい」

恥じらう事無く言い切った言葉に、それが真実だと信じさせる何かがあった。

「我が国は、姫のお国の様に華やかな文化もなければ財もない。ただの辺境の貧乏国に過ぎません。しかし、そこに住む人々は皆素朴で暖かい。私は 彼らを守る立場にいる事を誇りに思います」

切れ上がった眦を細め、どこまでも力強く彼は言い放つ。

「だから貴女にも…王妃である貴女にも、この国を好きになって頂ければ、それに勝る喜びはありません」

「私は…」

「急がなくて良いのです。まだこの国に来て日も浅い事ですし。

いずれ、貴女自身でその答えをお出し下されば」

「リグナルド殿…」

少年の様に初々しいだけの王かと思っていたが、そうでもないらしい。むしろ、王としての誇りと揺るぎない信念を持っている。恐らくは、為政者としても有能なのだろう。セティスからの情報は、彼が民に愛されている事を示していた。

「断言はできませんが…私もそうなたら嬉しく思います」

真摯な思いでそう言った。そうなたら本当にどんなに良いだろ

う。追い出された故郷を、この地にもう一度見つける事ができれば。  
「姫は…正直なお方だ」

やはり嬉しそうに微笑むと、リグナルドは彼女の肩にそっと抱き、  
ゆっくりと唇を重ねた。

シエリエルフィアも、今度はちゃんと目を閉じて受ける事ができたのだった。

「どうぞ、お腹が空いたでしょう」

その後連れて行かれたのは、森の中にある狩猟小屋である。王室専用とあって、見た目は小さいが、しっかりした石造りである。小屋の中には暖炉が赤々と燃えていて、シチュー鍋がかけてあった。テーブルの上には山盛りのパンやチーズ、果物も置いてある。

「森番に言つて用意させて置いたんです。ここならゆっくり話せるかと思つて」

手慣れているのか、彼が食事の準備をする手付きはテキパキとしていて無駄がない。

「寒いから暖炉のそばで食べましょう」

呆然と彼を見ていたシエリエルフィアは、慌てて指示に従い、火のそばにぺたんと座り込んだ。

王手ずからよそつた湯気の立つシチューを口に運ぶ。

「美味しい！」

思わず舌鼓を打ってしまった。

「お口に合つたようで良かった」

彼女の様子に満足げに微笑むと、彼もパンをちぎってシチューに浸す。

「森番の女将の得意料理です。姫が褒めていたのを伝えたらきっと喜びます」

「陛下は…変わったお方ですね」

「そうですね？」

「供も連れずに森を駆け回り、自らの手でシチューをよそって下さる」

悪戯めいた笑みに、リグナルドも面白そうに笑い返した。

「姫も…私の予想とはかなり違う方でした」

「え？ どこが？」

予想外の言葉に、つい素で反駁してしまう。被っていた猫にどこかボロが出ていただろうか。

「少なくとも…高貴な方から風邪のお見舞いに、摩り下ろした林檎を頂いたのは初めてでした」

「あれは…！」

照れと怒りで顔が赤くなる。

「レモンとか、柑橘系の果物の汁があれば変色しないんですが、寒い国にはないだろうと諦めていたんです。そうしたらセティス…私の従者が厨房で柚子を見かけたというから…」

「はい。蜂蜜もかかっていて大変美味でした。それにとっても嬉しかった」

王は相変わらずのニコニコ顔だ。

「お世辞は結構です。その…私が幼い頃、熱を出すと母がよくそうしてくれたもので」

暖かいシエリエルフィアの生国では、林檎はとれない。

他国からの贈り物である珍しい果物を、母が手ずから食べさせてくれた時の嬉しさは忘れられない。腫れた喉でも、それだけは身体にすうつと染み込む瑞々しさだった。

「優しいお母様だったのですね」

「…ええ、まあ」

どこか言いよどむ彼女にいぶかしむ様子も見せず、王は朗らかな声で続けた。

「ホワイトスノウも喜んでいましたよ。あの娘もあれが大好きで」

「そう、なのですか？」

「はい。嘘は申しません」

大真面目な声に、胸を撫で下ろす。喜ばないと思っていたのだ。

「それなら…良かった」

王女の名前が出たせいか、炉辺に奇妙な沈黙が落ちる。

「あ、あの、ホワイトスノウ姫はおいくつなのですか？」

取り繕うように、無難な質問をぶつけてみた。元々彼女の情報は少ない上に、あまりに基本過ぎる情報でセテイスにも訊きそびれていた。

「今年、１１になりました」

「え！？」

思わず目を丸くする。もっと幼いかと思っていた。王にしがみつくその背は、彼の腰辺りまでしかない。

「あの子は食が細いせいか小柄でして」

苦笑する彼を見て、はたと気付く。

彼は３２歳だと聞いている。と言う事は何か？ 二十歳そこそこで結婚したと言う事か？

いや、王族なら早婚など珍しくも何ともないが。

「失礼ですが…前のお妃様とはいつ御結婚なさったんですか？」

「１４年前になります。私が即位した１８歳の時で、彼女が２１歳でした」

暫し呆然としてしまう。１４年前と言えば、シェリエルフィアはまだ７歳である。自分がそんな物心着かない頃に、彼はもう結婚し、王として立っていたのだ。…しかも相手は年上かよ！ いや、それだつて珍しい事ではないが…何となくシヨックなのは何故だろう。でもそうだなー、見た目若いからつい忘れちゃうけど、結構年上なんだよなー…。

つい考え込んでしまい、思わず黙々と食事を進めてしまう。

「陛下の事だから、きつと仲の良い御夫婦だったんでしょうね」

ようやくそう語った現在の妻に、何故か王は苦笑して見せた。

「彼女は従姉弟で、幼馴染だったんです。生まれる前からの婚約者でもありました。彼女は元々勝気な性質タチでしてね、私は幼い頃から

ずっと泣かされ続けで、勝てた試しがありませんでした」

食後のブランデーをグラスに注ぎながら、喉の奥をくつくつ鳴らして笑う。

ごく自然な親しみのこもった言い方に、シエリエルフィアの胸は少しだけ締め付けられるように痛んだ。

（何をバカな。もういない方だぞ？ 今更何を私は…）

「彼女を…愛してらした？」

聞いてはいけない気がするのに、思わず聞いてしまう。

ブランデーグラスに暖炉の炎が映り、ゆらゆらと揺れていた。

「…かけがえのない人でした」

彼は淡々と答えた。

嘘を吐いてくれれば良いのに、そんな埒のない考えがふと浮かぶ。愚かな自分を振り捨てるように、グラスをあおった。

酔ったのかもしれない。いつのまにか目頭だけが熱くなる。

何故不意に頬を伝わる雫があつたのか、彼女には分からない。

シエリエルフィア自身より先に、リグナルドのほうが気が付いて驚いた顔をする。

言い訳も思いつかぬまま、彼女は自分の心を必死で探っていた。

何故涙なんて出てくるんだ？

彼が前王妃を深く愛していたから？

自分には入り込めぬ長い時間があつたから？

それとも、愛する者を喪った彼の悲しみが伝わってくるからだろ  
うか。

身体の機能がその動きの一切を止めてしまったかのように、身動き一つできず、彼女は美しい涙を流れるままにしている。そんな彼女を見て、リグナルドは困った様に微笑んだ。

「貴女が…泣く事はありません」

暖かい手が頬をそっと拭ってくれる。

その温もりがいとおしくて、甘えるように頬を寄せた。

額に、まぶたに、彼の唇が降ってくる。



（私は…彼が好きだ）

そっと、壊れ物に触れるように、胸の奥でそう呟いた。

降りてきた唇が彼女のそれに触れ、やがて深くなる。

息をするように、お互いの唇を求めた。

床に何枚も敷かれた柔かい毛皮がいつしか背中にあたり、大きな手は彼女の衣を剥いでいく。

白い剥き出しの手を伸ばして、彼の背中を抱いた。

大きな体に包み込まれ、蠟燭のように芯が熱く溶けてゆく。

獣のように本能だけで求め合う行為が永遠に続く様な気がして、シエリエルフィアは己の思考を躊躇いなく手放していた。

蠟燭の火は落ち、小屋の中は薄暗くなっていた。

予想通り、外はまた吹雪いてきた様だ。

暖炉の火を受けて赤く染まる白い肩に、そっと自分のマントを手繰り寄せてかけてやる。

穏やかな寝息を立てている彼女を見つめ、王は苦しげに呟いた。

「いつか…私の犯した罪も、貴女に語る事ができるだろうか」

薪は爆ぜる音を立てて、いつまでも消える事無く燃え続けていた。

## 未知との遭遇（前書き）

今更ですが、この物語はファンタジーです。  
予め御了承下さい

## 未知との遭遇

「そんな訳で、今日、おふたりは帰って来ないでしょうな」

見事に蓄えた顎鬚あごひげを気持ち良さそうに撫でながら、侍従長はフォッフォッフォと笑い声を上げた。

「なるほど、今回の遠乗りは侍従長殿の采配でしたか。お見事です」セティスは秘蔵の酒を注ぎ足しながら、感嘆の声を上げる。

侍従長の部屋は小さいながらもさすがに品の良い調度品でまとめられている。

飴色に磨きこまれた小さな円卓を挟んで、セティスと侍従長は歓談に耽たづなっていた。

「何と申しますか…リグナルド陛下は王としては申し分のない御仁なのじゃが、些か鈍いところもおありでしょう」

「と、申しますと？」

身を乗り出して、セティスは先をねだる。子供の様に丸い顔を輝かせて先を促す様子は、孫が御伽噺をねだるのにも似て、侍従長の目尻が下がる。

「昔から女性より狩や野外生活の方を好まれる性質で…あの容貌ですから女性からのアプローチはいくらでもあるのじゃが、とんと気付きもしない朴念仁での」

「いやあ、それを言ったらうちの姫だって、あれだけ見た目はいいのに、色事には全く興味がありません。あまの歳ですから…」

ふたりとも、主の事を言っているとは思えぬほど齒に衣着せぬ物言いである。

「まったく、王家の血筋を残すのも大事な仕事であるはずなのに、これまで全然積極的になろうとはせなんだ。困ったもんじゃのう…でもあんな美しい姫君を娶らばもう心配無用じゃ。ばんばん子をなしてもらわねばな！」

「おお！ 是非ばんばんと！」

既に何倍呑んだのか、侍従長の頬は既に赤く染まり、口はつるつる軽くなっている。元々、さほど権謀策略が跋扈する国でもないのであろう。セティスは絶妙なタイミングで相槌を打っていた。

「でも、この国にはホワイトスノウ姫だっていらいしやるじゃないですか。いざとなれば、将来姫君が夫君を迎えられてもいいのでは？」

そう言った途端、侍従長の人の良い顔に、微妙な影が走る。ああ、まただ、とセティスは心中で呟いた。ホワイトスノウ姫の名前を出す度にこんな表情をするのを、もう何人も彼は見ている。

「あの方は…王の血を継ぐには向かんじやろう。その、母君に似てお体が弱くていらっしゃるし…」

かろつじて平静を保ち、侍従長はそう言葉を結んだ。

「さて、今日はほんに楽しかった。お持ち頂いた酒も素晴らしかった。このハロルド、礼を申す」

深々と頭を下げて見せるのは、遠回しな退去命令だろう。ごり押ししてもしょうがないので、セティスは素直に椅子から立ち上がる。「こちらこそ。侍従長殿のおかげで楽しい時間を持ちました。貴殿の策略がうまく功を奏することを祈ってます」

侍従長は安心したように再び人の好い笑顔を見せた。

「それでは私はこれで。またの機会によりしくお願いします」

「おう。こちらこそ、楽しかった。また是非呑もうぞ、セティス殿」  
「殿は要りませんよう。若輩者なのにお尻がむず痒くなっちゃいます！」

愛らしく両手を左右に振るセティスに、侍従長は再び相好を崩す。

「それではセティス。これからよろしく頼む」

「はい。心から喜んで。奥様におつまみ美味しかったとお伝えください」

そつなく夫人にもフォローを入れ、セティスは侍従長の部屋を後にした。

「やっぱ、王女殿下の情報は入らんか」

くちくなくなった腹を撫でつつ、セティスはシェリエルフィアの部屋へ向かう。

出来れば姫が留守の内にできるだけ情報を集めたかったのだが、どうも行き詰っている。

王や国の話はいくらでも入るのだが、肝心のホワイトスノウ姫の話は壁にぶち当たってしまうのである。とは言え全く収穫がなかったわけでもない。

『あの姫は母君に似て…』

つまり、前王妃は身体が弱かったという事だ。これは初めての情報だった。産後の肥立ちが悪かった事は聞いていたが、その前から病弱だったのだろうか。しかし、下手に聞きまわればやはり周囲は警戒の色を示すだろう。

「どうしたもんかな」

呑気に節を付けて歌うように呟きながら、シェリエルフィアの部屋の戸を開けようとすると、誰かが先に入った痕跡があるのに気付いた。

扉に張っておいた細い糸は、主<sup>あるじ</sup>が出かけ、掃除婦の掃除が終わってから仕掛けたものだ。

（誰だ？）

セティスは一応音がしないようにそつと扉を開けると、中の様子を窺う。

部屋の奥、実験器具を並べた奥の間の扉が薄く開いているのが目に入った。

（やべ。あそこには誰も入れないと言われてるのに…）

慌てて小部屋の入り口まで音も立てずに走ると、辿り着く前に小部屋の中から息を飲むような悲鳴が聞こえる。掃除婦がホルマリン漬けの蛙にでも驚いたかと急ぎ駆け込むと、細く小さな背中が細かく震えているのが見えた。

「ホワイトスノウ姫…？」

豊かな黒髪を翻し、青ざめた顔に涙目の美少女が、セティスに氣付いて走り寄ってくる。ぶつかる勢いで抱きついてきたホワイトスノウを、マシユマロのように柔かい腹が抱きとめた。

「どうしたんですか、姫？」

やはり柔かい胸の辺りに顔を埋めたまま、彼女はカタカタ震える細い指で、振り返らず背後の大きな姿見を指差した。

「…鏡、ですか？」

豊かな黒髪をまとった頭がごくんとゆれる。

そこにあるのは、薬品棚の目隠し用に立てかけてあった大きな鏡である。

元からこの部屋にあったもので、衣裳部屋に鏡があってもおかしくないから、気にも留めていなかった。周りに縁飾りがある、幅1メートル、高さ1.5メートルほどの何の変哲もない大鏡である。

今は震える少女の背中と、どうしようか途方に暮れているセティス自身が映っていた。

「…大丈夫ですよ。何もありませんから、私と一緒にこの部屋を出ましょう」

出来る限り優しく、彼女に語り掛ける。

肩を抱くようにして部屋から連れ出すと、向かい合って膝をついた。

この口の利けない少女に無理強い禁物と胸に刻み込む。

「新しいお母様の部屋が珍しくて、見てみたかったですか？でも、あそこは難しいお薬や器具があるから、勝手に入っては危険です。今日の事は誰にも言いませんから、今度はお母様のお許しを得てから一緒に入りませんか？」

ゆつくりと話すセティスの声が届いたのか、どこか虚ろだった瞳の中にぼうつとした光が戻ってきた。

しばらく無表情な顔でセティスを見つめると、小鹿のように大きな目を濡らしたまま、少女は小さく肯く。

「あの鏡が怖いなら、今度姫様が来る前に、何か厚い布をかけておきましよう」

小さな手が伸びて、セティスの肩をぎゅっと掴んだ。肯定の意味だろう。

「確かに。このセティスが承りました」

ふつくらした頬にえくぼを作りながら、セティスは人畜無害にか見えない天然極上の笑顔を浮かべる。

青ざめた顔に少しずつ血の気を取り戻しながら、彼女は初めて小さく微笑んだ。

彼女が微笑むと、春の陽だまりのような愛らしさが満ちる。

（なんだ、割と普通の子じゃん）

長い都の王宮生活で美しいものに見慣れているセティスは、冷静にそう判断する。  
だから。

本当はこの小さい姫が、あの鏡の奥にどんな蠢く闇を見たのか、そしてどんな亡霊の声を聞いたのか、この時彼はまだ知る由もなかった。

（　　ねえ、この世で一番美しいのはだあれ…？）

見慣れぬ粗末な板張りの天上を見上げながら、ぱかっと急な覚醒に、シェリエルフィアは身じろぎひとつせず静かに混乱していた。

（…ここはどこだ？）

落ち着いて回想しようと試みる。

昨日は（どれくらい時間がたっているか分からないが、一応寝る前と仮定しておく）、リグナルドに連れられて樹氷を見に行った。

その後、森の狩猟小屋で食事をし、そのあと…

……………  
（うひゃあ！ あれは夢じゃないよな？ とうとう陛下と私は夫婦の契りを……………）

艶めかしい睦言が脳裏に甦り、顔が燃えるように熱くなった。

初めて触れた異性の体、汗ばんだリグナルドの肌、彼の手がシェリエルフィアの身体中を愛撫し、その度に甘い吐息が漏れた。時折リグナルドが彼女の名を呼ぶ声の甘さに、既に房中術の講義内容など吹っ飛んでいる。最後の方の記憶は途切れ途切れで、あるようなないような、ないようなあるような…

（は、はしたなくはなかったよな？ あんなもんだよな？ でも初めてだからよく分かんないし！）

一部の回想ですっかり時間軸が停止してる事にも気付かず、シェリエルフィアは恥ずかしさのあまり両手で顔を覆ってしまった。

「起きたよ」

「起きたね」

「笑ってるね」

「ニヤニヤ笑ってるね」

「頭打ったかな？」

「危ないねー」

「怖いねー」

「気持ち悪いねー」

自分の周りを取り囲むように降ってくる、あまりに呑気、且つ失礼な会話に、驚いて周りを見回す。

「うわあ！」

横たわるシェリエルフィアを取り囲むようにして、不思議な生き物が彼女に注目していた。

初めはセティスが悪戯を仕掛けて分身したのかと思った。けれど微妙に違う。ざっと目で人数を追うと、片手の指より少し多い。

丸い顔。小さなボタンのように丸い目。その姿は年配男性の外形



に近いが、その身長はどう見てもシェリエルフィアの腰辺りまでしかないだろう。

何なんだ、この国は！ 不思議な樹氷だけでなく、こんな不思議な生き物までいるのか？

「あ、驚いた」

「驚いたね」

「顔が赤くなくなったね」

「大丈夫かな？」

「ダメじゃないかな？」

「失礼な事を言うな！」

「あ、怒った」

「怒ったね」

「怖いねー」

「おっかないねー」

怖がられたので試しに雄たけびを上げてみる。

「がおおーーーー！！！！！！」

「きゃーーーー！！！！！！」

異口同音に悲鳴を上げながら、頭の上のトンがり帽子を握って目を隠す位置まで下げると、屈んでかたかた震え始めた。

何なんだ、こいつらは。

「……おい」

上半身を起こして話しかけてみる。どうやら、彼女は彼らのベッドを横つなぎにした上に横たわっていたらしい。両サイドにはベッドヘッドと足止めが可愛らしく並んでいた。

「きゃー、食べないでー！。僕は美味しくないですー」

「食べはせん。安心しろ」

相手が怯えるのに反比例して、シェリエルフィアには余裕が生まれてきた。

変な生き物だが、可笑しい。どう転んでも怖くはない。

「本当？ 食べない？」

おずおずと帽子の端から目を出して、不安そうに問いかける。

「約束する。お前らを食べたりはしない」

大真面目に約束すると、小人達はお互いに目配せしあいながら、帽子を元の高さにまで戻した。

「食べないってー」

「良かったねー」

「良かったー」

子供の落書きの様な顔が、笑いに綻ぶ。

「しかし、何でお前達はそんなに小さいんだ？　そう言う種族なのか？」

「俺達が小さいんじゃない。お前が大きいんだ」

言われてみればそうだった。大きい小さいは相対的な見方であり、今、この集団の中で異端なのはシェリエルフィアの方なのだ。

「そうか、それはすまないことを言った。そしてつかぬ事を尋ねるが、何故私はここにいるのだろうか？」

一番素朴且つ単純な質問をぶつけてみる。

「お前は雪の中に落ちてた」

「俺達の家の前に落ちてた」

「家の前は邪魔だから、ここまで運んできた」

「ここは俺達の家の中だ」

「生きてると思わなかったが、生きてたな」

「良かった良かった」

ほのぼのと緊張感のない声が唱和する。

落ちてた？　私が？　何故

突然、埋もれていた記憶が浮上する。

彼と契りを結んだ後、気だるい体で他愛ない話をしながら、いつの間にか眠りに就いた。

それからどれだけ経ったのか、小用をもよおして、不意に覚醒する。隣で眠るリグナルドを起こさないように、そっと掛けられていた毛布から抜け出し、衣服を身につけ外に出た。狩猟小屋は一間の

作りだったから、用を足すとしたら外だろう。

小屋の裏手は小高い崖だった。目的を果たし、もう一度あの樹氷を見ようと拓けた場所に出ると、雪はやんでいて綺麗な星空が広がっていた。毛皮のローブの前を掻き合わせながら、しばし未知の星座に見とれる。

その時不意に、背中に衝撃を感じ、彼女は崖から転がり落ちた。一体何が起こったのか、考える間もなかった。

（あの時、…私は突き落とされた？）

ざっと体を動かしてみるが、崖下に積もっていた雪がクッションになったのか、たいした怪我はしていないようだ。

（一体、誰が…）

しかし、周りで続けられていた小人達の会話に、彼女の思考は中断される。

「前にも大きいのが落ちてきたねー」

「でも、今回のより大きくはなかった」

「大きいより小さかった」

「髪の毛も蜂蜜の色じゃなくて、黒すぐりの色だった」

「可愛い子だった」

「可愛かった」

「…ちよつと待て。以前にも誰かが落ちてきたと？」

「そうだよー」

「俺達、親切だからちゃんと助けた」

「でも、あの子は傷だらけだった」

「可哀相だったねー」

黒すぐりの髪、と聞いて、笑わぬ少女の顔が浮かぶ。

先日セテイスは何と言っていた？

（この国には神隠しの噂が）

「それはこんな娘じゃなかったか？ こう、雪のように白い肌で、小鹿のような目をした…」

「そうそう。そんな感じだ」

「名前は言っていなかったのか？」

「一言も喋らなかった」

確証はない。しかし、あの小さい姫の可能性もないと言い切れない。

王領地なら、それこそ遠乗りに出かけ、事故にあったとしてもおかしくはない。

「…傷だらけと申したな。それは崖から落ちて就いた傷か？」

小人達はお互いに無言で顔を見合わせる。

もしかして、脳内で言葉を交わすネットワークでもあるのだろうか。

しばらくそうしていた後、ようやく一番歳嵩らしい小人が口を開けた。

「違う、と思う。雪はなかったけど、崖の下は草だけだ。それにあの子の背には火傷や、それ以外の古い傷がいっぱいあったよ」

「！」

小人の衝撃的な証言に、シェリエルフィアの甘い気分は一気に吹き飛び、深刻な表情が浮かぶ。

（傷だと？ しかも古い傷が沢山とは…一体誰が幼い子にそんなひどい事を…）

そしてもうひとつしこる謎が残る。

（その子を傷付けた者と私を突き飛ばした者は、果たして果たして同一犯だろうか）

血生臭い思考が押し寄せた。確証はない。まだ推測だけだ。

分かっているのは、ここに来たのが自分だけではないという事。

そして自分がここにいるのは他者の何らかの作為が存在する事。それが悪意かどうかは、これから調べねばならぬだろう。

（これは…そうそう呑気にしておられぬかもな）

ざわざわと彼女の一変した様子におのく小人達に囲まれながら、シェリエルフィアは真実を探る決意を新たにしていたのだった。

小屋の外では、まだ激しい吹雪が続いている。

## 王妃不在

雪は吹雪いていた。

窓の格子には、降り積もった雪が既に十センチは凍りつつある。

大きく張り出した厨房のスレート屋根の下には、剣の様に鋭い氷柱ができていた。

晴れた後、あの軒下を通るのは命懸けだろうな、とセティスはぼんやり思う。融けかけた氷の剣が落ちてくれば、下にいた者はかすり傷じゃすむまい。

もつとも真下は人の通らなさそうな裏庭だったから、その辺は考えて作られているのだろう。

シエリエルフィアがいなくなって三日が経つ。

先に帰っていないかと、青ざめた顔で王が帰城したのがやはり三日前の朝。共に泊まった狩猟小屋で、目が覚めたらいないので、慌てて探し回ったらしい。

けれど、彼女の姿はどこにもなかった。

帰城後、念の為、口の堅いもの数名で城中を探したが、やはりいない。

改めて森を搜索しようとした矢先にこの吹雪である。如何な慣れた者でも、一寸先も見えない状態では探しようがない。かえって二次災害に陥るのが関の山である。

それでも探しに行こうとするリグナルドを、皆で必死に止めた。

ここで王に何かあつては一大事である。

結局、シエリエルフィアの行方は分からないままだった。

誘拐なのか、失踪なのか、はたまた只の迷子なのか。前者2つならいいのだけど、セティスと思う。

それがどんな理由であれ、前以ての計画なら安全は確保されているだろう。

最悪なのは只の迷子だ。

土地勘のないシエリエルフィアが迷子になったら、この吹雪の中、とても無事でいられるとは思えない。

原因が分からぬまま王妃の行方不明を公表したところで混乱する事が目に見えているから、表向き、彼女はとある保養温泉施設でのんびり保養中という事になっている。

事実を知っているのは、王を含む一握りの人間だけだった。

主に搜索を担う狩人や近衛隊の隊長マーティン、及び侍従長のハロルド、家政頭のリゼラと言ったところだ。

とにかくにも、雪がやまぬ事には動きは取れない。

（しょうがない。ちよつと探りでも入れてくるか）

胸中呟いて、セティスはフォークを皿に置いた。

「ご馳走様」。やっぱここのアップルパイはすごく美味しいですね。いやあ世界ー！」

「あらあら、やあねえ、お世辞ばかり」

エプロンをかけた年配の女中頭に特上の笑みで礼を言うと、食べ終わったパイのカスを膝から振り払い、ナプキンで丁寧に手を拭う。

「それじゃあ、これ、持って行きますね」

「ああ、頼んだよ」

テーブルの上に用意の整った、銀器のティーセットが乗ったお盆を手に、セティスは厨房を後にした。

「失礼します、お茶をお持ちしました」

完璧な作法に則って、優美な彫刻が施された重い樫材の扉を開ける。

「ああ、そこに」

置いてくれと言いかけて、リグナルドは言葉を止めた。

個人的な書斎でもあるのだろう。そこにいるのは王一人である。

いつも来る給仕長ではなく、セティスが来た事に軽く目を見張る。礼を失せぬよう国王と目を合わせぬまま、セティスは執務室の隅

に置かれたサイドテーブルの上で、芳しい紅茶を淹れた。

さほど広くない執務室は充分に暖炉の火で暖められている。暖炉の横に少し空間をおいて設えられた、重厚な執務机についたまま、リグナルドはセティスの慣れた優雅な手つきを見守った。

ほんのり甘酸っぱい香りが立ち上るのは、干した林檎の皮が混ざっているからだろう。

「そちらをお持ちしますか？」

ティーコゼを被せたポットの横の、砂時計の落ちる砂を目で計りながら、セティスは伺いを立てる。

「そう…、だな。持ってきてくれ」

「畏まりました」

無言で給仕するコロコロしたセティスの姿を眺め、リグナルドは三日ぶりに小さな笑みを浮かべた。

「たいしたものだな」

「は？」

「一応うちの給仕長も頑固さが取り柄の男でね、他人に自分の仕事を任せることはあるとは思ってもみなかった」

基本的に王族が口にするものはすべて毒見を必要とする。毒物混入による暗殺を防ぐためだ。

同じ理由で給仕する者も基本的には変わらない。当然、信頼する者に全任する事になる。

ひよろひよろと背が高く無口な給仕長は、確かに他人に、しかも他国から来たばかりの人間に自分の仕事を任せる様なタイプではなかった。

「給仕長にはお咎めなき様お願いします。僕が無理を言って代わってもらったんです」

「ほう…」

無邪気さを前面に押し出すセティスの笑顔に、リグナルドは興味深そうな視線を向けた。

どうやって頑固な給仕長に取り入ったかは知らないが、单身姫に



付いて来た従者の少年が、人懐こいだけの無害な人物でない事はもう気付いている。

要は人目のないところで、国王陛下と内密に話したい、と言う事だろう。

シエリエルフィアが行方不明の今、彼がとるべき行動としては不自然ではない。

事情を慮って、リグナルドから話に水を向けた。

「すまないな、こんな事になって。君も心配だろう」

「恐れ入ります。陛下におかれましてもご心痛、お察し致します」

「ああ…」

苦笑する彼の顔色は、確かにあまり良くない。眠れぬのか、目の下にうつすら隈が出来ている。

「単刀直入に聞こうか。私にどんな用だ？」

書類に走らせるペンを止めてトレイに置いたのは、ちゃんと話を聞くと言う意思表示だろう。

「お話が早くて助かります。そう…お聞きしたいのは、シエリエルフィア様の輿入れを望まぬ方に、心当たりがおりかと」

齒に絹着せぬ直載な物言いに、リグナルドは眉を潜めた。

「確かに 今回の一件でそういう者がいる可能性は出てきたが、そうと決めつけるのも早計だろう」

まだ彼女の不在が事故か、それとも他者の故意に寄るものかも分かっていない。

「ええまあ、それだけに聞いたらそうですね」

含みを持たせたセイスの言葉に、リグナルドの表情が真剣味を帯びる。

「実は僕：誰にも言っていなかったんですけど、今までにもその兆候はあったんですね」

一応声を潜めてはいるが、どこか天気の話でもするような、呑気な口調だった。

「…詳しく聞こうか」

対して、リグナルドの声には一切の感情が排除される。

なるほど、有能な為政者の様だと、セティスは内心ほくそ笑んだ。本当に話が早くて助かる。

「これを」

懷から取り出したのは、数枚のカードだった。

少し古びた、何の飾り罫もないそれには、血を模した様な、赤黒く濁った色でメッセージが書かれている。

「国へ帰れ」「お前は知らない」「消えてしまえ」等々、わざと子供が書いたような崩れた文字は、悪戯と言うには却って陰惨な印象を残していた。

「この事を彼女は…?」

「いえ。姫は来訪初日に、ベッドの中にネズミの死骸があつた事しか存じ上げません」

しゃらつとんでもない事を答えるセティスに、リグナルドは軽く目を瞠る。

「さすがに初日は油断しまして。ネズミだけは処分しそびれました」

「…このカードを隠したのは何故だ?」

「犯人の真意が解らぬ内に、繊細な姫を怯えさせるのも如何なものかと」

嘘である。

シエリエルフィアに知らせたら、意気揚々と犯人探しに乗り出すに決まっているから、敢えて伏せた。

好戦的な主人を持つと、退屈しない分苦勞も絶えないのが悩みの種であつたりする。

「とは言え、今回の件が今までの悪戯に関連している様なら、このまま伏せておくのも得策ではないと思ひまして」

嫌がらせではなく悪戯と軽く仄めかしたのは、できるだけ事を大きくするつもりはないと言う暗喩だった。

「ふむ…」

リグナルドはカードに目を落として考え込む。

「そもそもこう申しては失礼ですが、誰が味方で誰が敵か解らぬ以上、迂闊に言の葉には乗せられませぬ」

肉に埋もれて丸い点の様なつぶらな目が、糸の様に細められた。

「もつともだ」

国王も同意する。

「そんな訳で内々に伺いに参りました。シエリエルフィア様を邪魔に思う方のお心当たりはありますでしょうか」

「……………」

リグナルドは黙して語らぬ。

それが答えだろうと、セティスは理解していた。

「この件はしばらく私が預かる。また、平行して雪が止み次第、王妃の搜索は開始する。それで良いな？」

「異存御座いません」

腰を深く折って頭を下げる。

「良い。下がれ」

言葉少なに王は退室を命じた。

「は」

セティスも大人しく執務室を辞去する。

結局、セティスの淹れた紅茶に王が口をつける事は一度もなかった。

（まあ、こんなもんだろうな）

空になったお盆だけを小脇に抱え、セティスは厨房へと続く小階段をゆっくり降りていく。

リグナルドは想像以上に手強く、底意を全く見せない。この純朴素朴な国の王にしておくのはもったいない程だ。

しかし、だからこそ今回セティスが撒いた種は、無駄にはならな

いだろう。

（あとは姫が戻ってくるかどうか、か）

最悪の事態はあまり考えていない。見知らぬ土地で迷子になるほど彼女も愚かではないだろうし、殺しても簡単に死ぬようなタイプでない事は、セティスが一番知っていた。誘拐ならとつくに何らかの要求があってもおかしくないだろう。

正直簡単に死なれても困るのだ。姫付きの従者である以上、失業の憂き目にあいかねない。それだけは御免被りたい。

（さて、次はどう転がるやら）

自分の撒いた種が実を結ぶことを祈りつつ、彼は能天気な顔をしながら、昼食を求めて厨房へと赴いた。

同じ頃、執務室の書棚の一部がすいと開き、長い黒髪の少女が部屋を覗き込む。

隠し扉からの客に、王は優しく微笑んだ。

「おいで、ホワイトスノウ」

名を呼ばれ、パタパタと軽い足音を立て、少女は父の腕の中に転がり込む。

「彼の話聞いていたのかい？」

どこまでも優しい父親の声に、少女は顔を伏せたままコクリと頷いた。

「そうか。…それで、これを書いたのはお前かい？」

顎先で机の上のカードを示すと、彼の言葉に少女はビクリと肩を震わせる。しかし、慌てた様子で大きく首を横に振った。

「そうか。分かった」

やはり国王はどこまでも穏やかなまま、娘をそつと膝の上に抱き上げた。

「何も心配する事はない。そなたは何があっても私が守ってみせる」  
言いながらその頬を包み込み、額へ、頬へ、唇へと口付けた。

少女は怯えた顔を見せながら、されるがままになっている。  
白く幼い手だけが、彼の背中をしっかりと掴んで離さなかった。

雪が止んだのは、その二日後だった。

久しぶりに見る陽光は、積もった雪に反射して眩しいほどである。  
その眩しさに目を眇めた城門の守衛は、どこからともなく聴こえてくる馬の蹄の音に首をかしげた。

はて、今日は何か来客予定があつただろうか。

食料や生活必需品を運ぶ商人や農家の馬車は厨房へ続く裏門から入るし、貴族達の登城日はまだ先である。こんな辺鄙な国では、他国からの来客もそうそうない。

一体誰が、と眩しい雪道に目を凝らすと、白い影が折れ曲がった道の先から姿を現した。

正確には、白馬に乗った、白衣の人物である。

その者は雪のように真っ白なローブを身に纏い、マントフード目深に被っている。

目前に迫る雪と同化した様なその姿に、門衛は一瞬唖然として己の職務を忘れた。

「何をしておる！ 開門せんか！」

馬上から一喝され、その迫力に思わず門を開けてしまう。

高貴な人物である事には変わりない。恐るべき威圧感である。

しかも美しい。

ぎくしゃくと門を開けながら、その人物に見覚えがあることに気付く。

（そうだよな。この方なら勿論開けるのが当然だよな）

体の動きに少し遅れて、認識が追いついた。

そんな門衛に「ご苦労」と軽く微笑むと、馬上の人物は馬に乗ったまま、城の前庭へと突き進む。

門衛と同じ流れで城内に入ると、広いホールでふわりと馬から飛び降りた。

その頃には、いつもと違う出来事に城中の者達がざわめき始めている。

ホールの中央に降り立った人物が、被ったフードを後ろへ下ろすと、溢れるほどの豊かな金髪が輝きを帯びて流れ落ちた。

軽く首を振って、髪の流れを整える。

すらりと立つその姿は、一幅の絵の様に美しかった。

都の宮廷画家がいれば「雪の女王」と名付けた幻想画を描いただろう。

突然の闖入者に、城中の者がホールに集まり、息を潜めて遠巻きに見つめる。

やや遅れて国王がその場に現れた時、彼女は嫣然とした笑みを浮かべて高らかに宣言した。

「王妃の帰還である！」

シェリエルフィアの笑みは、魔女のように美しく、その場にいる全て者を魅了したのだった。

## 帰還

「シェリエルフィア…！」

息を殺した、囁く様な声が王の口から漏れた。

大広間の中心から声の主を見つけると、シェリエルフィアは大輪の薔薇が咲いた様に顔を輝かせる。

「陛下！ ご案内頂いた温泉は素晴らしかったですわ。でも陛下の顔が恋しくても立ってもいらなくなり、つい吹雪が止んだのを良いことに、単身にて戻って参りました。どうぞ、女心の我儘とお許し下さいね」

花びらの様な赤い唇が紡ぐ、甘い言葉と恥じらいを含んだ表情に、度肝を抜かれていた何も知らぬ聴衆達は、事情を納得してさわさと失笑を漏らし始めた。

何と大胆な、または新妻らしき可憐な妃である事か。

普通なら人騒がせなと眉を潜めるところだが、シェリエルフィアの美貌が、戸惑いを苦笑に留めている。

「お妃様、その、馬をお預かりしましょう」

馬丁が恐る恐る進み出た。

「しかしその、なんだ、広間まで馬で来るのは…その、頂けねえな」主君筋に向かい、朴突な口調でとんでもない事を言い出す馬丁に、周りにいる者が息を飲む。

が、シェリエルフィアは一瞬きよと目を見開くと、直後、にっこり笑って手綱を手渡した。

「これは真に迂闊であった。以後重々気を付けよう」

長い金色の睫毛の下にある、濡れたサファイヤの様な瞳に見つめられ、馬丁は口を半開きにしたままぱーっとなる。

シェリエルフィアは広間に集まった一同をぐるりと見回すと、よく通る声で高らかに宣言した。

「皆の者、私の一存で騒がせ、迷惑をかけた。詫びのしるしと言つてはなんだが、このシェリエルフィアから皆に一献振る舞おう。今夜は無礼講を期待してくれ」

最後にリグナルドの方を向くと、「よろしいですわね？」と愛らしく小首を傾げて見せる。

「あ、ああ……」

未だ驚きから覚めぬ<sup>てい</sup>体の、国王陛下の返答に、城中の者達がワツと沸き返る。その様子を見て、シェリエルフィアは満足気に頷いた。

「シェリエルフィア、話があります」

かつかつと靴を鳴らして歩み寄り、真剣な表情で彼女の二の腕を取るリグナルドを、そつと押し返す。

「お待ち下さいませ。わたくしも陛下とお話したいのはやまやまですが、雪の中の遠駆けで、ドレスもブーツも雪まみれですの。せめて恥ずかしい姿で御前に侍りとうございます」

意識すれば、一度身繕いさせるとの言葉に、国王は改めて彼女の全身に目を走らせる。

確かにローブやマントの裾、ブーツの先は雪にまみれ、白さが一層寒々しさを感じさせていた。

「すみません、配慮不足でした。それでは一時間後に私の書斎においで下さい。」

そう言つと、返事も待たずにスタスタと歩き去る。つられて城内の者も放り出した自分の仕事の元に、三々五々と散り始めた。

風を切る様な早足で浴場に向かうシェリエルフィアを、セティスが転がる様に追いかける。

侍女達は先に湯浴みや着替えの支度に走らせたから、シヨートカット用の裏通路を通るのは二人だけだった。



「いやあ、よつぽど姫に会いたかったんですね、国王陛下は。たった一時間で着替えて来いなんて」

ころころした、鞆が跳ねるような体型でありながら、意外にセテイスの息は乱れていない。

そして貴族や王族女性の着替えは、通常三、四時間かけるのが普通である。湯浴み、着付け、化粧、髪結いなど、侍女が五人や十人たかってもそれくらいはかかるのである。これが公式な式典等になると、外交にも関わると言う性質上、半日以上かけるのもザラだった。

それが一時間とは、かなり急がせていると言える。

「まあ…一週間行方不明だった妻が、派手に凱旋したんだ。色々思うところもあるだろうな」

シエリエルフィアの口調は、まるで他人事のようだ。

「姫は姫で、急に美しい白馬の手配をしるだなんて、無茶ばっか言うし」

どんな手段を使ったものか、シエリエルフィアから秘密の指令がセテイスの元に届いたのは、昨夜もかなり遅くなってからである。セテイスは親しくなっていた馬丁を拝み倒して、使いの者に馬を託したのだ。

「王妃と呼べ、王妃と。…大体、お前のその誰でもたらし込める才能を、他にどう使えと言うのだ」

「人聞き悪い事言わないで下さいよ、王妃様。しかも何ですか、あの追加命令は。『広間に馬で入るから、城内の誰かに怒鳴らせる』なんて…可哀想にあの馬丁、あんな事言わされて真っ白に固まっただんですから」

流石に王妃を怒鳴りつけるなどできる筈がない。純朴な馬丁はおっかなびつくり、シエリエルフィアに注意を促すのが精一杯だった。「まあ、あれはあれで結果オーライだな。おかげで、私の帰還が大大的にアピールできたではないか」

つまりは城内に彼女の帰還を津々浦々まで知らしめる為の、彼女

自身が仕向けたお芝居である。

「やはりあの非常識な登場は、わざとなんですね？」

溜め息をつくセティスに、シェリエルフィアは振り返り、口の端を上げて笑ってみせた。まさに魔女の笑みである。

「こっそり帰って秘かに暗殺されては敵わんからな」

「まあ、そりやそうですけど…」

少なくとも彼女の命を狙う者がいるのは事実らしい。ならば、彼女自身の居場所を誰の目にもつまびらかにしておいた方が不振な事故は防げると考えたのだ。

たった今、城内に王妃の帰還を知らぬ者は居ないだろう。万が一その場にいなかった者がいたとしても、半日もあれば噂は駆け抜ける筈だ。

王妃専用の湯浴み部屋で手伝いの侍女達に迎えられたシェリエルフィアは、セティスに犬を追い払う様な仕草で手を振った。

「出迎え、ご苦労。後で呼ぶから次の準備をしておけ」

「…御意」

頭を下げたセティスの前で、侍女達の手に乗ってシェリエルフィアは扉の中に吸い込まれていく。

「お妃様、お召し替えは何を」

「ローズピンクのドレスを用意しとけ」

「じゃあ、香油も薔薇系がよろしいですわね」

「化粧はいらん。紅だけで充分だ」

「確かに王妃様はお肌がお綺麗だから」

「お湯加減は如何ですか？」「サツシェは何を」「髪飾りは」「履き物を」「本当に肌がお綺麗で」「きゃあ、こんなところに擦り傷が！」「白粉を用意して！早く！」

扉の奥からは女性陣の、戦場もかくやと言う凄まじいやり取りが聞こえてくる。迫力ある喧騒に微笑を浮かべ、セティスは命令内容を行使すべく、その場を後にした。

「お待たせ致しました」

先触れの使いを出し、リグナルドの私室にてシェリエルフィアがスカートの端をつまんで優雅に腰を折ったのは、きつちり一時間後だった。

少しくすんだピンク色のドレスは、飾りこそ殆どなくシンプルなデザインだったものの、光沢のある上質で柔らかい生地が、身体のラインを上品に際立たせていた。大きく真横に切り取られてふんだんにひだを取った襟元は、やはり下品にならない程度に肩の丸味と鎖骨のラインを浮き立たせている。豊かな金髪は頭頂部で柔らかく結い上げられ、一房だけ首の後ろから右の胸へと足らしてあった。

耳の後ろに挿した二オイスミレを模した簪が、瞳の色に映えて何とも可憐である。

につこり微笑むシェリエルフィアの美しさに、流石の王も軽く息を呑んだ。

「…どうぞ、おかけ下さい。その、簡単につまめるものを用意しておきました」

二人の間にある円卓には、小さなサンドイッチやカナツペ、タルトレット等が行儀良く皿に盛ってある。人払いをする為に、給士の必要なものを避けたのだろう。

「飲み物は紅茶で宜しかったですか？ それともカルヴァドスの方が？」

寒い土地では、暖をとる為のアルコール摂取は日常적인ものである。リグナルドは甘い林檎の蒸留酒カルヴァドスの壺を指し示した。

「ではお言葉に甘えて」

布張りのカウチに浅く腰掛け、彼の注ぐブランデーを品良く飲み干し、シェリエルフィアは人心地ついた様に笑った。

「よくぞ御無事で…」

感に耐えぬ様な表情でリグナルドは呟く。

「ええ。神に感謝してもしきれませんわ」

そつなく答えるシェリエルフィアに、我慢しきれなくなったのか、リグナルドはいきなり核心に切り込んだ。

「何があつたんですか？」

国王の瞳は鋭利で険しい。しかし、シェリエルフィアはその視線をかわすようにさりげなく顔を伏せた。

「分かりません」

けぶる睫を伏せながら答えた彼女の端的な言葉に、彼は更に切れ長の目を細める。

「どういう事ですか？」

「本当に分からないのです。あの後…陛下と…あの、睦みあつた後、不意に夜中に目が覚めて外に出たんです。もう一度、月光の下での幻想的な風景を見たくて…」

さすがに初夜の事を言う時だけやや口ごもつたものの、やがて青<sup>ファイア</sup>水晶の瞳が、遠くを見つめる様に焦点が遠くなる。

「崖の上に立ちましたわ。そう、星が沢山光っていた。その世界に魂を奪われかけた時、」

シェリエルフィアの瞳が苦悩で歪む。

「誰かに…背中を突き飛ばされたんです」

「！」

「運良く柔らかい場所に落ちたらしく、怪我らしい怪我もないまま気絶しておりましたのを、通りかかった森に住む者に助けられました。続く吹雪の日々で使いを頼むわけにもいかず、今日までを過ごした次第です」

部屋の中に重苦しい沈黙が落ちた。

「人間だと言う確証はありますか？」

思慮深げな瞳で王が問う。

「背中を押されたと言う事は相手を見てはいないのでしょうか？　そう…例えば森に生息する猿や鹿が角で押す、といった様な可能性は？」

人為が絡むとなれば、王族暗殺未遂としてただ事では済まない。

それよりは悪戯好きの野生の動物等の仕業であつた方が有難い。そう言う意味を言外に含んだ言葉だつた。しかし、シエリエルフィアは自分の膝に置かれた指先をしばらく見つめると、顔を上げ、きつぱりとした声で言つた。

「いえ。あれは確かに人の手でした。鹿の角なら硬さで分かりましようし、猿にしては押された位置が高過ぎます」

「……………」

再び部屋の中に沈黙が満ちる。

「陛下、こんな事を言つと身内の恥を晒すようで大変恐縮なのですが…今回の件、わたくし、生国の者の仕業ではないかと思つておりますの」

彼女の突然の告白に、王は目を見開いた。

「どういふことですか？」

「今回の婚姻、私が知らされたのは国を出る前日でした。今でこそそれは我が身にとつての幸運だつたと言えますが…あまりなやりようが不自然と言えば不自然。わたくしを…国から追い出し、尚戻つてこれぬよう、遠い地で殺したいものがあるのだとしたら…？」

「そんな事が…有り得るのでしょうか」

いぶかしむリグナルドに、シエリエルフィアはタイミングを計つたように言葉の爆弾を落とした。

「…わたくしの母は毒を盛られて亡くなりました。ないとは言ひ切れませんまい」

「な…っ」

「王宮内において権力争いは付き物、母はその争いに巻き込まれたのです。今も…私を邪魔に思うものがいたとしてもおかしくはありません」

窓の外に目をやると、雪に覆われた山や森が冴え冴えと白く光っている。

彼女の母親の死は、決して嘘ではないがそれだけでもない。軽い

含みに想像の余地を持たせて、同情を誘うのが狙いだっただ。

「陛下…わたくしにはもう帰る場所はありません。どうか…わたくしをお守り頂けないでしょうか」

震える唇が懇願の言葉を紡ぐ。いつのまにか、シェリエルフィアの頬は濡れていた。王族秘儀、涙線自由自在。

「シェリエルフィア…」

「わたくし…きっとホワイトスノウ姫とも仲良くなりますわ。姫は私の末の妹と同年ですの。姫ほど美しくはありませんでしたが、一番懐いてくれた可愛い子でした。きっと姫とも仲良くなれますわ」  
睫毛を震わせながらもいじらしく微笑んでみせるシェリエルフィアに、リグナルドは思わず駆け寄ると、その肩をそっと抱きしめた。  
「貴女のお気持ちはよく分かりました。…貴女が、無事で良かった」  
リグナルドの胸に押し当てられた、シェリエルフィアの瞳が不意に悲しげに揺れる。今のところ、事は望む通りに進んでいる。のに、何故胸が痛むのだろう。

「陛下、わたくしは…」

自分でも何を言いかけたのか分からぬまま、彼女の開きかけた唇は彼のそれによって塞がれた。

驚いたように目を見開いたシェリエルフィアの頬が、ほんのりと赤く染まる。

「あ、あの、陛下、…私…」  
わたくし

「…すみません、お疲れでしたね」

「いえ、そんな事は…」

抗うべきか、抗わざるべきか、シェリエルフィアの恥じらいを読み取ったように、リグナルドは優しく微笑んでみせる。

王妃は意を決して自ら腕を伸ばし彼の首に巻きつけると、そっと自分の唇を押しつけた。

だんだん深くなる口付けと、やがて始まる大きな手の愛撫を、無意識に心地よく受け入れてしまう自分にやや戸惑いながら、シェリエルフィアは流れに身を任せ、カウチに横たえられていった。

シェリエルフィアが新たに習得しつつある『色仕掛け』スキルを、必死で駆使しているその頃――

「ああ、やっぱりここでしたか」

朗らかな声を上げて、セティスは階段を登りきって塔の外へ出ようとしていた。

振り返ったホワイトスノウ姫が慌てて逃げようとするのを引き止める。

「お邪魔でしたら私が戻ります。姫はこのままここに……」

セティスの言葉を聞いて、幼い少女は戸惑う顔を見せた。

「大丈夫です。ここにいた事は誰にも言いませんから。……本当は来ちゃいけないって言われている事も知ってます」

屋上に設えられた小さな東屋の、積もってしまった雪を払いのけてベンチにセティスは腰掛ける。

「でも、たまにいらしてたでしょう？　僕、目はいいんです」

につこり笑うセティスを見て、ホワイトスノウはおそろおそろ近付いてくる。

「姫がここにいたいならお止めしませんし誰にも言いません。だって……誰にでも秘密の場所が必要です。そうでしょう？」

少女は肯定する様にセティスの上着の裾を掴んだ。

「僕も……ここにいていいんですか？」

首を縦に振るのに合わせて、豊かな黒髪がふんわり揺れた。

「ここは……眺めが綺麗ですね」

もう一度、黒髪がふんわり揺れる。

少女は吹き溜まりの雪を無造作に掬い取ると、セティスに差し出して見せた。

「雪、ですか？」

こつくり頷いてから、その雪を放り投げて、今度は自分を指さす。

「……ああ、姫の名前と同じですね。『白雪』」

その返事に、少女は嬉しそうな笑顔を見せた。

晴れ渡った空に、降り積もった銀世界が一望できるその塔の屋上は、確かに長い階段を登る価値がある。

「本当に綺麗ですね。でも晴れたとは言え、外はやはり少し寒そうですね。良かったら僕の上着をどうぞ」

言いながら彼は自分の上着を脱いで少女に羽織らせた。

確かに少し寒かったのだろう。彼女ははにかんだ笑みを見せて、もう一度彼の袖をぎゅっと掴む。お礼を言っているのかもしれない。セテイスは彼女の頭越しに、塔の縁と、その向こうに広がる銀世界に視線を走らせた。

この塔から、前王妃は落ちて死んだのだ。



## 氷面下

私<sup>わたくし</sup>には…、もう帰る場所はありません

そう言った時の、彼女の瞳は憂いで揺れていた。計算された演技なのだとしたら、大したものだと思う。

彼女 シエリエルフィアは、全く想像していたのとは違う女性だった。

その美しさも、したたかさも、時折見せる不意の素直さも。

月も凍る深夜、私室の安楽椅子に深く腰掛け、暖炉の炎の前でリグナルドは深く思索に耽る。

華やかな都で、あの美しさなら嫁ぎ先は引く手あまただったろう。それが、なぜこんな辺境に？ 帰る場所がないと言言葉と、何か関係が有るのだろうか。それとも…

本人から聞き出す事は難しいだろう。一回り近く年若いとは言え、一筋縄でいく娘ではない。それは、あの従者を見ても分かる。

何か、気付くだろうか。

いや、もう気付いているだろうか。

けれど、ここでやめる訳にはいかない。自分は、何としても娘を守ると決めたのだ。あの日、妻を喪ったあの塔で、自らの手を血に染める事を決意した。

パチリ、と薪がはぜて落ちる。

脳裏に亡くした妻の声が蘇る。

（リグナルド…、やっぱり、世界で一番美しいのはホワイトスノウだと思う…？）

細い幽かな響き。

確かに娘は美しかった。白い肌、赤い唇、黒檀の髪。その幼さをして尚、人を魅了してやまない何かがあった。そして、それが妻を追いつめた。

彼は娘を愛している。誰よりも深く、また、複雑な感情を孕みながら。

（貴方も 私よりこの子の方が大事？）

柔らかく歪んだ笑みが、隠された狂気を映し出す。

大切だった従姉妹、カティヴェルダ。

「……」

拳を固く握り締める。

込み上げる激しい感情は、憎悪だろうか。この荒れ狂う嵐にも似た想いは、決して消えないのだろうか。

殺意は沈殿する。

闇の中に。

悔恨と哀しみと絶望に包まれ、闇の中へと堕ちていく。

王として、命の手綱を握る重責を負う覚悟と勇氣は常にある。清濁を合わせ吞む事も苦ではない。

しかし彼女に関してだけは違う。一片の正道もなく、暗い利己的な私怨があるのみだ。

それでも、それだからこそ、誰にも殺意を気取られてはならない。あくまで事故や自然な形を装おわねば。

暗闇に踊る赤い火に目を凝らし、彼は再度決意を固める。

あの子は、誰にも傷付けさせはしない。

もうこれ以上、決して

「はあ~~~~、いやあ、本当にいいお湯でした。極東のまほろばにあると謳われる名湯クサツもかくやと言う感じでしたな。あ、これ、お土産です、どうぞ〜」

語尾に音符マークが付きそうな勢いで、セティスは艶々の肌を未だ上気させながら帰宅を報告した。

「まさに湯上がり卵肌というやつだな…」

つるんつるんのほつぺたを半ば感心したように見下ろし、シェリエルフィアは渡された瓶の中身を振ってみる。

やや大きめな酒瓶ほどのそれは、ちゃぽちゃぽと可愛い音を立てた。

「僕が浸かった温泉のお湯です。飲むなり何なり御自由に使ってみて下さい。あ、美肌にもいいらしいですよ、姫、そろそろお肌の曲がり角じゃあ…」

「王妃と呼べ。セテイス、よもや何故お前を城外に出したか忘れた訳では」

シェリエルフィアのこめかみがひきつり、目を細めた瞬間、セテイスは唇に立てた人差し指をあてる。

直後、王妃の私室をノックする音が響いた。

「あの、王妃様、実はあの、王妃様へ午後のお茶の招待が…」

侍女のマデイラがいつになく困惑した表情で、俯いた声を出した。

「…どなたからだ？」

嫁いだばかりの王妃に、拝顔の希望を出すものは少ない。内政において臣下との親交は重要だから、シェリエルフィアも可能な限り断る事はなかった。何より奥方達からどんな重要な情報が聞き出せるとも限らない。

取り次ぎの侍女も心得ていて、スムーズなセッティングと必要な前情報を惜しみ無くシェリエルフィアに献じていた。だから、こんな風に歯切れの悪い取り次ぎは初めてに近い。

「それが、その…東の塔にいらっしゃるエメラルディア様にございます…」

「エメラルディア様？」

耳に遠い名前だった。記憶力には自信があるから、聞いた事はない筈だ。しかし、いくら広いとは言え城に在ってその名を聞かないのも不自然な話である。

「どう言った方なのだ？」

マディラをこれ以上動揺させぬよう、優しい声で促す。

「その…エメラルディア様は、ホワイトスノウ様の母君、カティヴェルダ様の御母堂様にございます」

シェリエルフィアの瞳が僅かに見拓かれる。

成る程、前王妃はリグナルドの従姉、つまり先王の妹の娘だったわけだから、その母親が城にいたとしてもおかしくはない。リグナルドの両親は流行り病で亡くなったそうだから、姑の立場に近いだろうか。

亡き娘の後釜に座った女がどの程度のものか当然興味はあるだろうし、二人の立場を鑑みればマディラの複雑そうな表情も解らぬではない。

「わかった。ご招待お受けすると答えてくれ」

「…はい」

辛うじて固い声を返し、マディラは扉の外に消えた。

「姫…」

「王妃と呼べ。何だ？」

「手土産に城下で買った温泉饅頭、持っていきますか？」

「いらんわ！」

ふかふかの丸い塊は、目鼻を付ければ従者そっくりになりそうな形をしている。その籠一杯のふかふかを、手にしたセティスごと部屋から蹴り出すと、シェリエルフィアは訪問の準備を始めるべく侍女達に召集をかけはじめた。

「…美味しいのに」

殊更残念そうな顔も見せず、セティスは主の新たな戦いにさっさと我不要を決め込んで、その場を後にする。

「耳にした彼女の件を報告しようかと思ったけど…まあいつか、百聞は一見に如かずっーしな」

彼の眩きを聞いたのは、城の廊下に並ぶ壁と飾られた鎧だけだった。

「まあまあ、良く来てくださったわね。嬉しいわ。噂通り、何て美しい方かしら。さあ、こちらに来てお座りになつて」

ニコニコと少女の様に可憐な微笑みを浮かべたその部屋の主は、若い頃はさぞかし美しかっただろう上品な顔立ちに、うつすらと柔らかな薄化粧を施していた。通った鼻筋や大きな黒目がちの目は、確かにホワイトスノウやリグナルドとも通じる血を感じさせるものだった。その豊かな白髪がなければかなり若く見えるのではないだろうか。

「ご挨拶が遅れ、まことに恐縮至極にございます。シェリエルフィアと申します。以後お見知りおき」

立つたまま深く頭を下げるシェリエルフィアに、老女は明るい声を出した。

「そんな、本当は私から伺うのが礼儀でしょうに、ごめんなさいね、私、足が少し悪くて…」

見れば椅子の背に杖が立て掛けてある。しかし、老女の朗らかさはそんなハンデを感じさせぬ屈託のないものだった。シェリエルフィアは用心深く椅子に腰かけて、低い櫛のテーブルを挟んで、向かい合う。

「さ、お茶をどうぞ。カモミールは好きかしら」

「ええ」

老女が片手を軽く上げると、側付きの侍女が音も立てず給仕を始めた。

「嬉しいわ。ここにはあまりお客様がいらっしやらないものだから、わたくし、すっかり退屈していましたの。シェリエルフィアさんはいかが？ この国は退屈じゃなくて？」

「いえ。様々な歓迎を頂き、とても楽しく過ごさせていただいております」

そりゃあもう、ネズミの死骸を置かれたり、突き飛ばされたり、

退屈する暇はあまりなかった気がする。が、もちろん口に出しては言わない。

「そう、なら良いのだけど。リグナルドもねえ、王としては有能なんでしょうが、夫としては些か堅物なところがあるから……」

「そんな事は」

つい俯いてしまったのは思わず色々思い出してしまったからだ。  
あんな事やこんな事を。

……むしろ手は早いほうじゃないだろうか。さりげなく事を誘導する手腕は実に大人のそれで、いつも気が付けばペースに乘せられている気がして恥ずかしくなるのだが。

「いいわねえ、初々しくて」

「……恐れ入ります」

そんなシエリエルフィアをエメラルディアは愛し子を見る目で見つめる。

シエリエルフィアからすれば、かなり拍子抜けだった。こんなに好意をもつて迎えられるとは思ってもしなかったのだ。もっと、探り合いのようなものがあると思っていた。

いや、第一印象でこの老女を判断するのは早計かもしれないが。

「よかったわ。貴女のように美しく若々しい方があの子に嫁いでくれて。こんな事を私が言うのも僭越なのだけど……ホワイトスノウのことも、どうか優しくしてあげてくださいな」

「ええ、もちろん。今、どうすれば仲良くなれるか、考えているところですよ」

「それを聞いてホッとしました。いえ、年寄りの杞憂とはわかっていただけ」

「エメラルディア様……」

ほのぼのと温かい空気が部屋中に満ちる。

「私は……あの子にあまり会わせてもらえないから……」

「そう、なのですか？」

まつ毛を伏せて独り言のように呟く老女に、踏み込まない程度に

小首をかしげて見せた。思慮深げなその瞳には、亡き娘への思いが宿っているのか、少し寂しそうにも見える。

しかしその空気を振り払うように、エメラルディアは再び明るい顔を見せて手のひらを胸の前で合わせた。

「ああ、そうそう、シェリエルフィアさんはタルトタタンを御存知？ リンゴを使ったお菓子なのだけど」

「いえ、アップルパイとは違うのですか？」

「まあ！ じゃあ是非召し上がって頂かなきゃ！ コツクのネリイはこれが得意なのよ。きつと今日も焼いているはずだわ。ねえ、セシリー、ちよつと厨房に行って聞いてきてくれないかしら」

「エメラルディア様！」

止めどないエメラルディアの思い付きに、侍女が思わず制止の声を上げる。

「シェリエルフィア様もお困りですよ！」

「あら！ そんな事ないわよねえ？」

老女の無邪気な笑みに、シェリエルフィアも相好を崩した。

「そこまで仰有るならぜひ。侍女殿にはお手数ですが」

につこり笑う王妃にさすがに逆らう事も出来ず、侍女はエメラルディアの部屋を出ていった。

「うふふ、これで邪魔者はいなくなったわね」

老女は優雅にティカップを傾けた。

「エメラルディア様……？」

「あの侍女はリグナルドが付けた子でね、何でもあの子に報告するのよ」

つまり、菓子は口実で二人つきりになりたかったと言う事か。

カチャリと音を立てて老女のカップが皿に戻される。

「セシリーが戻る前にひとつだけ言わせて」

侍女の名を唱えながらエメラルディアは小声で囁いた。

「エメラルディア様？」

「あの子、リグナルドは賢く勇敢だわ。幼い頃からそうだった。で

も、気性が激しい一面があつて…その正しさが人を追い詰める事もあつたの。私、カティにも何度も言つたのよ？ 気を付けるのよって…」

遠くを見るような目に透明な雫が浮かぶ。

「あなたも、気を付けて。それだけが言いたかつたの」

「エメルディア様は…何かご存じなんですか？」

老女は答えず、謎めいた笑みを浮かべるだけだ。

「もしご存じなら…」

「だめよ」

「え？」

その時、扉が開く音がして侍女が銀盆をささげながら戻ってきた。「お待たせいたしました。丁度、昨日のがあつたので切り分けてきました」

「まあ、よかった。シェリエルフィアさん、このお菓子はね、日を置いたほうが美味しいの。さかさまにしておいておくのがコツなのよ？ そうすると事で焼いた林檎の果汁が台生地にしみるのね」

既に先ほどの不可思議な様子はなく、初めの無邪気な老女に戻っている。

飴色に焼かれた林檎が綺麗に並んだそのケーキは、確かに美味しかった。セティスが見たら我もと騒ぎまくるだろう。それとも厨房でもう食べただろうか。

しばらく他愛無い話で談笑し、老女の部屋を辞去する。

「ねえ。とても楽しかつたわ。また遊びに来てくださる？」

「はい。ぜひ伺います」

「そうして頂戴ね」

また来れば、更に何かが聞き出せるかもしれない。それに…

「今日はお会いできて楽しかつたです。また是非伺わせて下さい」

午後の陽が傾き始め、老女の顔を紅く染め輪郭をばやかしている。彼女の笑顔が何か違うものに見えて、シェリエルフィアは不意に暗闇に落ちた気分になる。



「待つてるわ」

その言葉を最後に、歩き出したシェリエルフィアの背後で扉はパタンと閉じられた。

「あ、良かったら食べますか？ 豆のジャムが挟んであつて美味しいですよ？」

セティスは籠の中の饅頭を一個渡そうとして、ふと思い直す。一番大きそうなのを二つに割って、先に半分を自分の口に入れて見せた。

もぐもぐと飲み下してから、にこにここと半分を差し出した。

「いかがですか？」

豊かな黒髪の少女は、その半分を受け取ると黙って小さな口に運び出す。上品に飲み込んでからセティスの顔を見上げて嬉しそうに笑って見せた。

「よかった。お気に召しましたか」

こつくり頭を縦に振って、少女はセティスの袖をぎゅっと握りしめた。

## 氷面下（後書き）

温泉饅頭は意識です。蒸しパンのようなものだと思って頂ければ幸いです。

## 昼と夜

石綿の上で、フラスコが薄い蒸気を上げている。火は細く、青い液体は沸騰する程ではなく、小さな気泡が沸いては消えていた。

そこにルビー色の液体をそつと注ぎ込む。途端、フラスコの中身は一齐に沸き返り、数秒後には透明な液体が出来上がっていた。

手のひらで蒸気を扇ぎ、鼻を近付けると無臭であるのが分かる。味もない筈だ。

久しぶりに合成した無味無臭の薬に、シェリエルフィアは満足そうな笑みを浮かべる。完璧な仕上がりだった。

「そうしてると本当に魔女の様ですよ」

後ろに控えていたセティスが呆れた声をだしたが、シェリエルフィアは一顧だにいなかった。

「そんな事よりあの小さい姫はちゃんと来るんだろうな」

「もちろん。僕たちすっかり仲良しですから」

ニコニコと邪気のない笑みを浮かべるセティスの頬つぺたを、シェリエルフィアが手にしたピンセットでつまみあげる。

「いたたた！ 何しゆるんですか！？」

赤くなつた頬を抑えながら、セティスは悲鳴を上げた。

「いや、つい。お前の笑顔はどうも胡散臭くてな」

「ひどいですう。姫の御為に、一生懸命頑張ってるのにい」

つつい以前の癖で、二人きりの時は「姫」と呼んでしまうが、慣れているせいかシェリエルフィアも気にしない。いかにも恨めしげに唇を噛む姿は人畜無害な少年そのものだ。しかし長い付き合いのシェリエルフィアには通じなかった。

「その割には私が行方不明の間、心配し過ぎて身が痩せ細つた様子もないな」

おらおらとピンセットで掴んだ豊かな頬肉をふるふる揺らせてみせる。

「いひやひやひや、そ、それはほら！ 姫なら殺しても死なないって信じてたしっ！」

「私は化け物かつ！」

頭ひとつ低い彼の、頭頂部を遠慮なく殴り付けた。

「暴力反対」

じりじりたんこぶの浮かぶ頭を手で抑えながら、涙目で睨む小姓の姿に、シェリエルフィアはとりあえず何となく溜飲を下げてニヤリと笑った。

「さて、お茶会の準備を始めようか」

形式的且つ簡略化した先触れのと、幼くもどこか香気漂う美しい姫が、侍女を一人引き連れながら何処か緊張の面持ちで現れた。シェリエルフィアの私室には、趣味の良いアンティークテーブルの上に、美しく盛られた菓子と茶器が並んでいる。スコーンとジャムやクリームは勿論、アップルトルテやフルーツケーキ、小さく切り揃えられたサンドイッチが塔を為し、薄い白磁のティーセットには透かし彫りのミモザが並んでいた。

銀器もピカピカに磨きこまれてあり、それらを含むすべての調度品は、彼女が輿入れの時に持ってきたものだ。

もっとも、まだ幼き姫の目には、美しい食器や菓子類より、義母の後ろに控えた小姓の姿がまず映ったらしい。コロコロと鞠の様な姿を見つけると、さも安心した様な笑顔をふんわり浮かべて見せた。セティスもそつとえくぼを浮かべて微笑み返す。

彼女の緊張緩和を読み取って、シェリエルフィアは鷹揚にソファへの着座を促した。

「わたくしの招待を快諾頂き、心より感謝します。ホワイトスノウ

姫」

優雅な笑みを浮かべたシェリエルフィアの姿に、何故かホワイトスノウはびくりと肩を振るわせた。慌てて侍女が代わりに挨拶を返す。

「こちらこそお招き頂き、大変嬉しく存じます、王妃様」

侍女の言葉に倣って、ホワイトスノウもちょこんと頭を下げた。

「まあ、堅苦しいのはやめにしましょう。色々用意させてみたのだけど…姫は何が好きかしら。薔薇の紅茶はいかが？」

幼い頭がこくと縦に振られるのを見て、セティスが如才無く給仕に回る。王妃の部屋に暫し芳しい薔薇の芳香が漂った。

シェリエルフィアの巧みな誘導で、姫は首を振るだけで会話が成立していく。

曰く、寒くはないか。甘いものは好きか。泳いだ事はあるか。泉や湖があるなら、夏になったら泳ぎに行かないか、等々。

「私、こう見えても泳ぎは得意ですよ。泳ぎなど、浮力と水面抵抗の関係を理解すれば簡単ですわ」

「王妃様、些か御説明が一般的とは思われません」

「あら、私とした事が。おほほほ…」

上品に扇子を口にあてながら、椅子の下ではフォローしたセティスに蹴りを入れるのを忘れない。

勿論ホワイトスノウはテーブル下の戦いなど気付く筈もなかった。会話が一段落したところで、シェリエルフィアはおもむろに切り出す。

「実は姫に差し上げたいものがあって…」

シェリエルフィアは横に置いてあった箱から、小さな包みを取り出した。

「これは私が幼い頃、母に貰ったものなのだけど、年齢的にもう私より姫に似合うと思って…」

優美な細工を施された小箱から取り出されたのは、ピンクのバラを象った髪飾りだった。

ホワイトスノウは一瞬頬を紅潮させて目を輝かせるが、すぐに怯えた表情で侍女を仰ぎ見た。

「まあ！ 素晴らしいものを…ようございましたね、姫」

中年も半ばを過ぎたふくよかな侍女は、そつなく笑顔を見せる。

「着けてみましょうか。きっと姫の黒髪に映えると思うのだけど」

椅子から立ち上がりながら、シエリエルフィアはホワイトスノウの後ろに回り込む。まあ私が、と慌てて立ち上がるうとする侍女を制して、王妃は自ら髪飾りを義理の娘の髪に差した。

「どうかしら」

セティスが差し出した手鏡を顔の前に出すと、ホワイトスノウはもじもじと俯いてしまう。

「ほづら、とても綺麗…」

背後から覗きこむシエリエルフィアの下で、少女の身体が小さく震えた。

「姫…？」

ホワイトスノウの正面にいたセティスがいち早く異変に気付き、眼差して問いかける。

シエリエルフィアも素早く反応し、鏡に映った幼い姫の表情を読み取ろうとした。俯いた顔は微かに青ざめ、赤い唇はきつく噛み締められている。

「あの、王妃様…」

付き添いの侍女はどう言って良いかわからず言葉を詰まらせる。

「…ホワイトスノウ姫？」

シエリエルフィアが優しく問い掛けた途端、ホワイトスノウはぶんぶん大きく頭を横に振ると、小さな手で髪飾りを乱暴に外し、俯いたままシエリエルフィアに差し出した。

「気に入らなかったかしら…」

困ったように問われても、ホワイトスノウは表情を固くしたまま答えない。

「王妃様、お土産はこちらのスノーボールはいかがでしょう？ ア

「モンドブードルと粉砂糖を固めた雪玉を象ったお菓子なんですけどね、姫は雪がお好きでしょう？」

助け船を出す様にぷにぷにしたセティスの手が銀の皿を差し出し、ニコニコと人の好い笑みを浮かべる。その笑顔を見た途端、固まっていたホワイトスノウの身体からすつと力が抜けて、すぎる目でセティスを見つめた。

「美味しいですよ？」

邪気のないセティスの声を掴もうとする様に、ホワイトスノウの頭がこくりと揺れた。

侍女達がシェリエルフィアの顔色を伺うのを悟り、王妃も殊更陽気な声で応じる。

「そうね。ではセティス、それを包んで差し上げて」

「はい」

ようやく緩み出した空気に、皆、一様にホッとした顔を見せ、初めてのお茶会はお開きとなったのだった。

一通りの片付けが済んだ後、淡いピンクの髪飾りをそっと包み直し、セティスは主に差し出す。

「如何でした？」

「まあまあだな」

髪飾りを受け取って、シェリエルフィアは考え込む表情になった。やはり、事を中心にいるのはあの姫だろう。自分を殺そうとしたのが彼女の差し金だとは思えないが、蠢く闇の中に秘密が隠されているとしたら、そのキーパースンは恐らく彼女だ。

「リグナルド陛下やエメラルディア様の事は訊かなくてよろしかったですか？」

通常、慣れぬ者同士が会話を続けるとしたら、共通の話題から入

るのが普通である。しかし、シェリエルフィアはわざと二人の名を避けた。

「いきなり核心を突いて警戒されても困るからな」

「でも、本当の核心は前王妃様でしょう？」

「……………」

シェリエルフィアの白い指が、包みこまれた髪飾りを取り出し、何とはなしに玩ぶ。

「残念でしたね。それはシェリエルフィア様の母君の形見の品でだったと記憶しております」

彼女なりに、誠意を尽そうとしたと言う事だ。受け入れられるには至らなかったが。

「…あの子が一樣に反応したのはどこだろうな」  
初めから緊張はしていた。

しかし、鏡をのぞきこんだ時のあの青ざめ様は只ならぬ雰囲気が漂っていた。

「確か あの姫は鏡も苦手だったと存じますが」

「…そうなのか？」

以前、ホワイトスノウがシェリエルフィアの実験室に忍び込んだ事は、その後の行方不明騒ぎに紛れて言うてはいない。今更言うのも憚られて、セティスはその事実を胸の奥に封印する。

「女の子にしては珍しいですねー。しかもあんなに綺麗なのに」  
ふむ、とシェリエルフィアは思案顔になった。

鏡の苦手な美少女、か。

「で、お茶に例の薬は仕込んだんだろうな」

「あ、忘れた」

「アホか、お前は！」

「次こそは忘れずに」

「減給だ！」

「え〜〜〜、それだけは許してくださいよう！ どうせ今日は様子見だったんでしょう！？」



「うるさい！ 減給の上、お前を温泉饅頭にしてくれるわ！」  
泣きの入ったセティスの頬をたぶたぶはたきながら、シェリエル  
フィアは次の作戦を頭の中で練り込んでいった。

夕食の終わったりリグナルドの私室では、一人掛けのソファの上で  
ホワイトスノウが膝に抱かれている。

「彼女とのお茶会はどうだった？」  
豊かな黒髪に顔をうずめるようにして、リグナルドは娘に問いか  
ける。

彼の膝の上でホワイトスノウは体を固くしながら、小さく首を横  
に振った。

「そうか。残念だな」

父親の声はあくまで優しい。

彼の胸に頬をつけて目を閉じていると、扉の外に人の足音を聞い  
た。

「誰か来たようだね」

少女はおとなしく膝の上から滑り降りると、音も立てずに隠し扉  
から姿を消した。

ほぼ同時に扉をノックする音がする。

「どうぞ」

扉を開けると、彼の若い妻が頬を紅く染めた顔で立っていた。

「その…女性からこんなものを持つてくるのははしたないでしょ  
うか」

視線を下に下げると、胸元に濃緑色の壘を抱えている。見るから  
に酒瓶である。

夫の私室に夜訪ねるには、口実が必要だったと言う事だろうか。  
ならば微笑ましいと言えなくもない。

「歓迎しますよ。グラスを用意します」

シェリエルフィアを部屋に招き入れると、暖炉前のソファへと促し、卓にグラスを二つ並べて彼も座った。

「あの…生国から持ってきた舶来ものなのでお口に合うかわかりませんが…」

張られたレッテルには異国の文字らしい象形が縦に三つ並んでいたが、彼には見慣れぬものだった。

「ダイギンジョウ、と読むそうです。ライスリキュールらしいのですけれど…」

どこか緊張感漂うシェリエルフィアの笑みに、リグナルドは透明な液体をグラスに注ぐと一気に煽って見せる。

「へえ、変わった味だが美味ですね」

少年の様なあどけない笑顔を見せる夫に、シェリエルフィアは安心した顔で自分のグラスを手を取った。

「喜んで頂けて嬉しいですわ」

もちろん、この時この透明美味な液体の中に何が混ぜられていたかなど、リグナルドは知る由もなかった。

## 昼と夜（後書き）

段々、この話がコメディなのかどうか自信がなくなってきました。  
が、鋭意努力中。

## ロンド

窓の外には相も変わらずしんと雪が降っている。風のない音を吸い込む雪で、まるで天が落とすこの結晶に、世界中が閉じ込められている様だとシエリエルフィアは思う。

所詮はただの氷の粒の集合体なのだが、量が過ぎれば人は屋根の下に潜って降伏せざるを得ない。いや、屋根でさえその量には降伏する事があるだろう。

あのおもちやの様な小人達の小屋は大丈夫だろうか。さして堅牢な作りにも見えなかったが。

「珍しいですね。貴女の方から訪ねて下さるなんて」

真つ直ぐな形の良い眉を上げて、王は優雅に微笑んだ。

「その…実はお願いしたい事がございまして…」

シエリエルフィアの言葉に、リグナルドはふんわりと相好を崩した。

「それは…嬉しいですな」

「え？」

意外なリアクションにシエリエルフィアは小さく問い返す。

「貴女は…突拍子のない事はしても、なかなか我が儘は言って下さらない方だから」

両手で透明な液体の入ったグラスを弄びながら、リグナルドは面白そうにシエリエルフィアを見つめた。

「…猫を被っているのがバレましたかしら」

「そう言う意味では」

どこか拗ねた様な口調に、王は苦笑を漏らす。

「わたくしが本気で我が儘を言い出したら、陛下は勘弁してくれと泣き出すかもしれませんよ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、シエリエルフィアはグラスの中の透明な液体を揺らした。

「それは面白そうだな。一度思いっきり泣き喚いてみたいと思っただんです。で、お願いとは？」

全く動じる様子もなく、リグナルドは話の先に水を向けた。

「実はわたくし、色々と研究するのが趣味ですの。どこか：出来ればなるべく人が来ない場所に研究室を作る許可と、趣味に興じる許可を頂こうかと。」

嬉々とした口調で、趣味は刺繍だとしても言うがごとく、当たり前前の事に語る妻の姿とその言葉の内容に、リグナルドはさすがに軽く瞠目する。

「：差し支えなければ、研究の内容をお聞きしても良いでしょうか」  
「色々、ですわ。興味のある事なら何でも。例えば：この国の林檎は大変美味ですが、害虫に弱いとか。掛け合わせで品種改良が可能かしらとか、近辺にある温泉の成分分析とか：、雪質を調べてみるのも面白そうだな。こんなに降るのなら何かのエネルギーに転換できないのかしら」

自分の言葉に没頭する余り、つい我を忘れた熱弁をはたと自覚して、シェリエルフィアは慌てて小さくコホンと咳払いをした。

「陛下も：女性が持つ趣味としてははしたないと思います？」

僅かに頬を染めながら、長い睫毛越しに上目遣いに見上げる妻に、リグナルドは礼儀正しく驚きを覆い隠す。

「そう：まあ、ありふれた趣味とは言い難いでしょうが：ええ、分かりました。どこかに一部屋用意させましょう」

「まあ、嬉しい」

少女の様にパツと顔を輝かせる彼女を見て、リグナルドは思わず頬を緩めた。

「こんな言葉は貴女には無用の長物でしょうが、公務には御支障なく。あと、城の者達を驚かす様な実験はお控え下さい」

「はい！ お約束します！」

ニコニコと顔を綻ばせながら、シェリエルフィアはリグナルドのグラスにとぼとぼと異国のリキジュールを満たす。感謝の気持ちだろ

うと、リグナルドも遠慮なく受けた。

「本当にこのライスリキールは口当たりが良いですね」

「お気に召して嬉しいですね」

「プディング以外にもこんな加工法があるとは思いませんでした」

「うふふふ。よければ試しに作ってみましょうか」

「そんな事ができるんですか？」

「まずは調べてやってみなくては。何もせぬ内にできないと決めつけるのは早計ですわ」

「…確かににそうですね。貴女は本当に…果敢な方だ」

一瞬言葉を選んだリグナルドに、シェリエルフィアは鼻白んで見せる。

「あら…褒め言葉に頂くのは微妙なお言葉ですね」

「褒めてますよ。本当です」

「じゃあ、そう言う事において差し上げます」  
顔を見合わせて、同時に吹き出す。

グラスが渴いた途端に絶妙のタイミングで次を注ぎ、和やかな空気の中、暫し談笑が続いた。

「そう言えば…わたくし、エメラルディア様にお会いしましたわ」

「…その様ですね」

叔母の名を耳にした途端、リグナルドの笑顔がやや固くなった。

「お綺麗で…優しそうな方でした」

王は沈黙したまま薄く微笑んだ。

優しい、ではなく優しそうなと言う辺り、彼女の聡明さが窺える。簡単に人の本質を決め付けては為政者は成り立たない。迂闊な判断が国を危険に陥れないとも限らないのだ。

「姫にあまり会わせないと言うのは…わたくしのせいですか？」

「シェリエルフィア…？」

意外な問い掛けにリグナルドは訝しげに眉を寄せる。

「前王妃の母君と孫である姫が仲良くしていれば、私がやりづらい

のではないかと…そう思われたのかと思ひまして」

「いや、そんな事は」

ありませんと言ひかけ、目眩を感じて額を抑えた。

「陛下？」

「いえ、何でもありません」

（慣れぬ酒に…酔ったか？）

気が付けば濃緑色の壇の中身は空っぽになっている。

いつもピンと伸ばされた背中が柔らかく丸まり、ソファの背に重心が移動した。フワフワと信じられぬほど良い心持ちだった。

「大丈夫ですか？」

心配そうに覗きこむシェリエルフィアに、リグナルドは目の前で手を振って見せる。

酒には自信があつた。北国では寒さを凌ぐ常備薬である。若い頃から、必要に迫られてかなりの量をたしなんでいたし、そう簡単に酩酊したりはしない筈だ。

しかし、彼は今、珍しく朦朧とし始めていた。

（何か盛られたか…？　しかし彼女も同じ瓶から注いだものを飲んでいるし…）

彼の様子を案じる彼女の表情が、演技かどうかは判じかねる。

「お疲れなのですわ。どうぞ、隣の寝室までお連れします」

「大丈夫です。それから叔母上については…貴女が思うような事はありません。ただ彼女は…」

「はい？」

意識が遠退くを感じる。穏やかな眠りへの誘惑がセイレーンの様に彼を手招いていた。

「エメラルディア様が、何か？」

問い掛ける王妃の言葉が、何故か誘うような甘い響きを伴っているように聴こえる。

「シェリエルフィア、貴女は…」

その言葉の途中で頭がガクリと落ちた。

「陛下？ 陛下？」

顔を近づけて穏やかな呼吸を窺う。

完全に熟睡モードに入っただのを確かめると、シェリエルフィアは改めて音も立てず嘆息した。

アルコールに強いのは分かっていたから、仕込む薬の量は判断は難しかった。常量では恐らく効かぬだろう。しかし多すぎれば危険を伴う。無味無臭とは言え、敏感な舌が味に違和感を感じぬとも限らない。故に異国の酒を使った。秘蔵の一本だったが、背に腹は変えられない。

無防備に晒されるリグナルドの寝顔に、胸がとくんと鳴った。何度か寝所を共にした時は、いつも先に意識を奪われ、尚且つ彼が先に目覚めていた。

常に隙のない王の寝顔に、急に心臓の鼓動が早くなる。

「ふうん…」

閉じられた瞼の、睫毛の長さにぞくぞくした。薄く開いている唇も酒で濡れていて、どこか色っぽい。

（リグナルド様…）

クセの良い黒髪に細い指を差し入れて鋤きながら、暖かな頬にそっと口付けた。

（わたくしを…お許し下さいませね）

そのまま薄い唇に触れようとした直前、背後から能天気な声がかかる。

「乙女モードに入るのはそこまでにして下さいね」

「なななな、セティスお前いつの間に！」

ピンク色の綿菓子と化していた甘い空気は、彼の登場によってあつという間に四散した。

「陛下を寝室に運ぶならお手を貸す必要があるかと思ひまして」

音を立てずに忍び込むのは、このふくよかで蒸しパンの様な少年の特技の一つである。とは言え、つい自分の世界に入り込んでいたシェリエルフィアは、我を忘れてねめつけた。



「もしや初めから隠れていた訳ではあるまいな」

「もちろん初めからではないですよ。でも良かったですね、立派な実験室が出来そうです」

「~~~~~!」

顔を赤くして憤怒の形相になりそうなシェリエルフィアを、柳に風と受け流す。

「まあまあ、良いじゃないですか。陛下を寝室にお連れしないんですか？」

「…するとも」

甘えたところを見られて照れ隠しに低く尖った声が出た。

「じゃあ、行きましょ」

よいしょと気持ちばかりの声をかけると、自分の倍はありそうな長身の王を、軽々と抱き上げた。

一瞬、壁際の本棚に一瞥をくれたが、さり気無く視線を戻して扉を指し示す。

「ドアを開けて頂けませんか？」

夫が小柄な従者にお姫様抱っこされているのを複雑な表情で眺めながら、シェリエルフィアは寝室へと続く大きな扉を開ける。こちらにも召使の手で暖炉の宿火が程よく燃やされ、暖かさを保っていた。王を抱えたセティスが寝台の上に彼を靴を脱がせて寝かせている間、シェリエルフィアも周りの気配を窺いながら後ろ手でドアを閉める。

異国から来て数か月の主従は、意味ありげに視線を交わした。

「じゃあ、始めましょうか？」

いつの間にか雪は止み、窓の外に膨らみ始めた月が光っている。書斎の本棚の奥にいた小さな影は、唇を噛んで闇の奥へと消えていった。

「ご存じだとは思いますが、質問はあくまでイエスノーで答えられる単純なものにして下さい。考え込まねばならないような複雑なものでは記憶に残りやすくなってしまうです。覚醒なさった時に、この事がバレては面倒です」

「わかってる」

寝台のサイドテーブルにある燭台に細い火をつけて、リグナルドの眼前で揺らす。彼はいくつも重ねた枕に上半身をもたれさせていた。目蓋は閉じられ呼吸は深い。

「僕の声が聞こえますか？」

低く静かなアルトの声が彼のそばで囁かれる。王は小さく肯いた。  
「ハイかイエエで答えてください。貴方はリグナルド陛下ですか？」

「はい」

聊か掠れながらも、淀みない返事が響く。

「結婚していらっしゃいますか？」

「はい」

「お酒が嫌いですか？」

「いいえ」

いくつか簡単な質問を繰り返した後、枕元に屈んでいたセティスは背後のシェリエルフィアを振り返って見上げた。

「暗示は問題なく効いているようです。ご質問をどうぞ」

後退するセティスと入れ替わりに、シェリエルフィアが枕元に跪いた。

「貴方は…娘のホワイトスノウ姫を愛していらっしゃいますか？」

「はい」

「亡くなった初めの奥様の事も愛してらした？」

「はい」

「エメラルディア様の事は…？」

「……………」

考え込むようにリグナルドの答えが滞るのを見て、セティスが慌ててフォローに入る。

「質問の語尾は明確にしてください。複雑な思考で意識が浮上したら危険です」

「解ってる。えーと、エメラルディア様の事も大切に思っ

しやる？」

「……いいえ」

「……エメラルディア様の事を憎んでいらっしやる？」

「はい」

それはなぜ？と訊きたかったが、これ以上は危険だった。普通の人間ならともかく、王として有能なリグナルドは精神的なプロテクトが強い。彼に直接問いたただすのではなく今回この様な方法を選んだのは、表面上の誤魔化しに捕われず真実を探り出すためだった。

とは言え単純な問いで分かる事はたかが知れている。

「ん……………」

微かにリグナルドの眉が顰められた。意識が戻りつつあるのかもしれない。

「姫、もし訊かれるなら次が最後の質問になります」

「わかっておる。なるべく具体的に答えやすい問いであろう。では

……」

ひそひそと声を顰めて言い返しながら、シェリエルフィアは素早く頭を巡らせた。是非とも聞いておかねばならぬ事を一つだけ。

「貴方は……新しい王妃であるシェリエルフィアを、殺そうとした事がありますか？」

「……いいえ」

間髪を入れぬ答えに、安堵が広がる。しかしそれだけではまだ足りないことに気が付いた。

「では、殺そうと思ったことは？」

「姫……」

思わず小声で叫んだセティスの口は、王の答えによって閉じられ

た。

「はい」

暫しの沈黙が訪れる。氷の象の様に動かぬシェリエルフィアの背中に、セティスは心中でため息を吐いた。

「ご苦労だった、セティス。暗示を解いてくれ」

「…はい」

再び位置が入れ替わり、セティスは何事かを耳元で呟きながら、リグナルドの意識をまた沈めていった。飲用した薬の効果と相まって、覚醒時には何も覚えていない筈だ。

「私は怪しまれぬよう、このままこの寝室に残る。お前はもう部屋に帰れ」

月の光を受けて、頬が蠟のように白く映えるシェリエルフィアに、セティスは感情を見せぬ声で呟く。

「姫、大丈夫ですか？」

「何が？」

「…いえ」

同情を受け入れるには高すぎるプライドの持ち主である事を、長年そばにいた彼は重々知っていた。今は構わない方がいい。

「では、失礼します」

「ああ」

セティスが退室したのを見届けてから、シェリエルフィアは眠る王の顔をじつと見降ろした。

普段は後ろに撫で付けている前髪が無造作に額に落ちていて、どこか少年めいた面差しに見せている。先ほど早鐘を打っていた胸が、今は痛みをもって疼いていた。

「…バカ」

硬い表情のままそつとつぶやくと、身を屈めてそつと口付ける。彼がやはり目覚めないことを確認すると、シェリエルフィアはドレスと室内靴を脱いで、寝台の羽毛布団の中に潜りこんだ。

触れた彼の肌が温かくて、その事が無性に哀しかった。

## 金色のネメシス

分厚いカーテンの隙間から、軒下の氷柱を照り返した朝の光が差し込み、リグナルドはうつすらと目を覚ます。いつもは素早く意識が覚醒するのに、気だるい緩やかな微睡みに捕らわれるのは、昨夜酒量を過ごしたせいだろうか。

経験則から酒夜の後だと見当は着くが、こんな風になるのは久しぶりで、何を飲んだかぼんやりと記憶を手繰る。

身体 of 左側に暖かい温もりを感じて無意識に抱き寄せた。

「おはよう、ホワイトスノウ。また入りこんだのかい？」

回した腕に違和感を感じて、彼は漸く瞼を開いた。目の前にあるのは見慣れた黒髪ではなく、光を照り返す金の髪だ。咄嗟にリグナルドは自分の失態に気付く。彼の傍らには素肌にシーツを巻き付けたシェリエルフィアが、肩だけを露にしてすやすやと寢息を立てていた。我が身を振り返ればやはりなにも身に付けていない。

状況を見れば何があったかは火を見るより明らかだったが、記憶が無いことが彼を動揺させた。

ゆうべは確か、彼女が持参したりキュールを重ね、そのまま意識を失った様な。

…失ったまま事に及ぶ可能性があるだろうか。いや、皆無とは言えまいが。

掛け布団が引つ張られたせいか、「う…ん」とシェリエルフィアが軽く呻いた。

先ほどの呼び間違いは気付かれていないらしい。それだけは救いかもしれない。

「…シェリエルフィア？」

そつと妻の名を呼んで見ると、瞳を縁取る長い金の睫毛が光を反射して揺れた。

「陛下…おはようございます…」

掠れた声が色つぽかった。寝乱れた金髪も、普段のきつちり結った姿から想像できぬあどけなさで、初めて見るわけではないものの背筋を欲望が走るには充分な眺めである。

「すみません、起こしてしまいましたね。どうぞまだお休み下さい」  
低く潜めた声に、それでも彼女は蒼い瞳を覗かせて恥ずかしげに笑う。

「あの…昨夜は、その…」

「は？」

「陛下があんな事をなさるなんて、思いもしなくて…」  
「…は？」

「あ、でも嫌だった訳じゃないんです、わたくし…」

もじもじと頬を染めて俯く彼女に反比例して、リグナルドの背中を今度は冷や汗が流れる。

「お待ち下さい。あの…昨夜私は何か貴女にしたんでしょうか」

「覚えてらっしゃらないんですの？」

如実に傷付いた顔で大きな目を見開く妻に、リグナルドは答える言葉を失った。

「いえその…全然と言う訳では…」

嘘だ。全く覚えていない。

「わたくしの口からは、その…」

恥ずかしげに目を伏せてしまうシェリエルフィアの姿に、リグナルドは天を仰ぐ。今更この年になって羽目を外す様な振る舞いはしないと信じたいが、何分酔っついていて記憶にない。

「貴女を…傷付けたのでなければ良いのですが…」

いつになく齒切れの悪い言い方に、シェリエルフィアは悲しげな微笑を浮かべた。

「何も…その、たまに寝ぼけて姫と呼び間違えられたのがびっくりしたかしら」

「！」

そう言いながらシーツを巻き付けたままベッドから出て行こうと

するのを、リグナルドは慌てて引きとめる。

「あ、待って下さい、あの…」

呼び止めては見たものの、何を話せば良いか上手く舌が回らない。暫しリグナルドが何かを言おうとするのを首を傾げて待ったが、彼の混乱を感じ取ったシェリエルフィアは限りなく優しい声で背中を向けた。

「どうぞお気になさらないで。覚えていないのなら何も無かったのと同じですもの」

しかし優しくされればされるほど居たたまれなくなる事もある。シェリエルフィアの最後の一言で、リグナルドは完全に沈黙せざるを得なくなった。ぶつちやけ止めをさされたのも同じである。

そんな彼に背を向け、手早く衣類を改めると、シェリエルフィアは自室に戻るべく扉を開けて部屋から音も立てずに出ていく。扉のしまる音だけが、彼に安堵とそれ以上に大きな自己嫌悪を同時にもたらした。

北の地に名高き有能な王は、誰にも見せられぬ大きなため息を吐きながら、がつくりと裸の肩を落としてベッドに沈み込んだ。

「うわ、ひつでー。そんな事を言っただんですか!？」

同性として同情の余地があったのか、セティスは心から気の毒そうな声を上げる。

「傷付いた乙女心の復讐としてはささやかなものであるう？」

一方シェリエルフィアは全く悪びれない。もちろん、前夜は何もなかった。彼の服を脱がし、自分も脱いで同衾しただけだ。おかげで面白いものが見れたと意地悪く考える。

（はるばる嫁いで来てくれたのが、貴女で良かった）

（姫は正直なお方だ）

（私は 彼らを守る立場にいる事を誇りに思います）



向けられた真摯な言葉の、どこまでが本当でどこからが演技だったのだろう。それとも始めから彼女を謀る為の嘘だったのだろうか。シェリエルフィアとて全てを曝け出しているわけではないが、心の芯に沁み込んだ言葉を疑うのは辛い。また王族に生まれつき、尚且つ魑魅魍魎が跋扈する中央の都で育ったのだから、覚えのない憎悪や殺意を抱かれる事には慣れているが、それでも好意を抱き好意を抱かれていると信じかけていた相手にそう思われるのはなかなか厳しいものがあつた。

寝惚けて無意識に娘と呼び間違えられるのは論外である。

本来自製の効く王ならば尚、今回の下院無意識の失態は身に染みてきつかるう。せいぜい自尊心を傷付けて落ち込めばいい。いい気味だ、ざまーみる！

そう思いながらもどこか気持ちが晴れないのは、やっぱり乙女的トブレイク傷心なのかもしれない。

「…まあ、殺意を抱いていた事は解つたのだから、次はその理由だな」

気持ちを吹っ切る様にフラスコを揺らして手元の液体をかき混ぜる。何故かセティスは黙して語らなかつた。

「…？ セティス、お前心当たりがあるのか？」

何にでも交ぜっ返す性格のセティスが何の反応もしないのは珍しい。ちろんと横目で流す視線を向けて訊ねた。

「いえ…何も」

その顔がいつになくシリアスだったので、脅しても今胸の内にある事を漏らさぬのは想像がついた。恐らくはまだ確信が持てぬ内容なのだろう。

「…何か、分かつたら話せ」

「御意」

その辺は長い付き合いで慣れているから、とつと話題を切り換えた。

「しかし…今回の手はチビ姫には使えんな」

「ええ！？ 使うつもりだったんですか！？」

「それは彼女がもたらす情報次第だな」

ニヤリと笑う主にセティスあゐじは寒気を覚える。

「相手は年端も行かぬ、いたいけな女の子ですよ？」

「年端の行かぬ少女が必ずしもいたいけだとも、邪悪でないとも限らん」

間髪入れず言い切ったのは、生国で心当たりがあったからだ。幼い子供の方がしがらみが少ないだけ、自制がきかない場合は多々ある。それがどんな結果を招くか、気付きもせずに。

「いや、姫はそうだったかもしれませんがどお！」

心外な事を言われてシェリエルフィアは憤慨した。

「何だと！？ 私は世にも純真清らかそのものだったではないか！？」

「あ、新薬の実験とか言って僕に色々飲ませたじゃないですか！

僕が死にかけたのは一度や二度じゃ無いんですからね！」

「今、生きておるのだから結果オーライだ」

「僕の人生に安全を返して下さいよ……」

「蒸かし饅頭にそんなものがあるか」

「ひっでー……」

丸い頬を更に丸く膨らませた従者を、シェリエルフィアは実験室から追いたてる。

「良いからさっさとチビ姫を次のお茶会に誘ってこい。今回はうまくやるんだぞ！？」

「ふぁーい」

気の抜けた返事を返しながら、セティスは更に廊下へと出ていった。

細い眉がしかめられ、小さな体がくらりと揺れたのは、お茶会の

会話の最中だった。

もつとも小さな姫は喋る事ができないので小さく頷いたり首を横に振っていただけが。

手にしていたティカップが傾き、中に入っていたハニージンジャーティが淡い董色のドレスのスカートに零れ落ちて染みが広がる。

「姫様！」

お付きの侍女が駆け寄った時には、ホワイトスノウの瞼は閉じられ、軽い寝息を立てていた。

「まあ、なんてこと！　姫様！」

慌てて起こそうとする侍女の手を、シェリエルフィアが押し止める。

「無理に起こさないで。ちょうど姫のところには午後の日差しが射していたし、おなか満たされて眠たくなったのでしょう。マディラ、何か拭くものとかけるものを」

「はい」

シェリエルフィア付きの侍女マディラがセティスと共に手早く零れたお茶の始末を始める。

しかしホワイトスノウの侍女はいいそうですかとは言っわけにはいかない。何と言っても王妃である義理の母親との歓談の最中である。いくら王妃が寛大でも、粗相である事には変わらない。侍女はどうしてよいか分からずその場に立ち尽くしておるおると両手を揉んだ。

シェリエルフィアはそんな彼女を力づけるように美しい笑みを浮かべる。

「うふふ、私も午後に家庭教師が来たりするとよく眠たくなったものです。姫も何度も誘いに応じてくださったとは言え、緊張してらしたのではないかしら。動かしては可哀想だから、目覚めるまではここにおきましょう。よいから貴女は姫の着替えを用意して」

「あ、はい」

立て板に水のシェリエルフィアに、元々落ち度を感じているホワ

イトスノウ付きの侍女は逆らいようがなく、促されるまま、マディラと共にドレスの替えを用意しに退室させられてしまった。

「あまり長い時間は無理ですね」

小声で囁くセティスにシェリエルフィアも頷いた。

「分かっておる」

答えながらちょうどホワイトスノウの顔だけ影になるようにカーテンを半分だけ閉じる。

「それでは始めます」

ホワイトスノウがかけたソファの前にセティスは跪くと、閉じられた瞼の前でゆっくり蠟燭の火を揺らし始めた。

「あの子は…本当に綺麗で可愛い子だったわねえ」

揺り椅子を軽く漕ぎながら、エメラルディアは小春日和の外に目を向けて細める。

「え？ 何か仰いましたか、奥様？」

「何でもないわ、セシリー」

穏やかに微笑みながら、手元では毛糸のショールが皺の寄った手ではばらと解かれていった。彼女の足元には縮れた毛糸の山ができている。シェリエルフィアから贈られた最上級のウールだった。

「カティモ…あれくらい綺麗だったらリグナルドに捨てられずに済んだでしょうに…」

口の中の呟きは、既に侍女の耳にも届かない。

「奥様、よろしいんですか？ せっかく頂いたものを…」

「いいのよ。模様編みが気に入らないから編みなおすの。頂いた以上は気に入って使った方がお互い気持ちいいですよ」

「そうですか…？」

侍女の疑わしげな声も、エメラルディアの耳にはもう届かない。彼女の精神は過去の思い出を彷徨い始めていた。不幸など何一つ

知らなかった、いとおしい日々。彼女の中でもっとも輝いてい遙かな過去。あれからもう、どれくらい経ったのだろう。

彼女は椅子を揺らして静かに歌い始める。それはこの地に昔から伝わる子守唄だった。

真白き雪の降る如く

お前の元に降り積もれ

穢れ無き花散る如く

地上の澱を覆い尽せ

美しきものは永遠とわの契り

目に見えぬは魂ありかの在処

罪業つみ深く、いずれ焼き尽くされるこの身なれば  
やがて天に還り、冷たき一瞬の結晶とならん

願わくば -

真白き雪の降る如く

お前の元に降り積もれ

真白き雪の降る如く

お前の罪を覆い隠せ -

「それでは最後の質問です。今まで通り、イエスなら首を縦に、ノ  
ーなら横にお振り下さい」

感情を押し殺したセティスの低い声が囁いた。

「姫は…お父様の事を愛してらっしゃいますか？」

問われて、俯いていた小さな顔がゆるりと持ち上げられる。瞳を閉じたまま、赤い唇が半ば開いた。

分かりきった事に思える事が、どんな謎を秘めているとも限らない。そう思つての質問だったが、それには二人が想像していた以上の答えが帰ってきた。

「お父様は…私を憎んでいるの」

一瞬、誰が喋ったのかと耳を疑った。しかし紛れもなく、鈴を転がすような声はその小さな少女の唇から発せられていた。

「何故、そう思ふのですか？」

危うく聞いてしまったのは、あまりに少女の声が確信に満ちていたからだ。

「だって…私がお母様を殺してしまったから」

初めて聞く少女の声が発した内容は予想外のもので、シェリエルフィアとセティスは思わず顔を見合わせる。

何事もなかった様に、少女はまたゆつくりと頭を垂<sup>しん</sup>れていた。

## 明かされた過去

しんと、降り続ける雪が好きだった。

いつまでもいつまでも、世界を真っ白に染め上げるのを、ずっと見ていたかった。

何もかも消えてしまえばいいと思ったのかもしれない。雪が大地や屋根を塗り潰す様に、何もかもが塗り潰せれば、と

けれどやがて雪は止み、溶けて大地をぬかるませ、全ては白日のもとにさらけ出されてしまうのだ。誰もが望むと望まざるとに関わらず

王の切り替えは早かった。次に会った時には既に何事もなかった様な、いつもの爽やかな笑顔が彼女を迎えていた。

思わず目を逸らしたのはシェリエルフィアの方だ。別にささやかな復讐への罪悪感が湧いた訳ではないが、悪びれない王とどう向き合えば良いか分からなかった。

口数の少ないまま食事の席を辞し、その後は気分が悪いからと同席していない。避けられてると思われても仕方がないところだが、王からは見舞いに温室咲きの花束が届いて、更に気分が落ち込んだ。「まあ、乙女心が複雑なのは古今東西伝統らしいですし、仕方がないですね」

かたち良く白い薔薇を花瓶に生けるセティスに、「うるさいわ」と呟くシェリエルフィアの声にはやはり力がない。

窓際に置かれたカウチに長衣姿ガウンの身を沈み込ませ、クッションを抱きしめながら彼女は思索に耽っている。手にしたパズルのピースがどこに嵌まるのか、じっと考えていた。

あの小さな姫は、父親に憎まれていると言った。母親を殺したか

ら、とも。

問題はそれが事実かどうかだ。リグナルドが娘を憎んでいるとは思えない。寧ろ溺愛している様に見える。そうでなくては、あんなに甘い声で娘を呼んだりしないだろう。実際、彼の口から憎悪の言葉は出ていない。

しかし、少なくともあのチビ姫がそう思うに至る原因はあった筈だ。母親を殺したと思ひ込む何かも。

あるいは、本当に殺したのだろうか？

例えば弾みの様な事故で。

もしくは明確な意思をもって。

彼女の姿を思い浮かべる。

確かにあの美しさも相まって、何処か危うい印象はある。例えば、いつ割れるとも知れぬ、湖に張った薄氷<sup>うすらい</sup>の様な。

しかし

彼女の想いとリグナルドのシエリエルフィアへの殺意は関係が有るのだろうか？

答えはあと少しまで迫っている気がするのに、決定打になるものが欠けている気がする。そもそも集めたのは状況情報ばかりで物証は何一つない。

それにリグナルドもホワイトスノウも、ネズミの死骸をベッドに仕込む様なタイプには見えない。人を使ってやらせたとしても、イメージがそぐわない気がするのだ。あれはやはり第三者の悪戯か威嚇と判じるべきだろうか。

「やはり避けては通れぬか…」

「は？」

シエリエルフィアの呟きを耳にしたセティスが、条件反射で聞き返す。それに答えず、シエリエルフィアは窓の外に目をやったまま、カウチからするりと立ち上がった。

「侍女<sup>メイド</sup>を呼べ。訪問着<sup>ドレス</sup>に着替える」



雪の中で少女は踊っていた。

私は雪、私は雪――

きし、と皮の長靴ブーツが雪を踏み締める音がして、彼女は振り返る。

黒髪に白いものを湿らせて、男が立っていた。彼の笑顔に少女も微笑みを漏らす。肉親にしか見せぬ、柔らかい笑みだった。

「おいで、ホワイトスノウ」

聞き慣れた優しい声が少女を誘こよなう。

とてとてと小走りで抱きついてくる少女を、彼は軽々と抱き上げた。吸い込まれそうな黒々とした双鉾が目の前にある。『彼女』とは違う色の、けれど同じくらい引力を持つ瞳。

初めて彼女に会った時から、彼は彼女に焦がれていた。その美しさと傲慢とも言える勝気さに、振り回されずにはいられなかった。狂暴とも思える激しさが彼の胸中に君臨し、支配し、突き動かす。しかし、彼自身好き勝手に動ける立場ではなかった。その為に犯した罪は償いようがなく、その罪深さが今も彼を縛り付けている。

いや、その罪に縛られる事に、彼が苦しんでいる訳ではないのが、彼の最大の罪かもしれない。縛られていると言う事は、未だ彼女を深く愛していることに他ならないのだから。

いつもは柔和で冷静な彼の、誰にも見せない激しい一面であった。彼の素顔を知る者がいるとしたら、それはやはり『彼女』だけだろう。

美しくも残酷なたった一人の彼の女神。

そして彼女に似た彼女の血をひく娘が今腕の中にいる。

「もう城に入ろう。風邪をひいてしまう」

従順にこくりと頭を振りながら、少女は甘える様に彼の腕の中から離れようとしなない。彼に抱かれた高い視点が好きなのだ。少女の好きな雪に少しでも近づくのが嬉しいのだろう。

力強い腕に少女を抱いたまま、城中に向かいながら彼は考える。

彼が愛した美しい女の事を。

彼女は新しい王妃を歓迎していないだろう。この城に、彼女以外の女主人がいる事を望まないだろう。だから

この雪がやむ前に、彼女を始末しなくては。  
すべてを覆い隠す、この雪がやむ前に -

「まあまあ、よく来てくれたわね、嬉しいわ」

美しくも上品な老女が、子供の様にはしゃいだ声をあげる。彼女の部屋には、冬とも思えぬ花の香りが充満していた。シェリエルフィアの元に贈られたのとは違う、香りの強いフリージアがそこかしこにさ挿してある。

「急な訪問ですみません、エメラルディア様」

「そんなこと気にしないで。どうせ退屈していたのだから」

供されたお茶に蜂蜜アルグレイを注ぎながら、シェリエルフィアは何と切り出そうか考えていた。その一方で、紅茶のベルガモットに負けぬ花の香りを嗅ぎながら己の推測を確信する。彼女に薬は効かない。

「ここは本当に雪ばかりで… 本当にする事がなくてねえ」

「はあ…」

何と答えてよいか分からず曖昧な相槌を打つシェリエルフィアに、エメラルディアは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「おかげで噂話ばかりがこの塔の上にまで届くんですよ。… リグナルドと喧嘩でもしたの？」

「！ いや、喧嘩と言うわけでは…！」

どうやら朝食時のぎこちない雰囲気伝わっているらしい。  
孤独な老人とばかりに高をくくっていた自分を見透かされたようで、王妃の顔に動揺が走る。

「うふふ、まあ、若いんですもの。色々あるわよねえ」

茶目つ気たつぷりにそう言いながら、エメラルディアも自分の紅茶に口をつけた。

「エメラルディア様には恐れ入ります。それで…折り入ってお聞きしたい事が…」

「まあ、何かしら？」

目の前におもちやをぶら下げられた子供の様にわくわくした目をさせながら、エメラルディアは小さな体を前へと乗り出した。そんな彼女に苦笑を忍ばせつつ、シェリエルフィアはティカップを受け皿に戻す。

「申し訳ありませんが…二人きりでお話したいのです」

彼女の言葉に、後ろに控えていた侍女のセシリーが身を強張らせた。

「セシリー、呼ぶまで下がっておいで」

「でも奥様…」

「温室で、彼女にお持ち帰りいただく花を切つてくるといわ。そうね…あまり香りの少ない薔薇だとか。できれば白よりピンクがいいわね」

エメラルディアの声は、静かだが有無を言わせぬ威厳のあるもので、侍女はすぐごと退室する。扉がしっかり閉まるのを待って、エメラルディアは切り出した。

「これでしばらくは大丈夫よ。さあ、話して」

老婦人のそののなさに王妃は改めて舌を巻いた。白い薔薇は今朝方リグナルドから届いた花だ。それを知りつつ色を指定したのは明白だった。

「お聞きしたいのは…先妃、カティヴェルダ様の事です。彼女はとうしてお亡くなりになったんですか」

直球ストレートの質問に、さすがの老女も口ごもる。しかし王妃にしてみれば、遠巻きに訊けば煙に巻かれる恐れがある。シェリエルフィアの真剣な瞳は、老女の口を開かせるだけの覚悟が秘められていた。

「…そうねえ、何から話せばよいかしら。あのこが死んだのは三年前で…いつになく雪の多い年だったの」

老女の目が遠い記憶を探るように細められる。

「ねえ、シエリエルフィアさん。貴女には想像がつくかしら。こんなに毎年雪が降る国でも、想像以上の冬と言うのはあるのよ。あの年は本当に厳しかった。いえ…その前から…夏が短いばかりか気温が上がらず、作物も取れなくてねえ」

その話が王妃とどう繋がるのか、賢明な王妃は口を挟まず黙して耳を傾ける。

「民は食べるものがなくて不安が広がっていた。その上、北の峡谷で雪崩が起きて道は塞がれ、一部の民が孤立し、更に悪い風邪が流行ったの。亡くなった人の数はかなりに上ったんじゃないかしら…。当然リグナルドは東奔西走して忙殺されたわ。国の貯蔵庫を開き、危険な場所に住む者には城の一部を開放し、医者を集めて病気に備えた。城中に不安が立ち込めそうになるのを、余裕の笑顔を浮かべて守っていた。心中はそれどころじゃなかったでしょうけどね。彼は立派だった。王として、出来得る全てをやっていたわ」

「そう、なんですか」

想像が、つく気がする。一切の不安を覗かせず、臣民を守ろうと全力を尽くす彼の姿が、シエリエルフィアの中であまりにも容易に浮かんた。彼は己の立場と責任を重々に心得、それをすべて受け止める覚悟と誇りを持っている。そう確信できたからこそ、シエリエルフィアは彼に惹かれたのだ。

「でも…タイミングが悪かったというべきかしら。その頃、ホワイトスノウを産んでから寝付く事の多かったカティの体調が悪化したの」

「！」

「ホワイトスノウは八歳でやんちゃ盛りだった。母親にも父親にも甘えられない不満がたまっていたのを、責める事は難しいわね。些細な行き違いがあの子達の関係を悪化させ、二人を遠ざけた…」

エメラルディアの声は淡々としていて、それが一層哀しさを募らせる。

「いつもなら…いつもの冬ならリグナルドが気付いて、二人の間を修復させるのも可能だったでしょう。でも、その年に限ってそんな余裕は彼にはなかった。彼が最後に求めていたのは、流行病はやりやまいを打開させてくれる中央の医者と医療技術だったわ」

「……………」

「本来なら…カティもそんな彼を支えるべきだったのよね。あのこだって王妃と言う立場だったのだから。リグナルドも、いえ城の誰一人あのこを責めなかったけど、あのこは…あのこだけが自分自身を責めて…身体だけじゃなく心も弱らせていったの。でも、それに誰も気付いてあげられなかった」

初めて老女の瞳に悔恨と悲しみが浮かんだ。それは締め付けられるような胸の痛みをシェリエルファイにももたらした。

「遠い国から一通の手紙が届いたのはそんな時だったわ」

「え？」

「どこまで我が国の惨状が届いていたのか今となっては分からないけれど…不運な天災に見舞われた我が国の救援を申し出る手紙だった。医者と…救援物資を送らせては頂けまいかと、丁寧にしたためられていた。でも…シェリエルファイさん、あなたならその手紙をどう思う？」

「迂闊には…受け入れられないでしょうね。国同士で損得のない美談など存在しません。そんな奇特な申し出をしてくるなんて、何か裏があるのではないかと疑いますね」

シェリエルファイの答えに、模範解答を聞いた教師のごとき満足な笑みを浮かべて老女は頷く。

「そうよねえ。もちろん、代償を求められないわけではなかったわ。その国の王はこうも書いて来ていた。『もちろん今回の申し出は完全なる善意に基くものであるが、これを機に我が国の娘を縁付け、国交を築くのも吝かではない』と、ね。」

「な……！」

要は婚姻の申し出である。あざとい言い方をすれば助けてやるから結婚しろと言う事だろう。もちろんあくまで「縁付かせ」と言うのなら相手を指定している訳ではないが、仮にも一国の姫を娶るなら相応の地位が必要である。

しかし、王には既に王妃がいる。そして周りにちようど良い立場の者はいなかった。王族の直系にあたるものは皆既婚か年端のいかなぬ者ばかりだ。立場的に先方が強いんだから礼を失するわけにはいかない。

「ここで悲劇だったのは……遠国のあまり、彼の国では王妃は既に鬼籍に入っている事になっていたらしくてね。つまり……王妃として迎えるのが望みだった」

「……………」

有り得ない話ではない。「王妃が病弱らしい」との噂が伝言ゲームでいつの間にか「亡くなったらしい」に変化したわけだ。王妃の立場なら嫁がせる方も十分に旨味がある。政略結婚の相手として白羽の矢が当たってもおかしくはない。

「医术を求めて追いつめられていたリグナルドが、その申し出をどう思ったのかはわからない。だけど・カティは……精神的に病んでいたカティが、その話を知って絶望したとしてもおかしくはないわね」  
自分さえいなければ……病弱で何の役にも立て無王妃より、遠国からとは言え健康で財と技術をもたらす王妃を迎えた方が、誰にとっても幸せに違いない。

「三日後、彼女は東の塔から落ちて亡くなった。公表はあくまで『事故』よ」

喋り疲れたのか、エメラルディアはお茶を一口啜ると、ソファの背もたれに大きくもたれて息をつく。

「その婚姻の申し出はどうなったんですか？」

「それがね、可笑しいの。当の姫君本人が首を縦に振らなかったらしく、改めてなかった事になってしまった。お詫びだと言って医者

と救援物資だけ送って下さってね」

くすくす笑い出すエメルディアに、かける言葉が見つからなかった。せめて…王妃が亡くなる前なら棚ぼたと頬を緩める事も出来たろうが、皮肉にもほどがある。複雑な事情が重なったとは言え、それでは亡くなった王妃は浮かばれまい。

そして彼女の母親であるエメルディアが、まるで腫物を触る様な微妙な立場になったのも頷ける。

きつと誰も口には出さなくても、心の底では思ってしまったのだ。新しい王妃を」と。

「我が国の医者と、派遣されていた方の協力で流行病は息を潜め、民も飢える事無く無事に冬を超えた。国は助かり、王妃は亡くなった。けれど奇妙な罪悪感が皆の中に残り、彼女の事を口に上らせる者はいなくなった。貴女が知りたかった事はそんなところじゃないかしらね」

「それで…すべてですか？」

「私が知る限り、ではね」

「…良かったんですか？ 私にそれらを告げてしまつて」

「貴方は賢くて…けれど愚かな子だわ。真実を知らぬままにはしておけないでしょう。だったら…私ほどそれを告げるのにふさわしい人間はいないのじゃなくて？」

「…お心遣い、心より感謝します」

深々と頭を下げるシェリエルフィアに、老女は何事もなかったような笑みを浮かべて退室を促す。

「そろそろセシリーも戻ってくるわ。さすがに少し疲れました。薔薇はあとから届けさせましょう」

穏やかな言葉に、シェリエルフィアはもう一度深く頭を下げると、黙って彼女の部屋を辞した。

足早に自室に向かう彼女の胸の内は、複雑な感情が息巻いている。しかし告げられた過去のいきさつの中で、一つだけ引っかかる事が

あった。エメラルディアがそれを知らなかったのか、それとも故意に隠したのかは不明だが、急ぎ確かめねばならない。

「セティス、答えろ」

「やぶからぼうになんですか!？」

「父上が私に婚姻話を持ってき始めたのは4、5年前からだったな」「そうですね、それくらいだったと思いますが」

「3年前、このラグナも候補の一つに挙がっていたのではないか?」「丸い体が咄嗟に固まる。

「お前なら知っているだろう。父上からの話を取り次いでいたのはお前だからな。どうだ? 私が話も聞かずに断っていた婚姻話の中に、このラグナもあったのではないか」

「……………」

「申し込んでおいてこちらから断った。私が嫌がったから。そうだな?」

肉の中にうずもれた小さな瞳から感情が消え失せる。彼自身も忘れていた過去の何気ないやり取りが、ここにきてこんなに大きく跳ね返ってくるとは予想だになかった。しかし過去は過去、事実を変えようがない。

「ご推察通りにございます」

ばらばらだった謎のピースが、今、一つの絵を為し、様々な疑問が氷解し始める。王の彼女に抱いたであろう殺意も、口を利かなくなった少女の心の傷も、前王妃の事を誰一人口ごもって言葉にしようとしないうも。

「やはり、そうか」

「姫様……」

思わず呼びかけるセティスに、シェリエルフィアは虚ろな笑みを浮かべると、何も言わずに奥の実験室へと一人姿を消し去っていつ



た。

城内で不審な『事故』が起こり始めたのは、それから数日後の事だった。

## 未必の故意

初めは階段だった。

王妃がバルコニーの階段から足を滑らせて落ちたのは、縁に貼つてあるべき滑り止めの敷物がずれたからだ。石畳に貼り付ける為の糊が劣化していたらしく、打つてあつた画鋏もはずれ、敷物は王妃の踏んだ足ごとずり落ちた。敷物の下の石段は年季の入った磨かれようで、ハイヒールの王妃が歩くには危険極まりない滑らかさだった。

彼女はドレスの裾で床が見えておらず、がくりと体制を崩した時にはもう遅かった。従者の少年が身を挺して庇つたので大事には至らなかったが、両手の指を超える段数は彼女に小さなかすり傷をいくつか付ける事になり、王妃は失笑を漏らすにとどまったもののその笑みはぎこちなかった。

次は灯明の台である。

王妃の擦り傷も消えかけていた一週間後の事。

大回廊の三メートル近くある天井近くには、灯りを置く台が据え付けられていて、暗くなると家令が長い棒の先に火種を付けて灯りを付けて回る。灯り台に置かれた松脂は浸された芯ごと、定期的にやはり長い専用の仕掛けのついた棒で取り替える事になっている。

その台を留める金具が緩んでいたらしい。

丁度王妃が回廊を歩いていたら時に、台ごと音を立てて落ちてきた。シェリエルフィア自らが異変に気付き、咄嗟に避けたので事なきを得たが、事を知った王は執事を呼び、急ぎ城中の台の金具を点検させた。

シャンデリアが落ちたのはその三日後だ。

仲間とはぐれたらしい雉が一羽、冬の寒さに耐えかねたのか城内

に迷い込み、追い立てられて大広間に逃げ込んだ。

王と共に謁見を勤める為、王妃が今まさに入室したところで、パニクった雉は身近なシャンデリアに止まろうとしたのだ。

しかし折悪しく端に止まろうとした為、バランスを失ってシャンデリアは大きく揺れた。

本体は何とか落ちなかったものの、ぶら下げてある小さなガラスの玉飾りが、シェリエルフィアの元へ雨となって降る羽目になった。捕まった雉はシチューに身を投じる刑に処されたが、その日の謁見の間中、王妃の顔は強張ったままだったらしい。

ここまでは誰もが事故だと思っていた。

珍しく雪が晴れた午後だった。

運動不足解消にと、王と遠乗りに出掛けたら、シェリエルフィアの乗っていた馬の耳に虹が飛び込み、馬は驚いて走り出す。

王妃は無我夢中で雪の中を暴走する馬にしがみつき、併走した王の馬と王自身が何とか手綱を引いて、彼女を落馬させる事なく助け出した。

シェリエルフィアはさすがに髪は乱し肩で息をしていたが、王妃の無事に、そばにいたお付きの者や馬番は一樣に胸を撫で下ろす事となる。

しかしさすがに王妃にはかりこれだけ不運な事故が立て続けと、城内に不穏な噂が流れ始めた。

本当に事故なのだろうか？　だとしても何故王妃ばかり？

当の王妃はそれこそ気が塞いだらしく、部屋からあまり出てこなくなかった。

暖炉の傍で、彼は使い慣れた猟銃を磨きながら物思いに耽る。  
冬でも猟に出る事はある。渡りはぐれた野鳥や餌不足で冬眠から  
起き出す獣もいる。ウサギや鹿が森を行くことも少なくない。

冬の猟は雪に閉じ込められた男達にとって、いい気晴らしでも会  
った。

それにしても、最近どうも城内が騒がしい。特に王妃の周りでは  
かり危険なことが起きている。

城の者が騒ぎ出しているのは、彼の本意ではなかった。彼女はあ  
くまで人知れず事故に遭い、誰かが気付いた時には不幸な死を遂げ  
ているのが理想なのだ。それなのにこれだけ事故が続いては、誰の  
目にも不穏な故意の可能性が浮かび上がってしまう。

長い銃身を右手で構え、その先に王妃の顔を思い浮かべる。

彼女は殺さなくてはならない。

彼の女神がそう望むのだから。

しかし…

方法を考えねばならない。

あくまで、彼女が自然な形の事故で死ねるように。

「いや〜、なかなかうまくいってますね！ 今度はどうします  
クラシック  
？ 古典的なものとトウシューズかテニスシューズに画鋲を仕込  
ボビュラー  
むのが定番なんですが」

「どこの国の定番だ、それは！」

「そうですね、そもそも王妃様はそんなもん持ってますしね  
え。いっそ食事に毒でも仕込みますか？ ええ、もちろん致死量ぎ  
りぎりです！」

「…セテイス、おぬし、ずいぶん楽しそうだな」

「いやいや、そんな事はないですよ！　これでも王妃様に致命的な怪我をさせないよう、細心の注意を払ってるんですから！」

「もっともらしい事を言いおつて。しかしこれだけ目立つと却って人目につきやすいのが難だなー」

「そうなんですよね。皆、何かしらすぐ王妃様に目が行きやすくなつてますから、色々仕掛けるのも一苦勞で…せめてまわりの侍女の数を減らせるといいんですが…」

気が塞いだ事にして私室に引きこもっている王妃は、元気に腕を組みながら考え込んだ。

王妃はその立場上、常時数名の侍女がついている。用がない限りは少し離れた控えの間で待機しているが、ここのところ不慮の事故続きなので、皆極力傍に居たがるようになった。どうもリグナルドの指示もあるらしい。氣遣いは有難いが、却って身動きはとりづらくなつていた。

「ふむ…。次の段階に移るかの」

「はい！」

セティスの肉まんのような顔が、期待に満ちて輝いた。

「だから、なんでそんなに楽しそうなんだ、お前は！　言つとくが、殺すなよ！？」

「は！　もちろん、もちろん」

彼の語尾に音符マークが飛んでいる幻をみて、王妃は軽いめまいを覚えた。

久しぶりに朝食に同席した王妃に、王は嬉しそうに顔を綻ばせる。  
「体調が優れないと聞いていましたが…もう大丈夫ですか？」

一方、シェリエルフィアはいまだ曇りがちの表情だ。

「いえ、その…実は折り入って陛下にお願いしたい事がございまして…」

「はい？　なんでしょう？」

それでも言葉を言いあぐねる王妃に、王が片眉をあげて先を促すと、シェリエルフィアはようやく重たい口を開き始める。

「その…大変申し上げにくいのですが…私の宝石がいくつか見当たらないの」

唐突なシェリエルフィアの申し出に、寛いでいた王の顔が真剣味を帯びる。

「…どういう事でしょう」

「初めは…どこかに置き忘れたのかと思いました。ええ、もちろんそうなんだと…。でも…確かにしまった筈のものがどうしても見当たらず、その…何度も続くと…」

王妃の言わんとしている事を察して、王ばかりか給仕をしていた者たちも空気をざわつかせた。

「誰かが盗んだというのですか？」

「わかりません。でも…無くなった髪飾りの一つは亡くなった母の大切な形見だったんです」

「……………」

「侍女を、入れ替えては頂けないでしょうか」

「貴女につけた侍女は、もっとも信用できる者として選んだつもりですが」

「私だって！　遠くから嫁いでからずっと忠義を示してくれた者たちを疑いたくはありませんわ！　でも…！」

シェリエルフィアの顔に苦悩が満ちる。

「ずっと、とは申しません。せめて無くなった宝石が見つかるまで、彼女達と顔を合わせるのがわたくしには苦痛なのです」

「……………」

リグナルドは思案する。実際侍女達は、彼が厳選してもっとも信頼していた者たちだった。その能力においても、忠義の厚さにおいても。代々仕えてきた者も多い。そんな彼女らをここで王妃の言う通り解雇すれば、臣下の間に溝がでかかねない。不慮の事故が続い

た事を思えば、彼女がやや神経質になっているのわは分からねでもないのだが。

「その…なくなった宝石のリストをお出してください。まずはそれらを探してみましょう。その上でどうしても見つからなければ…彼女達には一時的に暇を出しましょう」

「…ご厚情、感謝しますわ」

シェリエルフィアが浮かべた薄く儂い微笑みに、リグナルドは奇妙な違和感を覚えながらも、それ以上言うべき言葉も見つからず、もどかしいため息を吐くにとどまった。

「聞いた！ 王妃様付のマ<sup>メイド</sup>ディラ達が一時的に休暇を申し渡されただけですって！」

「らしいわね。なんでも多忙が続いたからこころで里帰りのお許しをつて事になっていてみたいけど…」

「でもおかしいわよね！ 普通、宿下がりなら春か秋でしょう。こんな時期に急に里帰りなんて、不自然だよ！」

メイドたちが集まる賄い部屋では、王の急なお達しに蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。

「あの王妃様も、結構いい方だと思ってたんだけど…ちょっとがっかり」

「そうよねえ。今度こそ陛下も幸せになれるかと思ったのに、やっぱり都の人は違うのかしら」

「すみません、王妃様、ここんとこ変なことが続いたから変に神経質になっちゃってて」

「あらやだ、セティスちゃんのせいじゃないわよう。そうよね、変な事故がつづいたもんねえ」

いつの間にかちゃっかりセティスが紛れ込んで会話に入り込んでいる。

「でも本当なの？ その…何かなくなつたつて…」

女中の一人が探る様な視線をセティスに向ける。

「はあ、まあ…」

その辺は適当に曖昧にぼやかした。よもや真実など言える筈もない。ここは会話に交じつて、多少なりともシェリエルフィアの株を下げないのが肝心である。

「でもそれはちよつと私たちも気分良くないわよね。だってさ、疑われてるわけでしょ？」

「いや、そういうわけじゃあないと思うんですけど…」

「じゃなきゃあんな立場の方が人を遠ざけたりする？」

もつともである。元々高貴な立場の者は常に何人かそばにいるのが常である。シェリエルフィアの様に人を置きたがらないのは珍しい事なのである。

「まあ、元々本国でもちよつと変わった方でしたから…、その辺はちよつと一人になって考えたりしたいんじゃないですかね」

嘘ではない。多少省いてはいるが。

「まあ、セティス、あんたも大変だろうけど、何か手伝える事があったら言ってくれよ」

厨房のコックの一人が気さくに笑つて片目を閉じる。

セティスも丸い顔を綻ばせて謝意を表した。

「ありがとうございます。とりあえず、このアップルクーヘン、もう一切れ頂いてもいいですか？」

「危ない！」

左腕を思い切り引つ張られて、リグナルドの胸の中に倒れ込む。

大きな胸に包まれたと思ったその直後、彼女の背後でどつと何かが突き刺さる音がした。

城の中庭にいた者達が一斉に静まりかえる。



彼女が立っていた壁際の大地に、子供の背はあろう程の長さの、鋭い氷柱こいりが突き刺さっていた。

「あ…」

振り返ったシェリエルフィアの顔はさすがに青ざめている。

「大丈夫ですか？ お怪我は？」

リグナルドの怒った様な真剣な顔は、本気で彼女を心配している様に見えた。

中庭に来たのは王に呼び出されたからだ。

引きこもってばかりでは益々気が塞いでしまう。せつかくの晴れ間、直接陽を浴びるのも気が晴れるのでは。

而して中庭に出てみれば従者を連れた王の姿が見えたから、なるべく陽当たりの良い場所を選んで近付いた。近くに氷柱の下がる様な軒はなかった筈だ。

考えるより先に、リグナルドを突き飛ばす様にしてその胸から抜け出す。

「あ、わたくし…」

助けられたくせに礼を失した事に気づいて、シェリエルフィアは口ごもった。

突き飛ばされた王は一瞬戸惑う素振りを見せたが、子供を安心させる様な笑顔を浮かべて立ち上がる。

「御無事の様ですね。何よりです」

「すみません。わたくし、驚いて…」

「当然です。人が通る場所は安全を謀っているのですが…、風で隣塔にできたものが転がってきたのか…」

仰ぐ様に氷柱が落ちてきた上空の屋根を見上げるが、彼自身その声には確信がなかった。

「あの…せつかくのお誘いでこんな事を申し上げるのは心苦しいのですが…、自室に戻らせて頂いてもよろしいでしょうか？」

睫毛を伏せ、彼の目から視線を逸らしながら言った。今、王はどんな顔をしているのだろう。哀しげな顔？ それとも落胆したよう

に見える演技？

見定めるべきなのは分かっていたが、顔を上げる事が出来ない。真実を探求するのが常だったのに、今は少しだけ怖い。

暫しの沈黙の後、俯いた彼女の上から降ってきた声は、この上もなく優しいものだった。

「衛兵に送らせませす。後で…落ち着かれる様にカルヴァドスを届けさせましょう」

少しだけ、傷付いた様な声だった気がするの、それを望むあまりの幻聴だったかもしれない。

一歩離れた距離で王と王妃がぎこちなく語らうのを、少女は虚ろな瞳でじっと見ていた。

「私を殺す気か！」

部屋の入り口までがっちりガードを固めて付き添った衛兵達を、危うい演技で追い返すと、自室に控えていたセティスを思い切り怒鳴りつける。

「いひやひやひやひや、やぶからぼうに何ですか！」

豊かな頬肉を引っ張られて、その表面積を増やされたセティスが涙目で抗議する。

「殺すなど言つたろう！ あんなでかい氷柱、避けられねば死んだわ！」

「は？ 氷柱？」

小さな目がきょとんと見開かれる。驚いた仔狸のような反応に、シエリエルフィアは冷静さを取り戻す。

「…お前ではないのか？」

「僕は今日、ずっとここにおりましたが」

貰ったお菓子を頬張りながら、楽しく次の計画を立てていた事は

この際伏せておく。

「偶然の事故…？ いや、そんなわけではない。あの中庭の屋根は全て安全の為に逆勾配になっているし、昨日は風も強くなかった。だとすると…」

シエリエルフィアの脳がめぐるましく回転し始める。あの氷柱が故意だとすれば、それを細工した者がどこかにいる。

「餌に…飛び付きましたかね」

暗がりには潜む敵が、その尻尾を見せ始めたか。

セティスの細められた目を見て、シエリエルフィアも会心の笑みを浮かべた。

「ビンゴ、かもな」

## 容疑者Xの慢心

同情は麻薬に似ている。

一度溺れてしまえば、手放さずにはいられなくなる。

絡み付く煙の様な優しさ、氣遣い、中身の無いおためごかし。

クリームたつぷりの菓子のようなそれらは、一度味わえば病みつきになり、甘やかされた子供の様に、それ欲しさに己を偽る様になる。だから拒絶した。

「可哀想な姫様」と呼ばれるくらいなら、いつそ一人でいた方がマシだった。

例え「偏屈」で「変わり者」と言われ誰からも敬遠されようと、ありのままの自分でいられた方がよっぽどマシだったのだ。

それは、今でも間違いではなかったと思っている。  
そしてその決意が変わった訳では決してないのだけど

彼女の涙の訳を知ったのはいつだったろう？

幼くも勝ち気な瞳が、独りでいる時だけ濡れていた。何も言わない彼女を、初めはただ抱き締める事しか出来なかった。

己の非力さがもどかしかった。

やがて、彼女の肌に直接触れた時、その白い肌に走る傷の数に驚いた。普段はドレスで見えぬ小さな背中に、いくつも鞭で打たれた様な傷。小さいが火傷もあった。

彼の身体中を憤りが駆け抜ける。怒りで血液が沸騰しそうだった。けれど、彼女を傷付けるその相手が、彼女の母親だと知って愕然

とする。

引き離した。

その傷の理由なんてものは思いも付かず、けれど彼女を守るためにはそれしか方法が思い付かなかった。

それでも……

少女は母親を愛していたのだ。どうしようもなく、狂おしく、母親に愛されたがっていた。

それを悲劇と呼ぶには生やさし過ぎるだろう。

彼は決意する。

愛する少女の為に。

彼女を守るために。

自らの手を汚す事を。彼女の母親をこの世から消す事を。

例え彼女に憎まれても構わない。それで少女の命が救えるのなら

自分の罪を知っていた。

自分さえいなければ、父も母もあんな風に悲しむ事も苦しむ事もなかったのだ。

どうして生まれてきたのだろう。誰が自分を作ったのだろう。

悲しみを無くしたかった。

全てを消してしまいたかった。

消す事が叶わぬのなら、いつそ降る雪に閉じ込めてしまえ。

初めから何もなかった様に、真っ白に埋め尽くせ。

それが彼女が雪を愛する理由だった。

音を発する事のない喉の奥が震える。まるで最近、その封じた声を発してしまった事があるかの様に。自分の底に押し隠した気持ち

を吐露してしまつた事があるかの様に。

そんな事はない筈だ。

ふと、柔らかい感触の少年の微笑みを思い出す。まるで彼女の罪を全て許してくれるかの様な。贖罪を施す春の日だまりの様な。

もちろんそれは、無意識に救いを求める少女の願いが見せた、幻でしか有り得ない。

「Aはアップルパイ（apple pie）のA、Bはかじつた（bit）のB」

この世の罪と罰とは全く無縁そうな少年が、沈痛な面持ちのスベツクなどなさそうな能天気な顔で、鼻唄を歌いながら歩いていった。彼が歌の節に合わせて軽くスキップを踏む度に、ぽっちゃりとしたお腹もふるんと揺れる。それでも両手にささげ持ったお盆とその上のアップルパイが微動だにしないのは見事と言えるだろう。

「王妃様、午後のおやつをお持ちしましたよ」

片手の指先だけで器用にお盆を掲げ持つと、くるりと体を捻らせて王妃の私室をノックした彼は、主君の鬼の様な形相に、マシユマ口染みた身体を震わせた。

「セテイス！ お前、何処に行っていた！」

今にも掴みかからんばかりの王妃に、お盆を頭上に掲げて必死で死守する。

「へ？ 何処つて…… おやつを頂きに厨房へ……」

「馬鹿者！ その前だ！」

「そ、その前はその……」

「何だ！ 正直に言ってみろ」

「え」と地下のボイラー室でお昼寝を……」

「あほかあ……！！！！！！」

「ごめんなひゃ……いいい！」

ぐにぐにと豊かな頬をつままれても、頭上に掲げ持ったお盆を取り落とさないのは神業と言えるかもしれない。

「いいからとつとと陛下のところに行つて来い！」

「へ？　なんで？」

「今朝からホワイトスノウ姫が行方不明らしい。朝、侍女が起こしに行つたらベッドはもぬけの殻だった。しかし森番の男が今朝、お前と姫と一緒に居るのを見たと言っている」

「今朝は僕、お会いしてませんよ？」

「だからその申し開きをして来いと言っているのだ。後から私も行くから、とつととそれをよこせ！」

「ひどつ！　一人でおやつを食べちゃうつもりですか！？」

侍女たちを遠避けている今、彼女の私室には彼女しか居ない。一人でこっそりおやつを独り占めしても、戒めるものは誰も居ないと言ふ事だ。

「バカな事を言つてないで、とつとと行つて来いっ！！！！！！」

彼の手からお盆を無理やりもぎ取ると、シェリエルフィアは尖ったハイヒールの先でセティスを蹴りだす。彼女の手に移ったアップルパイに、この世の終わりに似た哀しげな瞳を向けると、彼は肩を落としてその場を立ち去った。

「僕は知りません」

きつぱりと言い切つてみたが、王が納得していないのは明らかだった。

切れ上がった眦は更に細められ、広間の主君席から三段下がった

場所で跪く王妃の従者を凝視している。王女の不在に、いつもは温和な表情が一変していた。後ろに控える衛兵や侍従長達も険しい顔をしている。

「そうか。では姫に最後に会ったのは一昨日と言う事だな？」

「はい」

「しかし、ラルフはそう申しておらん」

「その御仁が見間違えたのでは。昨日は僕、終始王妃様の実験用品を手入れしましたから」

「そなたの様に特徴的な体型の者を見間違える事も珍しい気がするがな」

「いやあ、それほどでも」

場を和ませようとした返事は逆効果だったようだ。広間中に立ち込める暗雲が更に広がり、部屋の温度が2、3度下がった気がする。ラルフは森番で目も良い。もし見間違えたとしたらかなりそなたと似た相手と言う事だ」

「ごもつともだと思えます。でも僕じゃありません」

「証明できる者は？」

「残念ながら。一人でしたから」

「姫の行き先に心当たりは？」

「存じかねます」

「そなたは…姫とかなり親しくしていた様に見受けられるが」

「僕、女性と子供には昔から受けがいいんです。それに…」

「ん？」

「王妃様と仲良くして頂くためにも悪い事ではないかと思いましたし」

「見事な忠義だな」

「恐れ入ります」

「姫の事をどう思っていた？」

「大変愛らしい姫君だと心得ます」

「扱いにくく思っている者は少なくないが」



「これはあくまで僕の推測だと心置かれています」  
「申せ」

「時には生まれた時から知る者よりも、見も知らない他人のそばにいる方が気が楽な事もございましょう」

「……ふむ。一理あるな」

「恐れ入ります」

小さな姫の複雑な事情を示唆する言い方に、周りにいた者達は色めきたった。

セティスと王のやり取りは淀みなく、それ故に緊張感是否が応にも増し、セティスと仲良くしていた者たちははらと固唾を飲んで成り行きを見守っている。しかし、少年がそれを気にかける事は一向になかった。どこまでもマイペースが信条である。

しかし、ホワイトスノウがいないのは事実であった。

いつもなら必ず父王の元に朝の挨拶に来る娘が、今日に限って来ない。風邪でも引いたかと使いをやれば、姫付きの侍女たちが血眼になって姫君を探していた。

元々一人でふらりと姿を消す事の多い少女だが、父親に心配をかけるような真似だけは今まで一度もした事がない。探索は城中を徹して行われたが、未だに彼女は見つかっていなかった。

「恐れながら陛下、姫君の靴や上着はすべてあるのでしようか」

「何故だ？」

「もし万が一、姫君が御自らの御意志で城から出られたとしたら、薄着ではたまりますまい」

「その可能性があると……？」

「ゼロではないかと存じます」

「……外出用の上着でなくなったものはない。故に城内を探索しております」

つまり、王自身もあらゆる可能性を探っていると言う事だ。

「かなり降雪量が減ってきたとは言え、まだ根雪が溶けたわけでもない。むしろ今の時期の方が災害は起きやすい。姫とてこの国に生

まれた者としてそれくらいは知っておる。もしあの子が城から出る事があるとしたら……それは自らではない可能性が高い。たとえばこの雪の恐ろしさを知らぬ異国の者とか、な」

「……僕には動機がないと思いますが」

「そうだな。しかし何もしていない証もない。そなたには姫が見つかるまで牢に入ってもらおう」

「お待ち下さい、陛下！」

突然、凜とした声が広間に響き渡った。

「王妃の従者を王が更迭するのですか？」

大広間の扉の前で、きつちりと髪を結い上げて、首の詰まった上品なドレスを纏ったシェリエルフィアが、真つ直ぐに王の目を見つめる。どうやらこっそりおやつを食べていたわけではないらしい。

「シェリエルフィア、貴女には不便をかけますが、その分侍女を倍に増やしましょう。しばらく辛抱頂きたい」

「誤解なさらないで下さいな。臣下<sup>それ</sup>がどうなろうと私には全く関係ない事。しかし自分の所有物が他者の手に委ねられるのですから、それなりの対価を戴きたいですわ」

「……と、言いますと？」

「金50枚」

広間の空気がざわりと揺れた。王妃は自らの従者を金品で差し出そうと言うのだろうか。元々人好きのする少年だっただけに、非難にも似た視線が王妃に集まる。しかしこちらも一向に頓着しなかった。どこまでもマイペースな主従と言えよう。

「わかりました。後で貴女の部屋に届けさせましょう」

「ありがとうございます。そのマッシュルームは煮るなり焼くなりご自由になさいませ」

（うわ、ひっでー）

王と王妃の会話を二人の間で聞いていたセティスは、心の声を喉の奥で飲み下す。あっさり主に売り渡されてしまった。これでは今日のおやつはないも同然ではないか。

「王妃に訊く。事情は既にご存知と思うが……姫の行方に心当たりは？」

「残念ながら。陛下も御存知の事と存じますが、姫は私の努力に相応の応えを下さるようには見えませんでした」

それは周知の事実である。

王妃から義娘へのアプローチは何度かあったものの、二人の新密度が上がっていないのは誰の目にも明らかだった。そんな折に続く謎の事故で、彼女たちの接触はこのところ絶たれている。故に王妃への嫌疑は薄かった。

「けれど我が従者と姫君が親しくさせて頂いたのも存じております。陛下の御心痛、お察し致します」

「……姫の行先にお心当たりは？」

「皆目」

言葉少なに答える王妃の整った美貌は、表情をなくして人形の様でさえある。その心情は読み取り難い。

リグナルドは壇上で大きく息を吐く。

「このところ貴女には不運な事故が続いてました。今回の騒ぎがその一端に連なるものでない事を祈ってます」

「……陛下の御心のままに」

「周りに人を置かぬなら、貴女もくれぐれもご注意下さい。どうも……不穏な空気が立ち込めている様な気がしてならない」

「……重々、心しますわ」

「下がって結構です」

スカートの裾を持ち、軽く膝を曲げて会釈すると、王妃は優雅にその身を翻して退廷してしまう。残されたのは呆氣にとられたような面々であった。

本気だろうか。

突然従者が誘拐の容疑をかけられていると言うのに、救おうとする素振りさえ見せず、むしろレンタル料を請求だけして去ってしまった。情に重きを置く辺境の人々には信じられない光景だった。

当の従者と言えば、先ほどの利発さはどこに行つたのか、陛下の御前から一步も動かないまま深く項垂れてしまっている。当然だろう。一步間違えば彼の命は風前の灯とさえ言えるのだ。

丸い肩を更に小さく丸めた様子は、大いに同情を買っていた。

もつとも彼の心中に吹き荒れる嵐の大元を、誰一人知る由もない。

（やっぱり、一口でもアップルパイをつまみ食いしておくんだった！ いやでもワンホールだったしな、ばれるよな……）

そんな一見悲劇に陥つた少年と、それを厳しく凝視する王の姿を、広間の中にいたある人物が何の感情も滲ませずじつと見ている。

大丈夫だ。王の疑惑はこの少年に向いている。誰も自分の事を疑つたりしないだろう。

「そう。あのこがいなくなったの」

揺り椅子でゆつたりとしたリズムを刻みながら、老婦人は塔の窓から外に目をやる。

彼女の部屋からは東の森が一望できたが、その森も今は真っ白に覆われてなだらかな丘陵にしか見えない。ひざ掛けを何枚も重ねた上に両手を重ねながら、エメラルディアは哀しみともつかないあえかな苦悩を見せた。

「どこに……行つたのかしらねえ」

「心配いりませんよ。きつと陛下が探し出して下さいます」

侍女の慰めの言葉を、どこか遠くにぼんやりと聞いている。本当にあのこは戻ってくるだろうか。

あまりに美しい子だから雪の精が連れ去ってしまったのではないだろうか。

雪の様な肌。黒檀の髪。熟れた林檎色の唇。愛しい美しい娘。世界でもっとも

「もう…戻ってこないんじゃないかしらね」

「なんて事を仰るんですか！ お戻りになりますとも、ええ！ カティヴェルダ様がきつと護ってくださいます！」

「そう、ね」

カティ。哀れな娘。己の罪深さに耐える事が出来なかった。

「シェリエルフィアさんはどうなさっているのかしら」

「王妃様は…部屋に引き込まれて一步もお出にならないそうです」

「そう。お気の毒ね」

「ええ…」

侍女は言いよどむ。しかし、王に金を請求したなどここで話して老いた彼女を煩わせる事もないだろう。

「カモマイルミルクでもお淹れします。きっと気持ちが悪くなります」

「そうね。そうして頂戴」

老婆はいつもの上品な笑みを浮かべて言った。

「ちよつくら寒いけど、我慢してくんな。一応毛布もあるからよ」  
連れて行かれた地下牢は、そっけない作りではあるものの清潔で、思ったより酷くはない。一応王妃の従者として優遇はされているらしい。

「いえいえ、充分ですよ。ありがとうございます」

「王妃様もなあ、ちつとはあんたの事を庇っても良さそうなもんだが」

「言わないで下さい。どっちにしろ僕はなにもしないんだから、すぐ出られると思いますし」

「そうか？ そうだな…」

衛兵も牢番も、先ほどのやり取りを知っているせいか、この純朴

素朴に見える少年には大変好意的だった。

「あとでこつそり何か差し入れてやるよ。何がいい？」

「わ、嬉しいな。今日のおやつを食べ損ねたから僕もうおなかぺこぺこで」

オーバーにもよろけて見せるのを、牢番が慌てて支えようと近寄った。

「すみません。大丈夫です」

がっしりとした手の牢番に礼を言つと、少年は毛布を体に巻きつけながら牢の奥までぽてぽて歩いてしゃがみこむ。懐には牢の鍵がしっかりと握り取つてあつた。

「にしても、心配だなあ。姫君はいつたいどこへ行かれたんでしよう」

「んだなあ。本当に今年の冬はろくなことがねえ」

「早く見つかるといいですねえ。このままだと僕はずっとおやつ抜きです」

「少しはダイエットになつていいべさ」

「そんなあ！このぼっちゃりが僕のチャームポイントなのに！」

「んだか！」

牢の中と外をほのぼのとした空気が流れる。

とりあえずすべての仕事から解放された幸運に感謝しながら、セテイスは牢の中で横になると、すやすやと寝息を立てて眠り始めた。

たぶん、夜が更けたら忙しくなるだろう。

## 鏡よ、鏡

鏡よ鏡、世界で一番美しいのはだあれ？

それは勿論お妃様。

人目を忍んで繰り返す呪文。

他愛ない遊びだと分かっていたが、やめられなかった。

それでも、本当は知っていたのだ。真に一番美しいのは誰かと言う事を。

彼女の顔が妬みで歪む。

あの子さえいなければ、私は幸せになれたかもしれない。一瞬でもそう思ってしまった自分に吐き気がした。

あの子のせいじゃない。あの子には何の罪もないのに。

白雪のような肌、黒壇の髪と瞳、熟れた林檎のような唇。誰の目にも美しい娘。

あの人だって、私さえ妻にしなければ……

（ごめんね、リグナルド）

泣く寸前の子供の様な顔で、王妃はそつと鏡に頬を擦り寄せた。

薄暗い実験室の小さな薬品棚の前で、金髪の王妃は暫し考え込む。いつも嚴重に鍵が掛けられていたその扉は、今、中身がはつきり見える様に開かれている。

「やはり……これかな」

小さく呟くと、棚の中程から硝子の壺を取り出す。中には琥珀色

の液体が満たされ、嚴重に封がしてあつた。

「いや、でも……」

迷いがあるのか、彼女は一度手にした壘を棚に戻しかけ、大きく首を振って溜め息をついた。

「いや！ やはり、背に腹は変えられん……！」

何処か悄然とした面持ちで何かを思い切ると、彼女は壘を片手に持ったまま、しっかり薬品棚を閉めて再び扉に鍵をかけた。更に一旦壘を台の上に置いて、姿鏡で薬品棚を隠す。

その途端カサリと小さな音がして、音源を探り見た。

鏡の下枠がずれ、小さな紙切れの端が見える。

「これは……？」

紙切れに書かれた内容を黙読していたシェリエルフィアは、その並ぶ文字を凝視したまま、しばらく考え込んでいた。

二人いた牢番は夜には一人になり、その一人は今ぐっすりと眠っていた。こんな時の為に、袖口には眠り薬を塗った針が仕込んである。直線距離ならば、口に専用の針筒を含んでかなり飛ばす事が可能だった。近くに居なければ呼び寄せればいいだけの事だ。方法はいくらかもある。

鍵は掏り取ってあつたから、牢から抜け出るのも造作もなかった。もともと鍵が無くて、持参の針金で大抵の鍵は開けられたのだが。極力音が出ないように忍び出る。

「すみません、夜が明ける前には戻りますからね」

何処までも能天気な呟きながら、抜き足差し足階上に続く細い螺旋階段を上ろうとしたその時、壁の蝋燭の火がふわりと揺れた。

「外出するなら行き先を訊いておこうか」



「げ」

階段の一番上には、長い足を無造作に組んだ王が面白そうに囚人を見下ろしていた。

「へ、へ、へ、陛下におかれましては此度の御心痛、謹んでお見舞い申し上げます」

「全くだ。囚人はいとも簡単に牢を抜け出してしまうしな。心痛はたまる一方だ。これは厄年と言う奴か？」

予想もしなかった王単身の登場に、さすがの肉まんも引き攣った顔を見せる。

「めめめ滅相もない。あ、あは、あはははは……」

意味のない台詞に、笑いが寒気団の前兆並みに乾いていた。思わず後じさりしたくなるが、せまい螺旋階段と言う場所がそれを鈍らせる。迂闊に後ろ向きで降りて牢番を起こしたくはない。

「とりあえず行き先さえ言うてくれれば見なかった事にしても良いが？」

「え？ えーと……」

王の真意が解らず口ごもる。昼間の恐ろしさとは打って変わって打ち解けた口調が別人の様だった。

（どうなってるんだ、この人？）

「もちろん嫌ならこの階段から蹴り落としてもいい。もしくは知りたい事を聞き出す為に別の方法をとっても」

若き王の瞳が脅迫の色を帯びる。口元は笑っているのに、目が笑っていないかった。

「……拷問なら無駄ですよ。効かない様に訓練を受けています」

対抗して、珍しく真剣な顔で、真面目なセリフを吐いてみる。

「それは残念。我が国に古来より伝わる雪責めを是非試してみたいかっただが」

呆れるくらい簡単に、王は前言を撤回した。

「……後学の為、どんな責め方かお聞きしても良いでしょうか」

さも残念そうな王の語尾に一抹の不安を覚え、つい内容を訊いて

しまう。雪責めと言うつくらいなら、北国特有の方法だろう。知っておいて損はない。丸い顔に好奇心が浮かぶのを見て、王は更に面白そうに口の端を上げた。

「無理やり口の中に雪を詰めて口を塞ぐ。中身が溶けて飲み込んでしまえば、また次の雪を積める。ひたすらそれを繰り返すんだ。どうだろう。こんなんでも本当に効果があると思うか？」

「……………」

絶対腹を壊しそうである。下痢が止まらなくなるんじゃないだろうか。単純な、と言うよりバカバカしいとさえ言える責め方だが、意外に精神的重圧は強そうである。もしかしたら昔は本当に実践されていたのかもしれない。

「嘘ですごめんなさいそれだけは勘弁して下さい痛くはなさそうだけどなんか嫌々っ！」

三秒で白旗を上げたセティスに、リグナルドは口許を綻ばせた。  
「この際、何でも聞いて下さい。もうこうなったら何でも白状しますから！」

「それじゃあ小手調べに聞いてみよう。王妃の実験内容は？」

「それを言ったら王妃様に殺されちゃいますよあ、自分で聞いて下さい！」

あっさり前言を翻す。変わり身の早さが彼の売りだった。しかしリグナルドも怯まない。

「それが彼女ははぐらかして教えてくれないんだ。そなた、ここで私に殺されると王妃にとどめを刺されるのと、選択肢があるのは幸運だと思わないか」

「あわ！ 物騒なもの向けないで！ 言います言います王妃様は近隣の温泉の成分を調べておいでです」

意外な答えに、細剣を鞘から抜いたリグナルドは片眉を上げる。

「何のために？」

「つまりそれは、……………」

躊躇う少年の頬を、細剣の刃先がツンツンつく。ぷよんぷよんと程よい弾力性がなかなか面白かった。しかし突かれた方はたまったものじゃない。

「つまり美肌に効く理由が解つたら合成が可能かもしれませんから、特許を取って売り出すんだそうです！」

理由を聞かれたらどうしよう。ぶつちゃけいつ城から追い出されてもいいよう飯の種を探しているとは、さすがに王には言いづらい。もつとも恐らくそれだけではないのだが。

「……………そうか、まあいい」

しかし、何となく聞いてはいけない事と察しを付けたいらしい。

良かった、訊かれなかった！ 不要領さを飲み込んだ王の顔に、セティスは胸を撫で下ろす。

「で、これからどこに行くつもりだ？」

「あ、話が戻っちゃった」

惜しい。まあ、簡単に誤魔化せる相手だとは思っていなかったが。「そなた、本当は姫の居場所を知ってるだろう」

「どうしてそう思うんですか？」

きょとんと可愛らしく眼を丸くして見せたが、王はやはり誤魔化されてくれなかった。

「言つたろう。ラルフは目が良い。そうそう誰かを見間違えたりはせん」

「……………お断りしておきますが、連れ出したのは僕じゃありませんからね？」

「そうだろうな。理由がない」

昼間と言ってる事が真逆である。セティスは深い溜息を吐いた。思つた以上にこの王は狸だ。

「けれど、城にいるよりはそのまま外におられた方が安全かと判断しました」

「なるほど。で、これから姫に会いに？」

「……………」

「その強情さはそなたの美德かもしれんな。そなたを信用するから、白雪姫を守ってやってくれ」  
ホワイトスノウ

「…陛下？」

王の申し出は従者の少年を驚かせるのに充分だった。彼になら代々仕えた忠義の家臣が山ほどいるだろうに、何故よりによって新参者の怪しい従者に頼むのだろう。そんな思いが顔にも出ていたらしい。細剣を鞘に納めながら王は苦笑する。

「そなたを投獄したのは本当の敵を油断させるためだ。私の疑念がお前や王妃に向かっていると思わせたかった。同時に、そなたが牢にいる事にすれば自由に動きやすいかと思つてな。よもや、牢にいる筈のそなたが私の手駒となつて動くとは誰も思つまい」

つまり、セティスが自力で抜け出さなければ彼自身がこっそり出獄させるつもりだったらしい。道理で牢に入る際の身体検査も適当なものではなかったわけだ。牢番がセティスに同情してくれただけかと思つていたのだが、甘かったか。

一体王は何をどこまで知っているのだろうか？ 一体何を企んでいる？ セティスは能天気な表情を変えぬまま脳をフル回転させる。

彼は果たして敵なのか、味方なのか。彼の言う本当の敵とは？ そんなセティスの思考を遮るようにリグナルドは淡々と言った。

「だが、ひとつだけ言っておく。問題はあの子を殺そうとする者がいる事じゃない」

「は？」

「仮にも一国の姫だ。ある程度の護身術は身につけさせてある。しかし……」

言い淀むリグナルドに、セティスは軽く頷いて見せた。

「袖の下にある傷の事ですか」

「……知っていたのか」

「うつすらと」

滅多に見えぬ様、長めに作られたドレスの袖から、ほんの時折、無数の傷が覗いていた。恐らく、腕以外にもあるのだろうと見当を

つけていたが、それを誰が付けてたかまでは推測の域を出ていない。しかし、利き手の反対側ばかり見える訳は、思いつかぬでもない。

即ち 自傷行為。

「ああ。つまり、問題はむしろあの子自身が死にたがっていると言っ事だ。頼む、あの子を死なせないでやってくれ」

初めて、リグナルドの瞳に父としての情が浮かんだ。その堆積した疲労を含んだ笑みに、彼が今まで我が子を守るために、いかに全力を尽くしてきたかが窺い知れる。

「このセテイス、一命を賭しましても」

だから真摯に答えた。完全に信用したわけではないが、たぶん、娘を愛しているのは嘘じゃない。

「色々……望んだ時期が迫っている。無事に事が済んだ暁には、臨<sup>ボ</sup>時賞<sup>リナス</sup>与をとらそう」

「やった！ 今の言葉、お忘れなくお願いいたします」

破顔する従者の顔に、王も再度口の端をあげて微笑んだ。

「最後に、一つだけお聞きしてもいいでしょうか？」

無邪気に聞いてくる少年に、リグナルドは目で質問を促す。

「何故、一度破談になったシェリエルフィア様との婚礼を、再度決意されたのですか？」

階段を上がってくる彼に、リグナルドは悠然とした余裕を崩さぬまま答えた。

「彼女以上の適任者がいなかったからな。しかし」

「しかし？」

すれ違おうとする少年に自らの細剣を差し出すと、王はさも楽しげに笑った。

「彼女は想像以上、いや、予想外の人物だったな」

その笑みがあまりに柔らかい光を含んでいたので、それ以上何も訊けぬまま口を噤んでしまう。

（あれ？ もしかするとこの人……？）

しかし、時間は限られている。今はすべき事を優先させねばなら

ない。

「北の裏門近くの茂みに抜け出られる場所があつて、外に馬がつないである。必要なら使え」

端正な横顔を崩さぬまま王が言った。

「……夜明けまでに戻ります」

「ああ」

短く最後の言葉を交し、セティスは音も立てずに立ち去った。

背中の方こうで彼の気配が消えるのを感じ、リグナルドはもう一度、今度は闇を含んだ笑みを漏らす。

（ カティ、もうすぐだ。もうすぐ君との約束を果たせる ）

王も音も立てずに立ち上がると、階上の闇の中へとその姿を消し去った。

目覚めて一番最初に目に入ったのは、暖炉の薪が赤々と燃える様子だった。

彼女の体には男物の大きな毛皮のマントがかかっている。

（ よいか？ ここから出てはいけない。一步も出ずにここにいろのだ。そうすれば、お前の命を望む者達からお前を守ってやれる ）

彼はそう言った。

それが、真実でも真実でなくても構わなかった。

父は新しい義母に惹かれている。見ていればわかる。きれいな人だ。金色の髪も、碧く青い瞳も。物語に出てくる雪の女王そのものだ。だから、自分はもう必要ないだろう。

母が愛せなかった自分。母が愛さなかった自分。

母と自分の間で、父がどれだけ苦しんだかは知っている。祖母が教えてくれたから。

（貴女の父上はすべてを隠そうとするでしょう。でも貴女は賢い子だから、真実を知っておくべきだわ）

そう言つて、膝に抱きあげながら色々教えてくれた。知つていてよかったと思う。知らないまま、父を苦しめ続けたくはなかった。

父は、幸せになるべきだ。母や自分の事は忘れて。

心の底からそう思うのに、何故胸が痛むのだろう。

こみ上げてくる涙を袖で拭こうとして、ちりちりなる音に気付いた。カフスボタンに挿された小さな金の鈴だった。小さな娘の衣装にはよくある飾りである。しかし、これは城を出る前に偶然出会った少年がくれたものだった。あの、ふかふかとやわらかい手をした少年。

（お守りです。姫様が幸せになれますように）

そう言つて、彼女の両手首のボタン穴に挿してくれた。

鈴は、彼女が腕を振るたびに小さくちりちり鳴つて、彼女の心を柔かくほぐす。

手首を上げて、窓の外の月の光に鈴をかざすと、きらきらと粉の様に小さな粒子が光つて落ちるのが見えた。

（きれい……）

妖精の粉があるとすれば、きっとこんな光を放つのだろう。

もちろん、その鈴に仕込まれたのが特殊なきのこの胞子の一種で、月の光を浴びた時だけ光る代物だとは、この時点で彼女は知る由もない。

「あちゃー、雪が降らなくてマジ助かった！」

春が近づいているせい、雪が降る日が減ってきている。シェリ

エルフィアの見立てでもしばらく大雪にはならないだろうと言っていたから、あの小さな姫に鈴を持たせたのだ。

とは言え、雪が降ってしまったえばツキヒカリダケの粉も役には立たなかったろう。

あの日、少女の様子がおかしかった。だから、細工付きの鈴を持たせた。その後、彼女は消えたから、我ながらいい勘だったと思う。隠された真実にあと一步と言うところまで来ているのに、ここで彼女を失う訳にはいかない。それでは彼の本当の雇い主との契約が果たせない。

「にしても…思ったよりハードだったかも」

軽い口調でばやいてみる。大抵の事は平常心で乗り越える自信があったが、それにしてもこの国の事情は込み入っている気がする。しかも、厄介のなのは野望や野心の類が感じられないと言う事だ。その手の事には鼻の利く彼だったが、人の情に絡んだものほど手に追い難いものはないのだ。

懐には王妃に託されたガラス瓶が布に包まれてしまいこまれていた。彼女がこれを使うと言う事は、かなり本気なのだろう。

月明かりに照らされた森の雪原には、ちらちらとツキヒカリダケの胞子の道筋ができていた。セティスは注意深く、光の筋を追って森の中を進んでいく。

やがて少し拓けた小さな場所に、小さな小屋が建っていた。王領地だから人が住んでいるはずはない。狩猟小屋のひとつだろうか。窓の中からぼんやりと光が漏れている。屋根の煙突から細い煙が上がっているところを見ると、中に人が居るのだろう。

中の気配を探りながら、注意深く扉を開けて中を窺う。さほど広くない部屋の中に、一人の少女が座っていた。

「姫」

小さな声で呼んでみる。

少女は驚いた顔で振り返る。

「よかった、ご無事です」



彼女一人しかいないのを確認すると、セティスは微笑みながら彼女に近付いた。しかし、ホワイトスノウの表情は硬い。

「お迎えに上がりました。僕と一緒においで下さい」

少女は青ざめて首を横に振る。

「ホワイトスノウ姫……」

その時不意に、彼女が自分の背後を見ていることにセティスは気付いた。

「誰だ！」

扉の外には長身の影が弓を構えていて、細い矢が彼めがけて飛んでくるのと振り返ったのがほぼ同時だった。

鋭い音を立てて一本の矢が彼の肩に当たる。

「く……っ！」

眩暈がするのは何か薬が塗ってあったのか。

くらりと世界が揺れる気がした。矢が刺さった場所がみるみる真っ赤に染まり始める。

（こんなところで……）

拾い額には脂汗が滲んでいた。

突然、ホワイトスノウの脳裏に、過去の光景がオーバーラップする。鏡の前、呪文を唱える母の姿。目が合った途端、崩れるように倒れ落ちる

（お母様、お母様、お母様　　！）

がくりと膝をついた少年の姿に、少女の恐怖が内側から爆発した。

「いやああ……！！！！！！！！！！」

静かな夜の森に、少女の悲鳴が響き渡っていた。

## 七人の刺客

捕らえられた筈の王妃の従者は、夜が明けても帰って来なかった。脱獄が公になった手前、王が王妃を呼び出したが、王妃は「あんな肉まん一人閉じ込めておけないなんて」と呆れた口調でにべもない。そんな王妃に、王は硬い表情を崩さぬまま、何も言わなかった。

殺伐としたやり取りに、広間中にいた全員が固唾を飲んだが、王妃はまったく感心を示さずその場を立ち去る。そのまま私室に鍵をかけて、誰一人寄せ付けようとしなかった。

だから、彼女が部屋の中で何をしているか、知る者はいない。

失敗したのね。

薄闇の中で、彼の女神は侮蔑の笑みで言い捨てた。彼の背筋に冷たいものが流れる。

隠してはいるが、右腕には包帯が巻かれていた。よもや、あの状況で反撃を受けるとは思ってもみなかった。

あの子を殺してとお願いしたのに。

「しかし、まだあの子は幼く何の罪もない」

あら、私より美しいのは充分に罪でしょう。

「いや、貴女の方が数段美しい。だから……」

……やはり、あの子に情が湧いたのね。何せ自分の血をひいているのだものね。

彼女の冷たい笑みは、澄んでいてどこまでも彼を凍り付かせる。

でも、私はあの子を憎んでるの。知ってるでしょう？　だからあの子を殺して。あの、目障りな王妃諸とも。

彼女の言葉には一切の抑揚がなく、それ故に混じりけのない純粋な憎しみを思わせる。彼に抗う術はなかった。

新しい王妃は思った以上に手強い。既に何度かの試みは失敗に終わっているし、最近は部屋に引きこもりがちで、表に出てこなくなつた。しかし王妃が人を遠避けるなら、あるいは逆に仕留めるのは容易いかもしれない。部屋に忍び込めれば、人目につかずに処理できるだろう。

そう思つて、足音を忍ばせ王妃の部屋へ向かったが、扉の前には先客が居て思わず身を隠す。

人影はふたつ。扉越しに王妃と話しているようだが、声が小さくてよく聞き取れない。

やがて王妃の部屋の扉がゆっくりと開くと、人影は扉の中へと消えていった。

（間の悪い……）

彼はそう判じて踵を返し、再び闇の中へと消えていった。

扉を叩く音をずっと無視していたが、あまりにも諦めないで根負けした。

「一体、お二人揃つて何の用です」

不機嫌さを隠しもせず、王妃は客を招き入れる。王妃を訪ねたのは侍従長ハロルドと侍女のマディラであつた。

「こんな時間に大変申し訳ありません。どうしても、その…王妃様にお伝えしたい事があつたものですから…」

あくまでへりくだつた態度を崩さない臣下達に、一人がけのソファのクッションに身を沈め、大きく足を組んだ王妃は目線で向かいの椅子を促すが、二人とも立つたまま身を崩そうとはしなかつた。

「前置きは結構。手短にお願いします。私も色々忙しいので」

言葉遣いこそ丁寧だが、その態度はぞんざいそのものである。只でさえ美しい王妃のその態度は、鼻持ちならないことこの上ない。

「それでは率直に申し上げます。シェリエルフィア様、どうか陛下

の事を、お見捨てなく頂きたい」

白く豊かな髭に覆われた口から漏れた侍従長の言葉に、シェリエルフィアは軽く目を瞠る。侍従長の後ろで、マディラも小さく頷いていた。

「シェリエルフィア様がこちらへ嫁がれていらして、ご不快な事が多く続くのは重々承知で申し上げます。どうか、陛下の事を」

「待て、それを私に言うのは早計ではないのか？ 私がこの国の王妃としてふさわしいかどうかはまだ決まっていまい」

王妃の言葉に、二人は目を見合わせると、小さく微笑んだ。

「王妃様がその…多少風変わりな方でいらっしゃるのは我々として気付いております。今でさえ、何かお考えがあつて人目を遠ざけている事も。しかし、こここのところの不穏な状態で城の中も落ち着かなくなっている。何よりホワイトスノウ姫様の失踪は、陛下に大きな影響を及ぼしかねません。我々は…せめて王妃様のお心にお約束を頂きたいのです」

年老いた侍従長の言葉は真摯に響き、裏心を感じさせない。それがシェリエルフィアには解せない。

「王妃様のお気持ちも分からなくはありませんわ」

彼女の表情を読んだかのように、マディラが柔らかに微笑んだ。盗みの疑いをかけられて人員交代されたことなど、露ほども気にかけていないようだ。

「それでも…前の王妃様が、カティ様が亡くなって以来、陛下が心から笑顔を御見せになつたのは、シェリエルフィア様が嫁いでらしてからなんです」

「！」

さすがにそれは、シェリエルフィアにも思いも及ばぬ事だった。いつも、穏やかに微笑んでいるのが普通だとさえ思っていた。

「王妃様の…もうお耳に入ってるかとは存知ますが、カティ様がお亡くなりになってから、陛下には辛い事が続きました。ホワイトスノウ姫が口をきかなくなり、そればかりか何度も自分を傷つけ始め

て……眠れずに暴れる姫様のために、陛下はずっと眠らず付いてらしたんです。私達はお止めしました。陛下には公務もございましたし、侍女が交代でつくから、けれど『これは親の役目だ』とおっしゃって……」

マデイラの瞳が切なげに揺れる。

「私達は皆、陛下を尊敬し、お慕い申し上げております。ぜひとも、陛下には幸せになって頂きたいのです」

「…その為には、性根も分からぬ女を受け入れてもよいと？」

揶揄するような笑みを浮かべる王妃にも、侍従長達は動じなかった。

「確かに、シェリエルフィア様とはまだお会いしてから日が浅い。我々がお互いを深く知るにはまだ時間が必要でしょう。それでも…我々は貴女を望んだ陛下の御心を信じております」

きつぱりと、穏やかに言い切る二人の姿に、シェリエルフィアは深く考えこむ。

リグナルドがこれほどまでに臣下に慕われているとは、解っていた気もするが、他者に言われる事でその人徳を改めて思い知る。善政を敷いてきたという事だろう。亡き王妃との間のトラブルがあった尚、その幸せを望む者達がいる。

それでは彼の後ろにできる奇妙な影の正体は？

険しい顔で黙り込む王妃の姿に不安を覚えたのか、二人は沈黙したまま落ち着かない様子を見せた。

「その、王妃様、今回の事はあくまで我々の独断でして、決して陛下はこの事は…」

言い訳しようとする侍従長に、しかし、王妃は自分の両手の指を顔の前で組んで意外なことを言い始めた。

「林檎の半分にだけ、毒を入れることは可能だと思いますか？」

「は？」

突然無理やり方向転換された話題に、侍従長はぽかんと口を開けてしまう。林檎？ 何かの比喩だろうか。

「昔：、母に読んでもらった御伽噺の中で、義理の娘を殺そうとする魔女が、林檎の半分にだけ毒を仕込む、というのがあったんです。半分を自分で食べて見せ、安全を確認させてから残りの半分を差し出す、娘は安心してその半分を食べ、死んでしまふ。でも：林檎ですよ？　中が房で分かれている柑橘類ならともかく、林檎に毒を仕込んだら全体に染み渡りそうな気がしませんか？」

「あ、あの、王妃様…？」

王妃の真意がわからず、侍従長もマディラも面食らったまま目を白黒させている。この王妃様の風変わりな部分は、ちよつとどころではないのかもしれない。

「侍従長殿、私はあれ以来、そんなものが本当にできるのか、知りたくてたまらないのです」

「はあ…」

そんな二人を面白そうに眺めながら、王妃は優雅に片目を瞑って見せた。

「あー、けものじゃない！　これはひとじゃないか！」

「てつきり野豚がかかったと思つたのになー」

「だからもう、罨を掘るのはやめようと言つたんだ。家の前にへんなものばかりおちてくる」

「やめようなんて言つたか？」

「言つた様な、言わない様な…」

「だって、おいしい野豚がかかったら嬉しいじゃないか」

「それは嬉しいな」

「うん、嬉しいな」

「かかつてないけどな」

「はあ、さんねん…」

頭の上で繰り広げられる馬鹿馬鹿しい会話に、ホワイトスノウは

徐々に覚醒し始める。

「わな？ 何の事？」

「あ、ちっさいのがおきるぞ」

「何か持つてるかな」

「いいものをもつてないかな」

「いいもの？ そんなもの何一つ……」

覚醒しかけた脳裏に、意識を失う前の記憶が突如逆流する。

隠れていた小屋で、現れたセテイスに行われた攻撃。広がっていく赤い血。

ホワイトスノウの叫び声に、蹲っていた少年がいきなり跳ねた。ばねのように体を跳躍させ、目にも止まらぬ速さでホワイトスノウを抱きかかえると、小屋の扉を楯にして森を走り始める。ホワイトスノウを抱えて走りながら、襲撃者には何かを投げつけていた。恐らくは小剣のようなものを。

ホワイトスノウは驚きで声も出ない。

しかし雪原を走っていた彼は何かを踏み抜いたらしく、突然体を沈み込ませる。当然ホワイトスノウごとだ。

「しっかり掴まって下さい！」

セテイスの声を聞きながら、ホワイトスノウはその体に必死でしがみつき、奈落の底へと落ちながら気を失ったのだった。

そして覚醒。

「セテイス――！」

目覚めた途端少女が叫んだ言葉はそれだった。

「せています？」

「この丸いじゃないか？」

わらわらといくつかの丸い顔が、倒れている彼らを取り囲んでいる。彼らは皆尖った帽子をかぶり、ホワイトスノウと変わらぬ位の背丈しかない。年配の男性の姿をしていながら、どこかその姿形はぬいぐるみじみていた。小さな小さな小屋の中である。

混乱の中で手を付けば、ぽよんとした感触が彼女の下にあった。はっと振り返ると、彼女の下敷きになる形でセティスが倒れている。彼の下になった床には血の染みができていた。

「セティス！ 大丈夫！？ おきて、お願い！」

必死で丸い体を揺さぶると、微かにうめく声が聞こえた。

彼女はもう一度振り返り、彼女達を見下ろす者達に必死で懇願する。

「お願いします！ 彼を助けて！ 怪我してるの！！」

涙で大きな瞳を潤ませながら叫ぶ少女の姿に、おかしな生き物達はお互いの顔を見合わせた。

「助けるのはいいが…そのお礼になるものを何か持っているのか？」

「え…？」

「只で助けてもらえるとは思ってしまい。人に助力を頼むなら、相應の礼が必要だ」

単純な造作の中でも、一番賢そうな一人が真面目な顔で言った。

ホワイトスノウは考える。あげられるもの。私が他人にあげられるもの。自分を助けてくれた彼の為に、差し出せる唯一の…

「いいわ。私の命を差し上げます。代わりに彼を助けて」

悲壮な覚悟を込めて言った言葉は、あっさりと棄却された。

「それはだめだ」

「どうして…！」

「捨てようとする命に価値なんかないぞ。そんなものをもらっても困る」

小人の言葉を聞いた途端、ホワイトスノウの瞳にみるみる涙が盛り上がる。

「そんな、だつて……」

どうすればいいのだろう。着のみ着のままで城を出てしまつたから、渡せるようなものは他に何も無い。しかしこのままでは彼が-

「…し…て」



その時、彼女の背後から呻いていた声が意味を成し始める。

「セテイ、ス…？」

「…い歳して…可愛い女の子、虐めてンじゃねえよ、この親父ども  
！…！」

「きゃー、にくだるまが暴れ出したー！！！！」

「誰が肉だるまだこら！　まとめて折り畳んで暖炉にくべるぞおら  
あ！！！」

「きゃー、くべないでー！　たすけてー！！！！」

突如、俗語で叫びだした怪我人に、小人たちはパニックに陥って  
部屋中を走り出す。そんな彼らを横目で流しながら、セテイスは大  
きく呼吸を整えてからホワイトスノウと向かい合った。

「心配させてすみません。僕はもう大丈夫です」

「だって、セテイス……」

必死でしゃくりあげるのをこらえながら、大きな黒い瞳が彼を見  
つめる。セテイスは彼女を安心させるように微笑んで見せた。

「大丈夫。出血が多いだけで大した傷じゃありません。それに僕、  
たいていの薬には耐性ができてるんです」

「…………ごめんなさい、私の為に……」

何の価値もない私の為に。そう少女は言いたかったのだらう。

セテイスはおもむろに体を起こすと、彼女の瞳をじつとのぞきこ  
んだ。

「昔…天涯孤独でスリを生業にしていたやせっぽちの子供がいたん  
です。彼が飢えかけてとうとう捕まった時にやけっぱちに叫びま  
した。『どうせ何の価値もない命だ、殺すなら殺せよ』とね。する  
と、それを見ていた女の子がこう言ったんです。『価値のない命な  
んて一個もないぞ』って……」

仰向けにされた少年をまっすぐに見下ろし、同情するでもなく嘲  
笑するでもなく、少女は淡々とそう言った。忘れもしない。あれか  
ら彼の運命は大きく変わっていったのだ…。

彼女は続けてこう言った。『お前の命に価値がないなら、私が価

値を作つてやろう!」。

…試される特効新薬や発明品の実験体に供される日々…辛かった死ぬかと思つた。神様、ごめんなさい! 価値がなくてもいいです、助けて〜!と何度叫んだことか。さながら走馬灯のように、セティスの胸にしょっぱい想いが去来する。

いやいや、今はそんな遠い昔の感傷に浸るときではない。水を注さずにこの小さな姫の心を救わねば。

強制軌道修正開始。

「僕も姫におんなじ事を言います。価値のない命なんて、この世にひとつもないんです」

たぶん。恐らく。可愛い女の子ならほぼ間違いなく。

胡散臭い従者の瞳が、純真な少女の目にはどう映つたのかは分からない。しかし、何らかのスイッチを押したのは確からしい。直後、彼女は激昂した。

「でも! 私がいたせいでお父様もお母様も悲しい思いをしたわ。

私がいなければあんな事にはならなかった。だから -」

「姫にそう言つたのは誰ですか?」

「え…?」

肉にうずもれたつぶらな瞳が、すつと細められる。

「姫にとってはいずれにせよ辛い現実かもしれませんが……、恐らく姫にそう吹き込んだ人物こそが、姫のお母様を死に導いた本当の黒幕です」

「……そんな」

驚愕に見開かれた少女の瞳の奥で、様々な葛藤が繰り広げられるのが分かった。

彼女には今、時間が必要だ。真実を理解するための準備時間が。彼はそう判断すると、それまで部屋の中をぐるぐる走り回つて疲労を見せ始めた小人の袖をひよいと捕まえた。

「手当てを頼む。報酬はちゃんと出す。それから…これは我が主<sup>あめじ</sup>からの依頼だ。そこに届けた小さな姫の命を護り、彼女に害をなそう

とする者を退けよ」

「えー……」

いかにも面倒くさそうな顔をする小人達に、セティスは懷から包みを取り出した。

「ちなみにこれが報酬の品。彼女の父親から金47枚と、我が主から約束の品だ」

小人達はセティスからの金品を受け取ると、交互に検分する。

「…、ああ、これはいい金だ。そのちっさいのへの愛情がこもってる。…しかし、47枚とは半端ではないか？」

「ぎくぎく」

「本当はもつとあつたんじゃないのか？」

「ないない！ 途中で消費税を消費したからそれであつてるよ！」  
「しょうひぜい…？」

冷や汗を流すセティスに、それでも小人達は気にするのが面倒だったのか、大事に金をしまいこむ。改めてもう一つの包みを剥がすと、中から琥珀色の液体が満たされた壺が現れた。コルクを抜いて順繰りに中身の匂いをかぐと、雷に打たれたように動かなくなった。  
「本当に…いいのか？ これを我々が貰っても」

「ああ。但し 成功報酬が条件だ」

セティスの言葉に、小人たちは大きく肯いた。

「よかるう！ お前達の依頼は受けた。このちっさいのはわれわれが視力を尽くして護つて見せよう！」

「こらまで、それを言うなら死力だろう。…本当に大丈夫なんだろうなあ、お前ら」

「なにを言う失敬な！ 目を皿にして敵の手から見張るから、視力でいいんだ。おれたちは知る有能無敵の仕事人であり、有名無実な視覚…じゃない刺客だぞ！？ 受けた仕事は確実にこなす。大船に乗ったつもりで任せるがよい！」

何が言いたいのかはいまひとつ不明だが、とにかく自分たちはすごいのだという主張は理解した。

「……いまひとつ不安だな……」

何せボタンの目を縫い付けたフェルト人形の様な小人達である。本当に信じていいのだろうか。さっき走り回っていた様子を見る限り動きは機敏だし、常人にはない力も何となくありそうではあるが、とは言え今彼自身、軽いとは言えない怪我を負っている。一人でこの少女を守り切れるとはいえない。何より事態はひっ迫しているのだ。背に腹は変えられない。

「……ま、いつか。何とかなるだろ」

目の前では言葉を取り戻した少女がまだ混乱覚めやらぬまま、縫うようにセティスの事をじっと見ていた。

## 毒林檎

「不愉快だ！ さつさと出ていけ！！」

苛立った女の低い声と共に、王妃の部屋から出てきたのは侍従長と侍女のマディラである。二人とも親の代やその親の代から仕える王家の忠臣であった。

戸惑い、険しい表情を見せながらも王妃の部屋を後にする彼らを見て、物陰に立つ男は何があつたのだろうといぶかしむ。温和で諍いを好まぬあの二人が、王妃の不興を買う様な真似をするとは思えないのだが。

ともあれ、これで王妃はまた一人だ。もつしばらくここで機会を窺うとしよう。

「本当に…、これで良かったんでしょうか？」

どこか要領を得ぬ顔で、マディラは侍従長に訊ねた。

本来なら侍女頭のリゼラが同行するはずだったのだが、少しでも王妃と親しみ、縁を重ねた者の方がよいだろうと、彼女が同行したのだった。

「そう、さな。あの王妃様はどうも我々には図り難いところがありだ。あの方と…あの方を望む陛下を信じるしかあるまい」

「そう、ですが…」

マディラの言いたい事を察してハロルドは懷に手を入れる。そこには彼女から託された手紙が入っていた。

『夜が明けたら、これを陛下にお渡しするように』

彼らに背を向けてさらさらと何かを書きつけた便箋は、王紋の入った封筒に蠟で封されている。

『これは…？』

尋ねる侍従長にシェリエルフィアは悪戯っぽく笑って見せる。

『今はまだ。しかしこちらにも予想外に手駒を失っている。まったく、危機に陥るのは美しいヒロインと相場が決まっているのに、あの肉まんは何をやっているんだか……そう思いませんか?』

芝居がかった様子で嘆いて見せる王妃に、ハロルドは『はあ……』と力なく相槌を打つことしかできない。

『これは……私の推測ですが……陛下は極力周りの者を巻き込みたくないと思っていらいっしやる、だから私が何をしても何も仰らないのだと思います』

打って変わって真面目な顔でシェリエルフィアは言った。

『だから……私は私でできる事をしようと思います』

『それは……?』

シェリエルフィアは一本だけ立てた人差し指を上品に唇に当てた。訊くな、と言う事だろう。

臣下の礼として、それ以上重ねて問う訳にもいかなかった。

『わたくしを……信じてくれとは言いません。ただ、今は一人にして頂きたい。敵の目を欺くためにも、孤立している事実が必要です』

『王妃様は……敵の正体を御存知なのですか?』

『まさか! 私は新参者ですよ?』

嫣然と笑う彼女の真意はやはり読めなかった。

『話はここまです。さあ、部屋を出て!』

そして突如怒り出したように彼らを急き立てた。さすがに預かった手紙は迂闊に人目にはつかせられぬから、懷に深くしまったままである。ハロルドはマディラと並んで廊下を歩きながら、哀しげな声で言った。

「マディラ、お前はカティ様にもお仕えしておったな。あの方をどう思っておった?」

訊かれてマディラも哀しそうな顔になる。

「お気の毒な方だったと……そう思います」

「そつだな。儂もそう思う」

深夜の廊下に手蠟燭の影を伸ばしながら、彼らは王妃の部屋から

遠のいて行った。

「だったら、私もお城に帰ります！」

「え！？」

高らかに宣言した少女に、傷の手当てを終えた従者の少年は口を大きく開けて驚きをあらわにした。

「いやでも、姫様にはここにいて頂いた方が確実に安全ですし……」

「だって、セティスはお城に帰るんでしょう？」

「僕は、その、シェリエルフィア様のお手伝いがありますから……」

「あなたが私に言ったんじゃない！ 私を騙そうとした者がいるって！ だったら、私はちゃんと本当の事を知りたい。お義母様やセティスだけに任せておくのは嫌」

強情そうに口元を引き締めて、彼女はセティスを睨み付けた。

口が利けない間はなかなかどうしてか弱く見えたのに、封じられていた何かが解けたのか、随分と勝気な少女に面変わりしている。が、よく考えてみればシェリエルフィアが嫁いだ時も彼女は義母を睨み付けていたのだ。案外こつちが地なのかもしれない。

「いやー、でも……」

「もういいわ、セティスには頼みません。お前たち！」

少女は振り返って後ろで様子を窺っていた小人達に叫んだ。

「なんだ？」

「あなた達は私を守ると契約したのよね？」

「その通り」

「その契約に場所は含まれていないわ。だったらこれから私はお城に行くから、あなたたちは私を守って一緒に来なさい」

「えー……」

いかにも面倒くさそうに答える小人たちに、ホワイトスノウは激昂する。

「えーじゃありません！ 行ってくて言ったら行くんだから！ 私が死んだら報酬は当然出ないわよ！？ さっきの壇は成功報酬じゃなかったの！？」

「あ」

やつと思いい出したかのように、彼らは悲しげな目になった。

「あんな単純な顔でも表情は出せるんだ」

セティスがどうでもいい事に深く感心する。とは言えぶっちゃけ彼も人の事は言えない。

そして何かを吹っ切ってしまったらしい小さな姫の変わりようはすさまじかった。これが一皮むけたと言うのだろうか。

「けどなー、俺たち基本的に人目に付くのはアウトなんだよなー」

「いちおうアウトサイダー扱いだしなー」

なおも言い募る彼らを、ホワイトスノウはあっさり一刀両断した。  
「もし見つかったら、セティスの親類って事にすれば？」

「え！？」

今度は両方から声上がる。

「なるほど、それもありかー」

「え？ なんで納得するの？ 僕ってこんなぬいぐるみキャラと同カテゴリーですか！？」

「失礼な事を言うな、まるいの」

「丸いのって言うなー！！」

唯一人、セティスだけが不服そうな顔をしたが、ホワイトスノウは気にも留めなかった。

「もう落ち込んで泣いてるのはうんざり。私は…私の目で本当の事を確かめる」

強い決意を込めて彼女が呟く。どこかでこんな風景を見た気がして、セティスは何かを諦めた苦い笑いをもらした。

結局、自分はこういう運命なのだ。



「こんな夜更けの訪問を御快諾頂き、心より感謝しますわ。どうしてもエメラルディア様に御知らせしたい事があって…でも、わたくしの心無い噂はもうお耳を汚していらっしやるんでしょうね？」

シェリエルフィアの迂遠な物言いに、エメラルディアは穏やかに微笑んで見せた。

「口さがない者は何処にでもいるものですよ。それで火急の御用とは？」

「それが実は…」

王妃は真剣な眼差しで顔を寄せる。侍女は控えの間に下がらせたから、部屋には二人きりだった。

「ホワイトスノウの事…？」

エメラルディアの表情が不安げに揺れた。

「御慧眼恐れ入ります。実は他言無用でお願いしたいのです。特に、陛下には内密にして頂きたい」

「リゲナルドに？」

老婦人は幼い少女の様に小さく首を傾げる。

「ええ」

「分かったわ。話して」

王妃の声が更に低くなった。

「姫は無事です。いえ、怪しい者に拐かされたのは事実ですが、わたくしの手の者が既に救いだし、安全な場所に保護しております」

「おお、神よ！」

エメラルディアは皺の入った細い指を胸の前で絡めた。

「もっと早くエメラルディア様にはお伝えしたかったのですが…わたくしも先程知らせを受けたばかりでして」

「構いませんよ。無事さえ分かれば…ああ、カティ…」

エメラルディアの閉じられた目から、透明な雫が滲んで落ちる。老婦人の部屋は、暫く暖かい沈黙が満ちた。

「それで…エメラルディア様、不躰とは重々承知の上で、お願いし

たい事があるのですが…」

「わたくしに？ いえ、こんなわたくしにできる事でしたら何でも致しますが…」

訝しむ様な老女に、シェリエルフィアは安心させるように頷いて見せた。

「失礼ですが…、視力はまだ…？」

「え？ ええ。近くのものを見ると少しぼやけますが、少し離れたものでしたらまだ充分見えますわ」

「それは重畳にございます。いえ、難しい事ではありません。ホワイトスノウ姫を拐かした者とわたくしの命を狙う者は恐らく同一人物です。だから……わたくしはその者を誘き寄せて正体をつまびらかにしたいのです。そこで」

王妃の細められた目にエメラルディアは息を飲む。

「明日の朝、この部屋からちょうど正面に見える北の塔に彼の者を誘き寄せます。だから、エメラルディア様は私が共にいる者を確かめ、誰か信頼できる者に知らせて欲しいのです」

幸いエメラルディアの部屋には呼び鈴紐がついており、大声を出さずとも紐を引っ張れば侍女室にいる誰かが必ず気付く。

「そんな！ 危ないわ！」

「ご心配なく。これでもある程度の護身術は心得ておりますれば…  
…接近戦では簡単には負けません」

「でも 相手が屈強な戦士だったら……」

「だから塔の上におびき出すのです。幸いあそこは一番高い塔だからこの部屋以外遠くから襲われる恐れはありませんし、狭いところでしたらある程度相手の動きを封じやすくなります。それにあそこなら人が登ってくればすぐわかりますから」

「……………」

「今までの『事故』を検証するに、細工を施したと思われる箇所は高い場所が多い。もちろん梯子や台を使ったとも考えられますが、相手は長身の者と考えるのが自然でしょう」

「まあ……」

「だからこそ、広い場所で待つのは不利です。こちらが動きやすく、細工しやすい場所を選ばねば」

仕掛け矢や武器になるものを予め設置する事で、地の利を有利に動かせると王妃は言っている訳である。それでもエメラルディアは不安を隠そうとはしなかった。が、根負けしたように渋々肯いた。

「貴女が……そこまで仰るのなら、その役目、お引き受けしますわ」  
王妃の顔が陽だまりの様に輝く。シェリエルフィアは老女の手をとってにっこりと笑った。

「感謝します、エメラルディア様」

「それで　その敵をおびき出す算段と言っののは？」

「それはですね　……」

王は侍従長に渡された封筒をピリピリ破いて中身を取り出す。

便箋に書かれた内容を目で追ううちに、例えようのない怒気が膨れ上がった。

「あの……跳ねっ返りが！！！！！！」

いつも冷静沈着な王の、初めて逆鱗に触れたようなその姿は、侍従長を初めその場にいた全員が凍りつき、後々まで語り継ぐほど激しいものだったと言う

「それで、何でこんな夜中に城に戻るんですか？」

「だって、ちっさいのがいそぐっつーし」

「くらやみにまぎれたほうがしのびこみやすいし」

「しっかり歩け、肉だるま」

「肉だるまって言うなー!!」

森の中の雪道を、小さな影が連なるようにして城へと向かう。

「ごめんね、セティス。大丈夫?」

さすがに怪我人を慮り、申し訳なさそうにセティスの様子を伺う  
ホワイトスノウに、当然きつい事は言えなかった。

「大丈夫です。ってーか、僕自身は今日中に戻るつもりではありません  
ましし…」

今頃、城ではシェリエルフィアが間抜けな従者に持てる限りの語  
彙を尽くして、ぶつぶつ文句を言いながら最後の詰めに入っている  
ことだろう。用心深く先を読む彼女の事だから十中八九間違いはな  
いと思うが、それでも一抹の不安は残る。

(たまに暴走するからなー…)

変人でも心は乙女。

リグナルドとの間にできた不信と言う名の溝で、自棄にならなけ  
ればよいのだが。

「しかし、馬くらい飼ってないのかよ」

「文句を言うな。我々は丈夫な足を持つてるから、どこまでも歩い  
ていけるんだ」

「あんたらはそうかもしれないけどさー」

傷口自体はもう大した事ないが、思ったより出血量が多かったよ  
うで、やや貧血気味になっている。いつもは軽く跳ねる体が些か重  
たいきがしてならない。

「…って、人の上にのっかるんじゃないっ!」

「あ、ばれた」

「丸いのはきつと転がった方が早いぞ?」

「誰が転がるか!」

「じゃあ、歌でも歌いながら行くか?」

「ピクニクじゃないんだから!」

「はいほーはいほー、月がとっても青いから」

「だから、どこの人だよ、あんたら……」

あまりに緊張感に欠けた会話に、つい、ホワイトスノウが吹き出した。

「おー、わらった。わらったほうがいいぞ、ちっさいの」

「え、あ、……」

思わず赤面する姫を気にする事無く小人達は無責任な会話を続ける。

「泣いて腹が減るより笑って減った方が気持ちいいしな」

「そーそー」

「ちっさいのはまるいのとちがってわらったほうが可愛いし」

「途中がちよつと余計だよ！」

「……わいくなんか」

「姫？」

「可愛くなんか無いほうがいい」

「え？」

「綺麗とか可愛いとか……そんなの欲しくない」

そう言ったきり、彼女はむっとり黙り込む。その瞳に再び暗い翳が射したのを見て、セティスはふうむと考え込んだ。

そうか、この少女は……自分の外見が嫌いなのだ。鏡嫌いも起因するのはそこだろう。

「城が見えたぞ」

空気をまったく読む気のない小人の一人が、行く手に広がる影を指差した。

「衛兵が少ない裏門から入りましょう」

「そいつらをころせばいいのか？」

「だめー！ー！ 一時的に意識を奪<sup>とど</sup>うに止めて下さい！ いいですね！？」

「えー、殺<sup>ヤ</sup>っちゃう方がかんたんなのにー」

「殺したらあの壘は没収ですよ！」

「……しょうがないなー」

「まったくわがままなんだから」

見た目はほのぼのキャラなのに、意外に物騒である。見ればホワイトスノウも少し怯えているようだった。

「姫、まだ間に合います。安全なところで隠れていただいた方が……」  
「……イヤ。行く」

言葉少なに言い切る美少女を横目に、セティスは苦笑した。まあ、そう言うだろうとは思っていたが。

「じゃあ、行きましようか」  
「おー」

小さな影一行は、城の裏門を目指し、更に雪道を進んでいった。

夜明けが、近付いていた。

北の塔のてっぺんに続く螺旋階段を登り終え、シェリエルフィアは一人息をつく。

塔の入り口に至るまで、彼女を追う視線を感じていたから、恐らく彼はちゃんと彼女がここにいる事に気付いているだろう。そうではなくても餌は撒いてある。

（本当に……そんな事でおびきよせるのかしら）

エメラルディアの心配はもつともだ。シェリエルフィアを狙う気配を感じているから、それを引き付けて塔に登るなんて、行き当たりばったりもいいところである。

（大丈夫です。ちゃんとそれとなく情報が伝わるようには手配してあります）

（そうなの……？）

（ぬかりはないのでご安心を）

もっとも情報伝達を任された者は、自分がその使者だとは気付いていないだろうが。

見上げれば、満天の星が瞬いている。

（ああ、そうか…。この塔の近くにはエメラルディア様のいらつしやる塔くらいしか光源がないから…）

どこまでも広がる夜空を見てみると、何となく心が澄んでくる気がした。

この国に来て数ヶ月。不意に投げ込まれた状況にしては、そう悪くはなかったかもしれない。色々と物騒な事は続いたが、少なくとも退屈する暇はなかったし。

黒髪の若き王の面影に想いを馳せる。会った途端、心惹かれるものがなかったわけではない。

…まあ、男前だったし。

…性格も良さそうな気がしたし。

（シェリエルフィア　　）

彼女を呼ぶ低い声が、耳に心地よかった。それ以上に、あんな風に誰かと触れ合い、抱きしめられたのは久しぶりだった気もするけれど

胸の痛みを押し殺し、懷から夜食にと持ってきた林檎を取り出した。別れ際、毒林檎の話を振った時のエメラルディアの反応はなかなか面白かった。

（私なら…そうね、半分に切るナイフの片側にだけ毒を塗っておくとか、ナイフを使わないなら、林檎の皮だけに毒を塗るとかね）

ころころと面白そうに答えてくれた。

（なるほど、いい考えですね）

その方法はシェリエルフィアも考え付かなかったわけではないが、他人の考えとして、しかも即答されたのは初めてだ。彼女なら答えてくれるだろうと言う予想が当たった事に、大いに満足してエメラルディアの部屋を辞去する。

もちろん今手にしている赤い実は毒など仕込んではいない。ただ

のおやつである。

（なるほど、表面だけに塗れば、ね）

今、シェリエルフィアがいる塔の向こうに、エメラルディアのいる東の塔の一室が見えていた。

微かに灯りが漏れている。

たぶん、彼が来るとしたら夜が明けた瞬間あたり、まだ少し時間の猶予がある。

（腹が減っては戦はできぬしな）

彼女は胸の内で立てた作戦内容をなぞりながら、赤い林檎に白い歯を立ててかぶりついた。



## 魔女裁判

近衛隊長のマーティンは、使い慣れた剣を片手に自らの息を押し殺す。

警備隊長のデビスには、今夜は何があっても知らない振りをする様に命じてある。極力事を公にしない、と言うのが王の厳命だったからだ。

よって、手駒は限られる。忠誠心と腕で選んだ精鋭が数人。いずれも口が堅い者達である。

しかし、陛下があんな風に激昂するのを初めてみた。マーティンは元々王とは幼馴染でもあり、共に剣や馬を学んだ仲でもある。とは言え、前王妃の死以来、彼とは気安く話しづらくなってしまった。そこにあ的一幕である。

（あの新しい王妃は…なかなか食わせ物かもしれない）  
胸の中でひとりごち、彼は指示された配置に向かった。

東の空が白み始める。

エメラルディアのいる東の塔は、逆光を受けて黒いシルエットになりつつあった。

シェリエルフィアは東屋の柱の影から、反対側に位置する螺旋階段の昇り口を見据える。

人の気配はない。

いや

（誰か来る）

緊張の面持ちで敵の来る方向を見定めたその時、彼女の背後で風を切る音がして、金の髪一房を切り散らしながら風圧がうなじを撫でる。矢は彼女の首を掠めて、目の前に立てられた大きな鏡を破碎

した。

高い音をたてながら飛び散る破片に、身に纏った長衣<sup>ローブ</sup>で自らを庇う。

体制を立て直した時には、陽はその姿を完全に見せていた。

「小賢しい真似を……」

階段の上り口には、苛立ちを隠そうともせず、長身痩躯、黒髪の男が身幅の太い剣を手にとっていた。

（外したか）

忌々しい気持ちを鎮めながら、矢筒からもう一本抜き出し弓に構える。

何か光に反射して狙いが狂ったらしい。何かが割れる音がしたのは…鏡だろうか？

今まで仕掛けたものも、すんでの所でかわされていた。あの、樹氷の森で仕掛けた薬でさえ。

しかしその幸運もこれでおしまいになる。

弓を引き絞るその先に、王妃の姿は丸見えだった。

今度は外さない。

今度こそ

全身に緊張をみなぎらせて弓の弦をめいっばい引いた瞬間、首筋に冷たい剣の切っ先が当てられた。

「我が妻への狼藉、そこまでにして頂きます。――叔母上」

胃の腑が縮みあがりそんな冷徹な声で、リグナルドが彼女の背後から睨み付けていた。

エメラルディアの部屋で何かが光る。

しかし、それが何かを確かめる間もなく螺旋階段の登り口からは男が跳ね上がってきた。片手の山刀が思い切り振り上げられている。すかさずシェリエルフィアは懷にあつたL字の筒の、内側にある小さなつまみを引き絞った。

「食らえ！」

筒の先からは勢いよくチリペッパーと胡椒を入れた水が飛び出す仕組みである。

赤い水は男の顔面に命中し、彼は顔を抑えてうめき声を上げた。

実はエメラルディアに告げた護身術云々は真つ赤なウソである。そんな面倒な訓練は全部サボっていた。代わりに武器になるものを用意してみたと言っわけだ。日々の研究の成果を実践するにはもってこいである。

ブーツに挿してあつた小型のボウガンを抜き出して、撃ちまくる。矢自体はかなり細いが、連射できる改良型である。

「この…小娘が…！」

憤怒の形相で男は迫ってくる。髭に覆われた顔と厚手の長衣コートを着ているので、細い矢は当たってもはじかれてしまふ。何とか皮膚に当てねば、塗つてある薬に意味がない。

（致し方あるまい）

シェリエルフィアはぎりぎりまで男を引き付けてから、彼の顔面狙つて残りの矢を討った。彼の頬に赤い線が引かれる。

（当たった、でも効くか）

悪鬼のごとき男の動きはそれでも止まることなく、シェリエルフィアは塔の縁に追いつめられていた。

「待て！ 話し合おう！ 話せばわかるかもしれん！」

万策尽きて説得に移行。しかし男は一言も口を利かなかった。

「言つとくけど、無口な男がかっこいいと思う女は、まだ目端の利かぬ小娘だけだぞ！？」

男の形相が更に悪化する。

「いやすまん！　嘘だ、人それぞれだ！　だからその手にしている物騒な刀を床に置いてみないか？」

この状況で説得が通じるところで最後にとっておきの爆弾を落とした。

「そんな呆れ顔になったところで最後にとっておきの爆弾を落とした。『お前の女神はもう掴まってるぞ！』」

「！　バカなことを言うな！」

思いもかけない言葉に男の動きが止まる。その動揺に乗じて畳み掛けるようにシェリエルフィアは言った。

「矢を連射してこないのがその証拠だ。彼女の部屋には、もう彼女以外に誰かが来ている」

「嘘だ……」

「嘘だと思うなら、彼女の部屋に行つて確かめてみる」

「……そうしよう。お前を殺した後で」

「いやいやいやいや、先に確かめた方がいいぞ！　その後でゆっくり殺しに来ればいいじゃないか。ちゃんとここで待つてるから！」

「誰が信じるか、そんな事！」

「やっぱり？」

困つたように苦笑するシェリエルフィアの前で、男の体が震えだす。やっと薬が効いてきたらしい。時間稼ぎも楽じゃない。彼女がその変化に安堵を見せようとした瞬間、もう一度男は山刀を大きく振り上げた。

（やば　！）

必死で視線だけを逸らす事無く睨み付けたその時、背後から忍び寄っていた別の男たちが彼を羽交い絞めにする。

「　　お待たせしました、王妃様」

「遅いつ！　死ぬかと思つたわ！」

二人の近衛兵を連れたマーティンが、最後に機敏に現れた。

「この状況でまだ口を利けるとは、お見事ですな」

本気で感心したような風情で、マーティンは王妃を助け起こす。

「陛下が呼びです。どうぞ、東の塔へ。                      ラルフ、お前もだ」

森番のラルフは、両側から拘束されて、がっくりと首を落としていた。

「あなたが自分でここに来るとは思ってなかったわ、リグナルド」  
朗らかとさえ言える口調で、エメラルディアは椅子に座らされたままリグナルドをねめつける。既に手にしていた弓矢は取り上げられていた。

「夫として、妻の危機を見過ごすわけにはいきませんから」

「よく言えたものね！ カティの事を見殺しにしておきながら！」  
リグナルドの黒い瞳が暗く光る。

「全くです。貴女が：彼女を虐待していた事は知っていましたが、よもや命まで奪うとは思いませんでした」

「：何の根拠があつてそんな事を？ 王とて貴婦人に対する侮辱は許されませんよ」

老女の声が低く乾いたものに変わった時、彼女の部屋の扉が開き、塔にいた者達が入ってきた。

「お待たせしました、陛下。王妃様とラルフを連れて参りました」

「ご苦労。                      怪我はありませんかシエリエルフィア？」

「もちろん」

王妃の声に勝気な張りがあるのを見て取って、王は軽く微笑む。  
「それでは陛下                      」

縄に打たれたラルフを引き連れた近衛兵の後ろから、侍従長のハロルドもやってくる。

「年寄りに早朝の呼び出しはちときついすな」

悲しげに首を振りながらハロルドは口髭をしごいた。怖れていた

事がとうとう今、起きようとしているのだ。

既にエメラルディアが腰かけた椅子の後ろには、侍女のセシリアが影の様に立っている。

「慣例に基づき、官位二位ハロルド、及び官位四位のマーティン、そして王家傍流の血を引く侍女セシリア、そなたらの地位と血縁を以て、ここで執り行われる非公開裁判の証人として招集する。罪状は王妃殺害容疑に関する事例であり、この召集は王命である。異論はないな？」

名を呼ばれた三人は、無言で厳かに肯いた。

今から何が始まるのか、何も聞かされていないシエリエルフィアの顔が緊張で強張る。

非公開裁判？

つまり、公にできぬ王家内のごたごたを、誰にも知らせる事無く身内で裁くと言う事か。

「バカな事を……」

ゆったりと一人がけの椅子に座っていたエメラルディアが冷笑する。

彼女の呟きに誰一人答える事無く、老女の部屋は小さな法廷と化していた。

「今から遡る事34年前、先々代の王の御世、彼には一人の美しい娘があった。王は娘を手放すのを惜しみ長らく自らの傍においていたが、ある日森の中を散策していた彼女は何者かに襲われ身ごもってしまう。ここまで事実と相違ないですな」

部屋の中央に立った王の声が、低く冷たく響き渡った。部屋の片隅でラルフがびくりと体を震わせたが、エメラルディアは一言も答えようとせず彼から顔を背ける。

「よろしい。沈黙をもって肯定とみなします。初め、彼女は誰にもその事を告げなかったため、供をしていた筈の森番ラルフが彼女の命により王女の下を離れて崖下の花を摘みに行っていた罪は、

この時不問に処される。やがて王女は女の子を産み落とすが、その娘との面会を固く拒んだ為、生まれた子は秘密裏に乳母に預けられ、次代の王の息子の許婚とする事で立場を護る事が決められていた。これが我が妃、カティヴェルダとなる。この時の彼女の乳母として任命されたのが侍女セシリア・ヒルダ・ランベルクである」

「相違ありませんわ、陛下。カティ様は…とても元気な赤ん坊でした」

ああ、なるほど彼女が付けられていたのはそう言う事か。シエリエルフィアは少しずつあらわになる真実を、一つずつ噛み締める。

「リグナルド、これは一体何の裁判なの？ 殺人容疑などと馬鹿馬鹿しい。私はたまたま空に向かって弓矢の練習をしていただけです。大体、何故カティの事をここで持ち出すというのです」

エメラルディアは憎々しげに甥をにらみつける。しかし王は彼女を傲然と見下ろしたまま続けた。

「やがてカティヴェルダは世継ぎの許婚としてすくすく成長したが、彼女のたつての頼みで母であるエメラルディアと面会を果たした。この時から……叔母上の実の娘に対する巧妙な虐待が始まった」

初めて彼女の傷を見たのはいくつだったろう。自分が8歳、彼女が11？ その時には既に彼女の背中は無数の傷が走っていた。

（誰にも言わないで！ 言ったら絶交するから！）

涙で瞳を潤ませながらすごい剣幕で言い張る少女に、リグナルドはどうする事もできなかった。

「虐待？ 躰ですよ。貴婦人としてあるまじき行為をした時に、母としてすべき折檻をしただけです」

幼女のごとき無邪気さを見せていた老女の顔が段々奇妙に歪んでいくのを、シエリエルフィアは複雑な思いで眺める。

しかし、前王妃の出自がそんなに複雑なものだったとは。結局父親は知れなかったのだろうか。それともやはり秘密裏に処分された

のだろうか。密通でなく陵辱なら彼女が娘を愛せぬ事に同情の余地がなくはないが。

「その頃から　彼女は心に闇を抱えながら成長した。取り決め通り従兄弟の妻となり、娘を産み落とし、王妃としてあるべき正しい姿を守ろうとし続けた。しかし、貴女の彼女への憎しみの矢は止まらなかった。私が極力貴女方を会わせない様に努力していたのにも関わらず」

王の淡々とした語りは続く。

感情を交えぬ王の姿に、シェリエルフィアはこれは何の裁判だろうと、ふと思う。

王妃殺害容疑とは、自分に対するものだろうか。それとも前王妃の？

そもそも前王妃もこの老女が画策して殺したと言っただろうか。老女が見た目どりの上品な貴婦人でない事は初めからわかっていた。

部屋の中に充満する甘い花の香りには、ごく微かにそれ以外の匂いも混ざっていたからだ。

恐らくは神経系の薬　不治の病に侵された者に使う麻酔の一種。それは抗精神薬にもなりえるものだった。

この老女は精神をも犯されたのだ。たぶん、森で汚された時に。そして娘を憎んでいた？

「ホワイトスノウが生まれた時、貴女はとても喜んでくれました。私は　これをきっかけに貴女方母子おやこの間の溝が少しでも埋まる事になればと願っていた。実際貴女は孫の誕生を喜び、折を見ては可愛がってくださった。但し　あくまでカティを愛する事無く」

『何て美しい子なの。醜いお前とは大違いね。罪一つない、穢れな



き赤子だわ、この子は』

『美しい、美しい、私の血を引く娘』

自分を愛さなかった母が、自分を疎み続けた母が、我が子を可愛がる事への複雑な想い。リグナルドとの結婚で少しでも幸福を掴もうとしていたカティヴェルダの精神は、再び病み始める。

何故この子だけ愛されるのだろう。

何故自分は母に愛されぬのだろう。

それは自分が醜いから。

そしてこの赤子が誰よりも美しいから。

愛したいのに、誰よりも大事にしたいのに、我が子へ憎しみが募りそれは絶望へと変化する。

『お願い、リグナルド。あの子を私に近づけないで。あの子を私と同じような目にはあわせたくない』

彼女が再び病みはじめた頃、国を災害と病が襲った。

できるだけ妻の元へ通うリグナルドの顔にも疲労の色が濃くなり始める。

そして彼女は死んだ。塔からその身を翻らせて。

「叔母上、改めて貴女にお聞きします。此度、新たな我が妃を亡きものにしようとした事は揺るぎない事実。しかし、カティを殺したのも貴女ですか？」

静寂が部屋の中を押し包む。

その沈黙を破ったのは、静かに開かれた扉と、そこに現れた少女の声だった。

「違います。お母様は…私を助けようとして塔から落ちたの」

「ホワイトスノウ……!!」

その時、初めてリグナルドの顔に感情らしきものが浮かんた。

「あの日……私は戒めを破ってお母様に会いに行った。部屋の奥では真つ白な顔をしたお母様が、鏡に向かって何かを呟いているのが見えた」

鏡よ鏡、この世で一番美しいのは誰？

哀しげな、苦しみ歪んだ顔で呟いていた王妃。見た途端に怖くて逃げ出した。彼女は追ってきた。鬼のような形相に、ホワイトスノウは必死で逃げた。

お婆様の言う通りだ。お母様は魔女で、美しいと皆に誉めそやされる私を憎んでるんだ。

塔の上で手すりの先に追い詰められた時、カティ顔色が変わった。

『危ない！そこは滑りやすいの！こっちに来て！』

言われても逃げられなかった。怖くて体が竦んでいたのだ。

母の言葉の意味が耳に届いたのはその直後だった。石畳の一つがとつりと強張った足を滑らせる。

「私は……お母様は私が嫌いなんだと思ってた。お婆様がそつとそう教えて下さっていたから。でも違った。お母様は……私を助けようとして、引つ張った反動で落ちてしまったの」

大きな瞳がぐしゃぐしゃと泣き崩れる。

「ごめんなさいお父様。言えなかったの。私のせいでお母様が死んだって、どうしても言えなかったの……。言ったら……お父様にも嫌われる、そう思ったの……」

スカートを握り締め、小さな肩を震わせる娘を、王はそっと抱きしめた。

その背後で、老女は俯いてくつくつと喉を震わせながら笑い出す。やがてその笑い声は愉快でたまらぬように哄笑となつて部屋中に響き渡った。

「何て泣かせる話かしら。あの子が我が子を救おうとするなんて、思つても見なかったわ」

「叔母上！」

殺気立ったりグナルドを制してシエリエルフィアが立ち上がる。

「私を、殺そうとしたのは何故ですか？」

「あら、解らないかしら。もちろん憎かったから。何も知らず幸せそうに嫁いできた貴女の苦しむ顔が見てみたかったから」

面白そうに言い放ったエメラルディアの顔に、シエリエルフィアはようやく思い至った。

突如彼女を襲った不幸。彼女は娘だけを憎んでいたんじゃない。幸せに見えるもの、そして世界そのものを憎んでいるのだ。

「ねえ、貴女には解らないでしょうね。自分の肌が醜く汚され、その汚物が体の中にしみこんであの子ができたわ。あの子が生まれた時、私はこの世にもおぞましいものを産み落としたのだと思った。私の中に染み込んだ身も凍るような穢れが固まってあの子として生ま落ちたのだと思った。…愛せる筈がないじゃない。それなのに…その醜い怪物は私を求めてまわりつこうとするのよ。やつとの思いで遠ざけたと思つたのに」

「それが…御不快でしたか」

「貴女には想像つかないほどにね、シエリエルフィアさん」

一気に想いを吐露すると、老女は満足したように息をつく。

「私が産み落としたものは私のもの。すべてこの世から消し去って見せる。すべて…真っ白な雪に覆いつくされてしまえばいい…」

浅い息をやや弾ませながら椅子に沈み込む老女に、リグナルドの峻烈な言葉が刺さった。

「カティは、確かに貴女に愛されたいと願っていましたが、それでも貴女の所有物ではない。その証拠に…彼女は貴女の呪いに打ち勝って我が子を守ろうとしたのです」

「リグナルド…」

老女の瞳の焦点が淡くぼやけ始めていた。

「貴女の不幸には同情申し上げます。しかし…ご自分の悲しみに捕らわれて他者を…我が子を憎む事しかできなかった貴女を　私は許しません」

「貴方に…我が子を憎むことしかできなかった私の気持ちはわかりませんよ」

不敵な笑みを浮かべ、老女は再度大きな息を付くと、その身を椅子に沈み込ませた。

全ての陰謀を企てていた魔女が、その身をゆっくり縮ませていく。  
「好きに…なさい…」

どこまでも憎しみを浮かべた瞳を王に向け、彼女はその動きをゆっくりと止めていく。

椅子の後ろにいたセシリーがそっと老女の首筋に指を当てた。

「脈が、もう…」

王はその場に膝を着いて王女の肩を掴むと、限りなく厳しい声で言った。

「お婆様はもう母上のもとに逝こうとなさっている。お別れのご挨拶を」

少女は一瞬身をびくりと震わせたが、父の命ずるまま祖母の座る椅子へと近付き、その手をとった。

「お婆様…私にはあんなに優しくしてくださったのに…」

少女の声が嗚咽で震える。

既に息を引き取る寸前だったエメラルディアが、夢見る少女のよ

うな顔で微笑んだ。

「カティ、…そこにいたのね。ずっと探していたのよ？」

老女はそれだけ言うと、ゆっくりとその目を閉じてこの世界に別れを告げた。

朝の光が、彼女の頬を白く染めて光っていた。

## ガラスの棺

「お前さえいなければ！ お前さえ来なければ姫様はこんな風にならずに済んだんだ！」  
エメルディア

既に鼓動を刻まぬ柔らかい笑みの老女を前に、激昂したラルフがあらん限りの声で叫んだ。その太い腕の中には、いつの間にかシェリエルフィアが捉えられている。

「ラルフ、貴様　！」

自分の油断に臍を噛みながら、リグナルドはラルフを睨み付けた。ラルフを捕らえていた筈の近衛兵士は、何か毒針でも刺されたのか、床で昏倒している。

毒と言えばラルフに対してもシェリエルフィアが撃った筈なのだが、激しい怒りだけが彼の精神を支えているのだろうか。よく見れば指先は微かに震えていたが、シェリエルフィアを抱き込んだ腕は固く締まったままびくりとも動かない。

なるほど、森番を担っている彼は優秀な猟師でもある。

野生の獣相手にその息を潜め、忍び寄る腕は生半可なものではない。  
ハンター

長年の狩人生活で固く節くれだった太い指は、シェリエルフィアの白鳥の様な細い首を、今にもへし折らんと食い込ませていた。

流石のシェリエルフィアもこの時ばかりは何かを言う余裕はない。ハロルドやセシリアは息を飲み、マーティンは機を伺いながら気配を殺している。

王の眼光だけが、鋭く彼の動きを牽制していた。

「どつして？」

緊迫した空気の中で、唯ひとり、水の中を泳ぐ様な澄んだ声の水

ワイトスノウが沈黙を破る。

「あ……」

まるでその存在を失念していたかの様に、ラルフに動揺が走る。  
「ずっと……優しくしてくれたのに……ラルフもお婆様と同じように、私に嘘をついていたの？」

エメラルディアに似た、色違いの大きな瞳が彼をじっと見つめた。

「私が口が利けなくなってから、あなたはずっと……こっそり会いに来ては優しくしてくれた。いつも綺麗な花や木の実を持ってきてくれたり、不思議な話や面白い話を聞かせてくれた」

「……………」

「本当はお婆様に私を殺せと命じられたのに、殺さずに森の小屋に匿ってくれてたのでしょうか？」

「……………」

その瞬間、シェリエルフィアの中で全ての謎が繋がった。締められていた首にかかる指の力がわずかに緩む。掠れた声でシェリエルフィアは言った。

「……なるほど、カティ殿の父親はあなたか」

「お前……！！」

真っ赤に顔を染めながら、ラルフが再びシェリエルフィアの首を絞め殺そうとした瞬間、扉の影から丸い影が転がり出てラルフの背に飛び付いた。

その数、7つ。

「な、お前ら……！！」

両手、両足、腰と肩に飛び付いた、小さく丸い影は、万力の様な

力でラルフの自由を奪うと、重心を後ろに反らしてシェリエルフィアを解放する。

「けほ、けほっ、くっく、くう」

くびられそうになった首を押さえながら、シェリエルフィアは前屈みに倒れ込む。床に付く寸前に、リグナルドの腕が彼女を支えた。「あんなところで真実を言い当てるなんて、無謀もいいところじゃないですか？」

見慣れた緊張感のない丸顔が、呆れたようにそつとハンカチを差し出す。

「…お、前にだけは、けほっ、言われたくないわ！」

ようやく戻ってきた子飼いの従者を、彼女は気丈に睨み付けた。

「彼の言うとおりですよ。まったく、貴女のおかげで何度心臓が止まりそうになったか…」

さすがに王相手に同じようには言い返せない。

「すみません…」

些か慚然とした面持ちで、シェリエルフィアは王から目をそらす。

「一応、おれたちはお前の護衛は契約外なんだがな」

ラルフの肩の上に乗り、二の腕で彼の首を締め付けていた小人の一人が呟いた。

「あなたは森の賢人殿…、何故ここに…」

「賢人！…？」「殿！…？？」

シェリエルフィアとセティスが異口同音に驚愕の声をあげる。この国ではこの丸いの達はそんな扱いだったとは。ただの異種族ぬいぐるみ系列だと思っていた。まあ、ちよっぴり不思議な力があるくらいなの？

「だって、こやつらがかってにわしらのしかけたわなにかかったりおちてきたりするし」

「だよなー。かんじんのけものはぜんぜんかからないのに」

「だからあんたらが喋り出すと、一気にシリアスモードが崩れるんですけど」



対して小人たちはまったく動じる事無くいかにも面倒くさそうに答える。

「ちゃんと要求通りの報酬は渡しただろうが！」

「シェリエルフィア様も口調が野蛮になってますよー」

セテイスの細かいつつこみはどこまでも無視される。

「なんでもいいが、これはどうするんだ？」

まったくもって緊張感のない小人の下では、蒼白な顔をしたラルフが頂垂れていた。

倒れかけていた王妃をそつと脇に退けると、王は床に膝をついて狩人<sup>ラルフ</sup>に語りかける。

「シェリエルフィアの言葉が真実だとすれば…叔母上がお前を告訴しなかったのは何故だ？」

まだ歳若い娘には口にするのもおぞましい事だったかもしれないが、それでも誰か一人にでも真実を告げれば相応の処分を負わせる事は出来ただろう。それとも…彼を殺すには忍びなく、口を噤んでいたと言う事だろうか。

彼女が息を引き取った今では、真実を知る由もない。

「いずれにせよ　長きにわたり忠実に仕えてきた身とは言え、そのまま放逐するわけにはいかん。相応の処罰を受けてもらおう」

一欠片の同情もなく、王の低い声は断罪を宣告した。

「…ふ、ははははは…」

やがて頂垂れた男の口から洩れたのは、乾ききった笑いだった。

「殺せばいい。あの方にも、ずっとそう申し上げたのだ。しかし姫様は決してそれを許さなんだ。『お前の血を引くものを、お前の手で葬らせるのが我の復讐だ』と仰った」  
エメラルディア

無口で朴訥な男が恋い焦がれた高貴な少女は、彼の狂的な愛と過ちによってその身を魔女に変えた。呆れるほどの長きにわたり、ただ彼を苦しめる為だけに己の肉親を苦しめ続けていた。

そして　その閉じられた狂気の中で、彼女と共にある事が、それでも彼にとっては幸いだったのだ。カティ娘を憐れまなかったわけでは

ない。不憫な娘を救う事の出来ぬ自分を恥じてもいた。

しかし、彼女によつて受ける支配と苦痛は、彼にとってなにものにも代えがたい至福であつた。

唯一、それでも孫娘を葬り去る事だけではできなかったのは、せめてもの娘への償いだったのだろうか。長年闇の中をさまよい続け、今となつては己自身の本心さえ曖昧模糊として見通すことが叶わぬ。「お前さえ来なければ……」

リグナルドの後ろで床に座り込んだままのシェリエルフィアを見て、男は哀しげに笑つた。

「ラルフ！ お前！」

彼女が気付いた時には遅かつた。

ラルフの唇の端から、赤い血がつつと流れる。奥歯に毒を仕込んであつたらしい。

「あ」

彼を戒めていた小人たちが、その異変に気づいて男の体を放した。入れ替わるようにリグナルドが彼の襟首をつかみあげる。

「ラルフ！ しっかりしろ！ お前の断罪はこんな事では済まさぬ！」

「……の、かたが……い、ないのに……」

「……！」

王の背中が、激しい憤りで強張るのをシェリエルフィアだけが見て取つた。愛する者を失つて、尚生き続ける苦しみを彼は既に味わっている。しかし、男の体はみるみる冷たくなっていく。

「マーティン、ホワイツスノウを連れて行ってくれ」

感情を押し殺したりグナルドの声が、有無を言わせぬ口調で命じた。

「お父さま！」

「ハロルド、セシリア、お前達は叔母上の葬儀の準備を。叔母上は急な病により心の臓を憫くされたと皆に申し伝えよ」

「は。承知しました」

まるで親しいものを見送るかのように仇を抱きかかえる王の後ろ姿に、異を唱えられるものがある筈もなかった。

「セテイス、賢人殿達には改めて礼を示す故、今日は土産ワインをお持ちいただいて御送りせよ」

「かしこまりました」

そうして、エメラルディアの部屋には王と虫の息のラルフ、そしてシェリエルフィアが残される。

「…シェリエルフィア」

「はい」

「ラルフは…私にとって師も同然でした。森においての彼は万能で…狩りも、それ以外の事も、たくさん教わった。だから」

「陛下？」

リグナルドはラルフの体をそつと横たわらせると、静かに腰の剣を引き抜き、目にもとまらぬ鮮やかな一閃で、罪人の心臓を一突きに突き刺した。ラルフの口からごぼりと血が溢れ、しかし苦しみに歪む事無く彼は息絶える。

「！」

固唾を飲みながらも視線を逸らさぬシェリエルフィアの前で、王は言った。

「だから、王である我が手に寄つてこの罪を裁くのが、せめてもの彼への温情となるでしょう」

突き刺した剣を一気に引き上げ、素早い一振りで血を払う。彼は剣を鞘に納めて、穏やかな笑顔でシェリエルフィアを振り返った。

「そしてもうひとつ。彼の言った事は間違つてます。叔母上がおかしくなったのは、貴女のせいではない。貴女は、何も気にすることはありません」

穏やかに微笑んでいるのに、彼が泣いているように見えるのは何故だろう。

二つの亡骸を前に、シェリエルフィアはぼんやりと思う。

「それは…貴方がエメラルディア様に盛っていた薬の事ですか？」

リグナルドは軽く目を瞠ると、小さく苦笑を漏らす。

「やはり、気付いてましたか」

「花の…香りがしました。飾られたものに混じってセイヨウケシの甘い香りが。あの花は煎じれば心臓を弱め、尚且つ幻想を見やすくなります」

「…ああ、本当に貴女は侮れない。その通りです。妻が…カティが亡くなってから、私は復讐を誓いました。どんな理由があったにせよ…カティを苦しめ続けた叔母上が、どうしても許せなかった」

「私を遠国からわざわざ嫁がせたのもそのためですか？」

「ええ。薬だけでは弱い。彼女を刺激する存在として、貴女以上の適任はいませんでした」

亡き娘の後釜。娘が死ぬきつかけとなった、世にも美しい遠国の姫君。

彼女は娘を憎んでいた。疎んじ、虐待しながらも、娘を己のものと信じていた。その娘を失うきつかけとなった女が娘の後釜に座るのだから、これ以上彼女の神経を逆撫でする存在はないだろう。

「すべて、私の罪です。公にすることは叶いませんが…私の私怨と思惑が今日の事態を招く結果となりました。貴女は巻き込まれただけで、責任の所在などある筈もない。それだけは言っておかねばと思います」

冷静に、淡々と語る王の姿を見つめ、シェリエルフィアはそつと立ち上がると彼の体を抱きしめる。

「シェリエルフィア」

「泣いて、いいですよ？」

「え」

「一度、思い切り泣き喚いてみたいと仰ってたでしょう？ いいですよ。今なら誰もいませんから」

長身の彼に、シェリエルフィアは精一杯背伸びをしながら彼の体

を包み込む。幼いわが子を抱こうとする母の様に。

彼はしばらくそのまま動けずにいたが、やがてその腕を彼女の背に回すと、力の限り抱きしめた。

背骨が折れそうなほどの力だった。

溺れる者がしがみ付く様なその力を、それでもシエリエルフィアは必死になって受け止める。

しかしあまりの重みに膝をつき、合わせるようにリグナルドも膝立ちになったが、彼女を抱きしめる腕はそのままだった。

泣き喚く声は聞こえない。ただ浅い息と震える肩を首筋に感じるだけだ。

それでも 彼が泣いているのがわかった。  
救えなかった妻。

口を利くことすらできなくなった娘。

師と親しんだ男の内側の闇。

魔女と化した老女の最期の言葉。

すべてが、彼を打ちのめすには充分なものだったはずだ。

ずっと、ひとりで耐えてきたのだろうか。

娘を守り、国を守り、己の心だけを犠牲にしながら、その罪をすべて引き受ける覚悟で

最後の最後まで、彼は王だった。

彼自身の手ですべてに決着をつけた。

だから今だけは、解放してあげたかった。やがてそれでもあるべき王の姿に戻るであろう、その時まで。

朝陽がさすその部屋で、どれくらいそうしていたのか。

「貴女は…優しすぎますよ、シエリエルフィア」

どこか苦しげな、けれど既にいつもの落ち着きを取り戻した声で王が囁く。

「誰にでも言うわけではないですし…たまには誰かに優しくするのもいいでしょ…」

彼女のささやきは最後まで続かなかった。

怪訝に思った王が抱きしめていた腕の力を緩めると、彼にもたれかかるように彼女の体が崩れ落ちる。その視界に入った白い首筋は雪よりも更に白い。

「シェリエルファイア…？」

そのままずりりと床に倒れ込んだ彼女の、羽織っていた長衣ローブが肩からずり落ち、血の滲んだドレスが露わになった。脇腹に、小さな鏡の破片が刺さっている。東の塔でエメラルディアの矢に鏡が割れた時のものと、リグナルドは思い至った。

見れば、彼女の唇は血の気を失い、紫色に変化している。どうやら必死で痛くない振りをしていたらしい。負けず嫌いもいいところである。

「シェリエルファイア！」

王の叫びは、もう彼女の耳には届いていなかった。

王家直系であるエメラルディアの葬儀は、しめやかに執り行われた。  
た。

言葉を取り戻した孫娘が、ホワイトスノウ厳粛に別れの言葉を告げる。

一方、森番ラルフの死は、悪漢によってかどわかされた王女を命がけで救い出したものとして家族に伝えられる。彼の名誉を守る事が、ひいては王家の名誉を守る事にも繋がっていたからだ。

彼の年老いた妻は、ぼんやりとその言葉を受け入れた。

王は、単身姫を救い出した彼に感謝を表し、彼の妻に名誉と褒美とを与えたのだった。

真実はすべて非公式に、最低限の人数で処理された。

やがて雪解けは春を呼び、悲しみは冬の雪と共に忘れ去られるかのように見えていた。

森を抜けた丘には下草が生えそろう、可憐な花々が大地を彩っている。

風はさわやかにふき、その心地よさに彼は目を細めた。雪はすべてその姿を水と化し、大地を潤して消える。全てが祝福を示すような季節の中で、ようやく彼は目当てのものを見つけた。

丘の上にはガラスの棺が据え置かれ、その周りでは小さな森の賢人たちが悲しげな声を漏らしてうずくまっている。

彼は馬から下りてそつと近づくと、棺の中をのぞき込んだ。

花々に埋もれるように、金髪の王妃が横たわっている。両の手を胸の上で組み、長い睫毛は伏せられ、その頬はやはり雪のように白く、唇だけが薄い桃色をたたえて微かに開いていた。

「やっと見つけた」

王はそう呟くと、厳かに棺の前に跪いた。

## ガラスの棺（後書き）

次回最終話。



真白き雪の降る如く（前書き）

フィナーレ！

## 真白き雪の降る如く

「なんで！？ 何で今更城<sup>いえで</sup>出なんてしちゃうの！？」

全く同じ事を、今朝彼女の父親でもある王にも訊かれたな〜と、セティスはこっそり苦笑した。

やはり今の彼女と同じく釈然としない慄然とした面持ちで。彼等からしてみたら当然のリアクションだろうが、セティスからしたら『あーきたか』くらいの心持ちでしかない。むしろ今までよく保った方だろう。

脇腹に刺さったガラスの欠片により失血し、王妃が一時意識不明の重態に陥っていたのは1ヶ月も前の事だ。

甲斐甲斐しい王の指図と侍女達の完璧な世話に寄り、傷跡は残ったものの、完全に治癒したのが一週間前。

そして彼女はいなくなつた。

たった一枚の書き置きを残して。

『旅に出ます。探さないで下さい』

あまりに何のひねりもない文面に、セティスは思わず赤面したくらいだ。

仮にも一国の王妃なんだから、もうちょっと、こう…

公的には王妃は傷の保養の為、温泉旅行に行っている事になっている。

ロイヤルホットスバ  
王族専用温泉。

その内それが王妃失踪の暗号コードになるかもしれない。

にしても。

目の前で花の蕾の様な唇を思い切りへの字にしている少女を前に、果たして父親にしたのと同じ説明をして良いのだろうかとセティスは迷う。

少しずつ明るさを取り戻しているとは言え、未だ母親と祖母の確執、その原因となった男の死はさすがにまだ癒え切ってはいないだろう。

この少女に色々説明するには、語彙を選ぶデリケートさが必要だ。  
「えーと、つまり…」

…さて、王には何と説明したんだったか

「えーと、つまり…、ぶっちゃけあの方は慣れてないんですよ、いわゆる『幸せ家族』と言うやつに」

「…どういう事だ？」

どうみても幸せと言える家族を作れなかったリグナルドは、セティスの言葉に過剰な反応を示す。

「あ、いやいやこちらほどこじれちゃあいませんでしたけどね？」

シェリエルフィア様の御生母は、夫である彼女の父君の代わりに毒を受けて亡くなったんです」

「それは彼女から…」

以前聞いた。確か、一度目の失踪から戻ってきた時だ。

「ええ。現陛下は元々継承権の低い第五王子だったんですが、上の四人が王位を争った上に共倒れしちゃいまして、予想もしなかった急な即位でした。予想外の伏兵とか言われちゃって、当然政敵も多く…」

脅迫を兼ねた食事への毒混入は、王位継承してすぐの事だった。

王位を継ぐ時には彼には既には既に妻子がいたのだが、それが当時一粒種だったシェリエルフィアである。

父が王位を継いだ矢先に母は父の代わりに亡くなった。その死に際、娘に父を守る様に言い残して。

姫、姫、幼くとも賢い私の娘

母の代わりにしつかり父上を守るのですよ

「姫様は必死に勉強なさいました。まずは母君を殺した毒について、そりゃあもう鬼の様な形相で」

おかげで毒の知識と耐性は只ならぬほど身に付いた。勢い余って錬金術やら何やらにもはまりこんだのは、とりあえずここでは置いておく。

「姫様はのめり込むと周りが見えなくなる性格タチでして、その…気が付いた時には父君が再婚なさっておいでだったんです…しかもあつと言つ間に妹が四人、みたいなの？」

一応正妻没後の話である事は、父親の名誉の為に明言しておこうが、繊細な年頃の少女にとっては動揺する事この上ない。

「……………」

「しかもあの美貌であの性格でしょう。義理の母上とは完全に打ち解けるタイミングを逸しちゃったりしましてね」

二度目の母は決して悪い人ではなかったが、凡庸な顔立ちに政治的経済的強力な後ろ楯が複雑なプライドとなつて、うまく義理の娘と打ち解けられなかった。

全くどちらにも困つたもんだと、セティスは首を竦めて両手の平を天に向ける。

「しかし、そんな様子は今まで微塵も…」

「ええ。だから…この国に来て色々な事が決着するまでの数カ月は、いわゆる『非日常』だったから」

そこまで聞いて、察しの良いリグナルドはなるほどと呟いた。

事件解決と真相究明にかられてそれどころではなかったと言う事だ。

「大丈夫ですよ。落ち着いたら戻ってきます」

丸い頬にえくぼを浮かべながら、呑気な声で言ってみる。

「…本当か？」

疑り深い王の眼差しに「たぶん」と言う言葉が口の中で淡く溶けた。

ちなみに彼女がセティスを拾ったのも家出中の事である。セティスを拾った途端、「良い実験体が入った！」と家出理由も忘れて嬉々としながら城に戻ったのは、セティスにとって微妙にほろ苦い思い出である。

「探しに行かねばな」

「え？ 行くんですか！？」

本気で驚く従者に、王は大仰にため息を吐きながら笑って見せた。「家出と言うのはそもそも探して欲しくするものだろう？」

セティスは深く腰を折って頭を垂れる。

「御慧眼、心より敬服申し上げます」

この人、思った以上に世話好き？

と言うより、よっぽど手のかかる女ばかり相手<sup>ひと</sup>にしてきたんだろ  
うな、なんて事は、もちろん思ってもおくびにも出さないセティス  
であった。

以上、回想終わり。

そして以下要約。

「えーと、だからつまり、お父様に任せて置けば、まったくノープ  
ロプレミアムって事ですよ」

そう言って、未だ不満顔の少女に彼は器用に片目を瞑ってみせた。

「こんなところにいたんですね」

棺の前で膝をつき、リグナルドは優しい声で囁くと、眠る彼女の頬にそつと手のひらを合わせる。

背後から険しい声が響いた。

「やっときたか。これをつかえ」

涙にくれている小人たちの中で、唯一泣かずに気難しい顔をしていたリーダー格が小さな壘を渡した。

「言っておくが、一歩間違えば命に係わる代物だ。心して使うんだな」

無言で王は受け取ると、一瞬の躊躇も見せず壘の中身を口の中に流し込み、僅かに開いた彼女の唇に注ぎ込んだ。小人たちの驚愕の雰囲気背後で充満する。

液体が触れた喉の奥が、焼けるように熱い。なるほど、これは重ねた唇から一滴も漏らす事無く彼女の口中に注ぎ込むと、彼の下でこくりと飲み込む音がした。

彼は顔を離して彼女の顔を覗き込む。頬に赤みが差し、眉が苦しげに歪んでいた。

唇が小さく震えだすのを確認し、王は低い声で彼女の名を呼んだ。

「シェリエルフィア？」

「……………！！！！ げほっ！！ げほげほっ！！」

一気にこみ上げる液体を手のひらで抑えつつ、上品とは言い難い声で彼女は激しくむせこんだ。

「な、なにを一体 ……！！」

思わず叫びながら目を覚ますと、吹き出しそうになっている王の姿が目に入る。

「飲ませ…っ、え？ 陛下？」

「おはようございます。シェリエルフィア」

「おきた！」

「やったおきたぞ！」

「これでやっとかえせる……………！！！！」

小人たちが一斉に歓喜の声を上げていた。

「いや〜、おれたちもおしかけられて、毎晩酔っぱらっては絡んで暴れるから迷惑してたんだ。迎えに来たんならさっさともってかえってくれ」

「貴様ら、余計な事をつ！」

真っ赤になつて激怒するシェリエルフィアに、小人たちはきやー騒ぎながら逃げまくる。

「なるほど、それじゃあこれは迎え酒と言う奴ですね」

リグナルドは感心したように手の中の小瓶を振って見せた。心なしか、その顔も赤い。

「それは！ 秘蔵の梅酒！」  
ブラムウオッカ

彼女が嫁ぐ際、大事に大事に持ってきた薬棚の中身のほとんどは、彼女が異国から取り寄せたり丹精込めて作った酒だった。特に彼女が生まれた年に母親がその年生った実で作ったと言われる梅酒は、既に古酒然とした風格のある琥珀を帯びていて、そのアルコール度数は60度を超えると言われている。酒に弱いものが飲めば、中毒死しかねない危険な代物でもあった。

幸運な事に、王はそこそこ強い酒には慣れている。

その匂いを嗅いだ途端、液体の危険性は重々承知していたが、そこで怯んでは沽券に関わる。

何より、彼女への愛がそれで試されていたとも言える。

「とりあえず、そこから出てきてください」

「え？ あ、きやあ！」

可愛らしい悲鳴を上げると、彼女は花で埋められたガラスの棺からそつと身を起こす。

「きやーとはなんだ、おれたちのしよくりょうこをとりあげていて「そうだそうだ、おまえらのべつどじゃちいさすぎる、お、ここにいいものが」とかいいいながらかってにもちだしたんじゃないか」「おれたちがどんなおもいで、にとめぎめないようにネムリバナをつめこんだか……」

「お前らか、この花を詰め込んだのは！」

俗称：ネムリバナ、正式名称：スリーピングビューティー、その花の香りを嗅ぐと永遠に眠り続けると言われているが定かではない。とは言え鎮静効果があるのは確かなようだ。

「あー、妻が申し訳ない。どうぞ、この入れ物はお持ち帰りください」

「やったー。もってかえるぞ」

「おまえもさつさとかえれよ、よっぱらい」

小人たちは棺（に見えていた備蓄箱）の中の花を捨てると、全員で頭上高く持ち上げながら家の中へと運んで行った。

はいほー、はいほーと言うのどかな歌声が、ヒバリの声と共に春の青空に溶けて遠ざかっていく。

「我々も帰りましょうか」

差し出された王の手に、シェリエルフィアはそっぽを向いた。

「いやです」

「なぜ？」

「わたくし…自信がありません」

「自信？ 何のですか？」

「その…姫の母親になる事も、貴方の妻になる事も」

「そんな事は」

言いながら立ち上がるうとしたリグナルドの体がぐらりと揺れた。今更アルコールが回ってきたらしい。

「陛下！ 大丈夫ですか！？」

慌ててそばに寄った途端、両腕を掴まれて身動きがとれなくなる。

「陛、下…！」

「逃げないで」

下から真剣な表情で見詰められて、心臓がとくと鳴った。

「何をそんなに怖がってるんですか？」

リグナルドの問いに、シェリエルフィアは唇を噛み締めて俯くしかできなかった。



「本当は…私のせいじゃないのかしら」

「ホワイトスノウ姫？」

おやつバターサンドクッキーに伸ばそうとした手が止まる。

「だって…結局私がお母様を殺したようなものだし…」

「あれは事故ですよ。姫が突き落としたわけじゃないんだから」

「でも……お母様の事が嫌いだったのは本当なの」

屋上の階段の手すりに座り、細い足をぶらぶらさせながら、少女は苦しげにつぶやく。

「お母様も…私の事が嫌いなんだと思ってた。いつも私の事を見ると、辛そうに顔を背けていたし」

青白い肌の色、艶を失くした茶色の髪、面糞れた病人の顔は、それだけでも子供の恐怖を煽るには充分だった。せめて優しい言葉でもかけられていたら違っただろうが。

「お父様もお母様のそばにばかり行つてらしたし」

淋しかったと言う事なのだろう。誰にでも美しいとほめそやされる少女は、それでも一番求めていた両親の愛に飢えていた。

「姫様に良い事をお教えしましょう」

半分に割ったバターサンドクッキーを口に放り込みながら、セテイスは何の気負いもなく軽い口調で言った。

「子供はね、親を恨んでいいんです」

「え！？　だって、そんな…」

「僕だって僕を捨てた親を長らく恨んでたし、シェリエルフィア様だってお母様が亡くなった後すぐに再婚したお父様をずっと恨んでました」

「そうなの……？」

「子供は目に見える愛情を食べなきゃ生きていけないから、それを貰えないと感情が裏返って恨んじやうんです。それは当たり前だし

仕方のない事なんです」

言いながら、彼は美味しそうにクッキーを咀嚼する。バターの中に練りこまれたレーズンが最高。

「でも…お父様はシェリエル母様が治ったら、もう一緒にベッドで寝ちゃダメだつて…」

それは大人の事情つて奴だろう。

「あたしだって新しいお母様と一緒に寝てみたいのに」

そっちなか！

唇を尖らせる少女に、セティスは苦笑を浮かべてフォローした。

「お父様が忙しい時にお義母様に頼んでみたら、たぶんいいって言  
うんじゃないかなあ」

「そう、なの？」

どうもこの少女は、色々ありすぎて精神的な成長具合が処々アン  
バランスなようだ。変なところで幼い。まあ、今後の軌道修正で何  
とかなるだろう。

「お父様を恨んでも、お母様を嫌いになっても構いません。ただ…  
いつか認めて差し上げて下さい」

「何を？」

いとけなく見上げる少女に、彼は残り半分のクッキーを差し出し  
た。

「お父様がお母様を大好きだった事、お母様がホワイトスノウ様を  
憎んでしまった事」

「！」

「それでも…お母様も姫の事を愛していたと言う事を」

黒檀の瞳が大きく見開かれ、僅かに潤んで映りこんだ光を揺らす。  
唇を開きかけては閉じ、何度目かの逡巡で、彼女は低く答えた。

「…いつか？」

「ええ。いつか姫様が大人になった時で構いません。でもいつかき  
ちんと理解して、そういう方だったと認めて差し上げればそれでい  
いんです」

少女は渡されたクツキーを片手に考え込む。まだ、彼女には難しいかもしれない。それでも、そうする事でしか誰も救われないだろう。

「わかった。考えてみる」

どんな葛藤がその小さな胸の内であったのかは分からないが、少女は豊かな黒髪をふわりと揺らして小さく肯いた。

「はい」

次のクツキーに手を出しながら、セティスは屈託のない顔を見せて笑った。

「わたくしの…奥の小部屋で、こんなものを見つけました」

俯きながら差し出された小さな紙は、折りたたまれた部分がかなり黄ばんだ古いものである。

リグナルドは受け取って中を開くと、微かに赤面する。

中身は城中の秘密の抜け道が丹念に描きこまれた地図である。しかしそれだけではなく、下に小さな文字で誓いの言葉と署名が入っていた。幼い少年のものと思われるその字はこんな事を書いている。『ぼくはカティをいちばんきれいでいちばんだいじだといいつづけることをここにちかいます。リグナルド・エンティレット・ガルダ・<sup>フォース</sup>四世』

「これは…」

「小部屋の鏡の中にかくしてありました。きっと、大切なものだったでしょう」

「……そうですか」

「まだ、カティ様を愛してらっしゃるのでしょうか？」

「はい」

何の躊躇いもなくリグナルドは言った。

「私は許せませんでした」

顔を逸らしたままシェリエルフィアは言い返す。

「その事がですか？」

「いえ、父の事が。母を愛していたと言いながら、すぐに別の女性を愛せる父がずっと許せませんでした。そんな私に：貴方の妻や姫の母になる資格があるのでしょうか」

最後の方は消え入りそうな声になっている。リグナルドはそんな彼女を見つめながら、思い切って切り出した。

「実は前々から言おうと思ってたんですが…」

ぴくりとシェリエルフィアの肩が跳ねる。

…前々から？　って一体何を？　聴きたくない。怖い。

マイナス思考の無限ループに陥っている彼女の耳に、予想だにしなかった言葉が続いた。

「我が国の温泉水質調査室を作ろうかと思ってるんです」

「……………は？」

「今後はやはり外交による観光資源も必要でしょうし、産後の家畜などを浸からせるのもいいらしい。その真偽を確かめつつちゃんと管理できる部署を作ろうかと」

何を言ってるのだろう、この人は。いやでもすつごく面白そうだけど。水質管理ならまずペーハーと硬度計が必要だよな。いやいや成分分析が先か。試験紙と試験薬って都から取り寄せられたっけ？

「あと、林檎や穀物の交配について研究部署を作りたいですね。自然災害などに対して丈夫な品種を作ればそれに越したことはない」

ぴかぴかとシェリエルフィアの研究欲が点滅し始める。ちよつと待って。交配となったら専用の温室が欲しい。いくつか条件を変えられるように…あ、温泉の地熱を利用したらどうだろう。私ったらナイスアイディア！

「…興味ないですか？」

「え、いや、でも！」

既に頭の中の算段が飛びまくっているシェリエルフィアに、リグナルドはとどめを刺した。

「私が求めているのは優秀で熱心な研究者です。今もない事はありませんが、いまひとつ冷遇されているので立場の確立を求められている。王妃が自ら名誉職で参加すれば、彼らも喜ぶでしょう。…もちろん無理にとは言いませんが」

「無理なんてそんな！ これでも基礎知識や実験経験に関してはこれらの素人学者には引けを取らないつもりですが！」

「じゃ、決まりですね」

満足そうにほほ笑むリグナルドの言葉に、完全に嵌められた事に気付く。

きつとあのぶよぶよ従者が入れ知恵したに違いない。王からせしめただろう臨時収入を半分は取り返してやるから覚えてるよ！？  
ぶつぶつと凶悪な言葉を呟く王妃を、リグナルドは不意に抱きしめる。

「それに…貴女がいなくなったら私は誰の胸で啼き喚けと言うんです？」

ぎゃー、不意打ち！ 近い！ 急に近すぎるから！

突然の抱擁に、シェリエルフィアの脳はパニックに陥った。

そう言えばこの人、手が早かったんだ！ 耳にかかる吐息が熱くてくすぐったい。心臓が倍の速度で踊りだした。

「結局…泣き喚いたりなんかしなかったじゃないですか」

拗ねた様な声になったのは、せめてもの抵抗だったかもしれない。  
「本当に、そう思うのか？」

いきなり敬語じゃなくなるし！ 声が！ こもって超色っぽいんですけど！

耳たぶを噛まれるような感触にうなじをほんのり赤く染めながら、シェリエルフィアそれでも完全に抵抗できなかった。

「…ちよつと酔っぱらったかな」

アルコールのせいかな！？

心の中の突っ込みは、すべて喉元で押し止められる。

「仕方ない。貴女が私を城に連れて帰ってください」

「……………は？」

一体どうやって？ 碧い目を大きく見開いたシェリエルフィアに、リグナルドはにつこり笑ってもう一度、金髪に指を絡めながら唇を重ねた。

「セテイス、こっちこっち！」

「だから姫様！ お迎えなんて必要ないと……」

「確かに見えたんだもの！ こっちの林檎並木から馬をひいた二人が……」

引つ張られて走る城の西門の向こうに、馬の手綱を引いたシェリエルフィアと、その反対側の手を握って一緒に歩いてくる王が見える。どうやらうまく懐柔できたらしい。

（ふうん……じゃあ、そろそろいいか）

彼は心の中で呟いて指笛を鳴らす。

人の耳には聴こえ辛いその音に、どこからともなく一羽の鷹が舞い降りた。

「よし、よし、これを頼む」

幅広の金具腕輪に止まった小柄な鷹の足に、用意してあった手紙を括り付ける。

『娘が幸せになれそうなのを見届けたら知らせよ。それがお前のこの国での最後の仕事じゃ』

シェリエルフィアの父王から命じられたのは、国を離れる前夜の事だ。

「無事、ご褒美の金貨が届きますように」

飛び立った鷹に向かってぺちぺち手を合わせる。

にしても、あの二人は何を話しているのだろう？ 王様はにこにこしているし、王妃様は微妙に不機嫌そうだ。でも、握られた手を振り払うつもりはないらしい。

よきかなよきかな。

「セテイス、早くつてば！」

姫君は今にも西門を出ていきそうだ。

「待ってください、姫。今行きますってば〜」

城の西門に続く道の、両側に植えられているのはすべて林檎の木だったらしい。可憐な白い花が満開に咲き誇る中を、どこか拗ねた様な、照れ隠しに怒るしかできない様な声が響いている。

「本当にまっすぐ歩けないんですか！？」

「そう言ってるじゃないですか。それができたらとくに馬に乗っています」

にこにこと楽しそうな顔の王は、酔っている様にも見えるし、単純に機嫌が良さそうに見えなくもない。

風がざあっと吹いて、白い小さな花を揺らして散らした。

「…ああ、そう言えばホワイトスノウの懐妊が分かったのもこんな日でした」

「え…？」

「林檎の花が満開で、花びらが散る中に立ったカティが嬉しそうに言ったんです。『女の子だったらこんな子がいいわね。こんな風に雪の様な花びらが散る、美しい春の日の様な子が』」

「え？ ホワイトスノウ姫って雪の日生まれだったんじゃないんですか？」

驚くシェリエルフィアに、王はくすくす笑って見せる。

「この国の3分の1は雪の日生まれですよ。まあ、あの子が生まれ

た日も雪は降っていました」

「てつきり降る雪にちなんだお名前にしたのだと…」

「ええ。だからこれは私とカティの間だけの秘密でした。私たちはその時喜びに満ちていて…カティはとても嬉しそうにあの子の名前を考えていました」

「…いいんですか？ お二人の秘密を私に話してしまつて」

「貴女には、知っておいてほしかったんです」

辛いだけじゃない、幸福な時間も確かにあつたのだと。

花が散っている。

白く散りゆく花は、シェリエルフィアの過去の記憶も甦らせる。

あの時散っていた花は…光に似た花は何だったろう？ 母の最期に話したあの日…

「いつか…私も陛下に聞いて頂きたい事があります」

「いつか？」

「ええ。こんな、雪の様に降る白い花の記憶を」

「楽しみにしています」

握られた手が暖かい。熱いほどこかもしれないが、離す気は既に毛頭もなかった。

城の姿が見えている。

西門からは、ホワイトスノウと彼女を追いかける丸い従者の姿が見えていた。

「すごいでしょ！ これゼー…んぶ林檎の樹よ！ 秋に実が生つたらセティスにいっぱい食べさせてあげる！」

少女ははしゃぎながら林檎並木を駆け抜ける。両腕を天に広げ、散る花びらを嬉しそうに掴もうとしていた。



「ねえ、春なのに、林檎の花びらがまるで雪みたい」

セティスはゆつくりと彼女を追いかけてながら、その幸福な情景を眺めた。くるくると踊る様な少女の向こうからは満ち足りた笑顔で歩いてくる国王夫妻が見える。舞い散る花びらは、確かに雪の様に、祝福の紙ふぶきの様にも見えていた。

真白き雪の降る如く　お前の元に降り積もれ  
穢れ無き花散る如く　地上の澱を覆い尽せ

「ええ、本当だ…すごく綺麗ですね」

少年は、人の愛憎や営みなど全くものともしない光溢れる世界の眩しさと美しさに、目を細めて微笑んだ。

## 真白き雪の降る如く（後書き）

最後までお読み頂き有難うございました！

この作品は、拙い部分も多々有るとは言え、書いていてとても楽しい物語でした。

読んで下さった方が、作者同様楽しんで頂けたならとても嬉しいです。

また、連載中お気に入り登録や感想、評価など下さった方にも心よりお礼申し上げます。

もしお気に召せば、いつでもコメントなどお気軽にお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5007o/>

---

真白き雪の降る如く

2011年4月27日14時25分発行